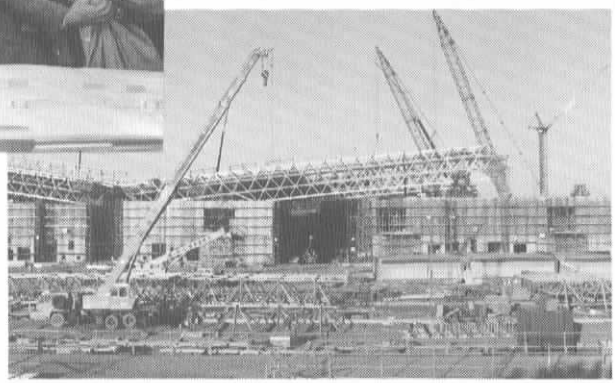
創立40周年

記念誌

東日本建築教育研究会

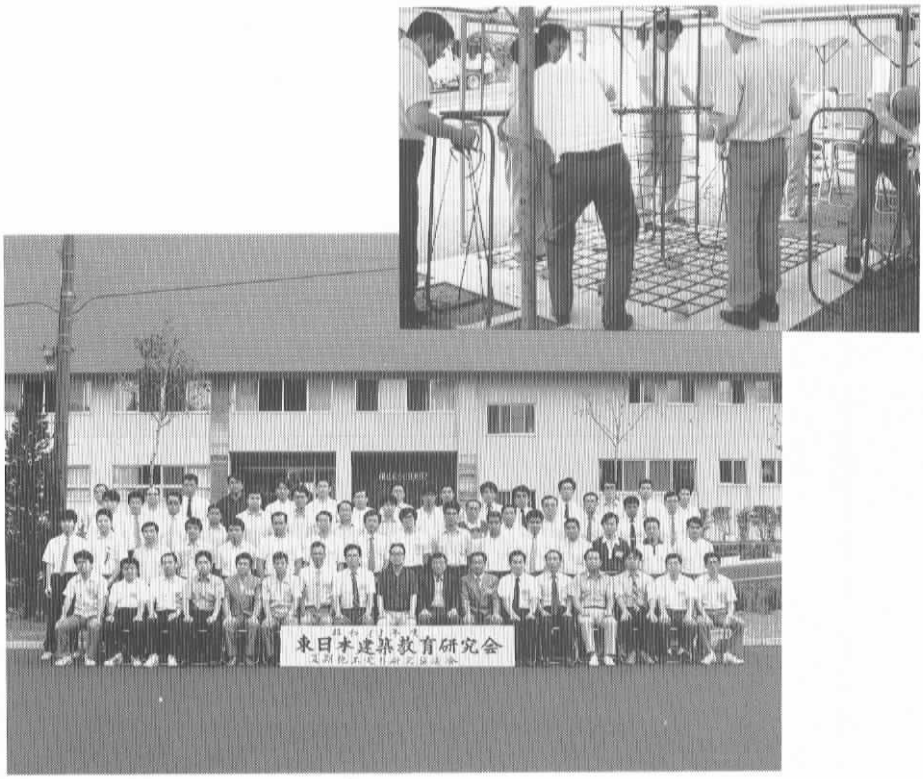
東日本建築教育研究会第39回静岡大会
総会風景
平成元年６月９日・10日

計画分科会『建築計画・設備の実験実習』
実習風景（蔵前工業高校にて）
昭和61年８月１日・２日



構造分科会『幕張メッセ工事現場』見学風景
平成元年３月２日

製図分科会「CADの実技演習と建設会社での利用状況」
（埼玉県立大宮工業高校）
平成元年７月25・26日



施工分科会「建築施工実習の実践指導について」
（東京工業高校赤倉研修所にて）
昭和63年８月４～６日

創立40周年

記念誌

東日本建築教育研究会

本会創立40周年記念誌発刊に際して

東日本建築教育研究会会長　清　水　守　男

中国の故事に「四十而不惑」とある，40年の重みを表す言葉であると思う。本研究会も，昭和26年に発足し，本年で40年を迎えることになる。まさに，本会の充実した今日を表した言葉でもある。この間，歴代の理事長，会長を中心にして会員の方々の，たゆまぬ研鑽と実践があり，今日の栄えある東日本建築教育研究会を築かれたと考える。40周年の記念誌発刊に当たり，深く敬意を表すとともに，心からお祝い申しあげる。

本会の業績のあとをふりかえってみると，発足以来，工業教育の課題に取り組み，改善，研究に大きな役割を果してきた。

学習指導要領の手引書作成への参画，教科書の編集，産業設備基準案の作成，全国工業高校長協会の標準テストの作成，視聴覚教材の開発，JISの選定，更には，工業高校改革プロジェクトへの提言など，数々の実績をふまえてきた。本誌「研究会のあゆみ」の各頁からも感銘深く読みとられる。特に，学校教育の規範であるべき，学習指導要領について，各改訂時において，作成の協力や啓蒙に大きな力を発揮されていることは，高く評価される。今後共，この先輩諸氏の実践と伝統を引き継ぎ，継承，発展させなくてはならない。

さて，今日の現状をみると，科学技術の進歩と経済の発展は，情報化，国際化，高齢化など社会の各方面に大きな変化をもたらした。この中にあって，工業教育も，教育内容，方法を積極的に変革していかなくてはならない。

すでに，新高等学校学習指導要領は，平成元年３月15日に告示され，平成６年度から学年進行で実施されることになった。この中の，工業の「各学科共通に履修させる科目」について，これまでの「工業基礎」，「実習」，「製図」及び「工業数理」の４科目に加え，「情報技術基礎」と「課題研究」が新しく設けられた。

「情報技術基礎」については，今日の情報化社会に対応し，実際に活用し，正しく利用する能力を育てる，「課題研究」については，課題の解決を図る学習を通して，問題解決の能力や自発的，創造的な学習態度を育てることが重視されている。今日の社会の現状をみるとき，まさに取り組まなくてはならない，教育の課題であると考える。

ところで，平成元年11月30日に「現行の高等学校学習指導要領の特例（移行措置）」を定める告示が出された。新科目「課題研究」については，平成２年度から実施できる措置が示された。今や，工業教育の中で実践をし，指導をしなくてはならない。本研究会でも，まさに，創意や研究に会員の衆知を集め，この指導に取り組みたいと考える。

おわりに，40周年の記念行事に当たり，本会を創設し，多難な時代をも，常に熱い情熱と建築教育に献身的な努力を重ねてこられた先輩諸氏のご労苦に，深く感謝申しあげる。更に，関係賛助会員の方々の多大なる，ご指導，ご援助に心からお礼申しあげる次第である。今後，私共会員は，一致協力して，新しい21世紀の工業教育をめざし，建築教育の躍進に努力する決意を新たにする機会になる記念行事になることを念じてやまない。

（東京都立田無工業高等学校長）

本会創立40周年記念誌発刊に際して

前東日本建築教育研究会会長　加曽利　政　男

本会は昭和26年，東京四谷の若葉荘に於いて，関東地区建築教育研究会として発足して以来，本年にて創立40周年を迎えました。これを記念し平成２年７月には神奈川県において40周年記念大会を開催致し，また，各種事業とあわせ記念誌を発刊するに当たり各方面から多大の関心とご援助をいただき，盛大に挙行することができることを喜びとするものです。この記念すべき年に，創設にゆかりの地，四谷に近い本校が研究会事務局を仰せつかり，不肖私がご推挙され，会長の任についたのも何かのご縁と思います。

本会は創立以来，文部省関係においては教科書の編集・産振設備基準案の作成・学習指導要領とこれに基づく学習指導要領の手引書の作成等や，全国工業高等学校長協会における，標準テスト問題の作成，教材映画・スライドの作成，JIS の選定，さらに建築学会や産業教育振興中央会においても十分の務めを果たしてまいりました。

すでに昭和46年には，創立20周年記念誌を当時の理事長冨塚信司先生のもとに発刊し，昭和55年には30周年記念誌を元会長掘重雄先生のもとで発刊され，本会発展過程が整理され記録として残されています。その後の10年間を振り返ってみると，世界の情勢も，真の平和を求め日々に変化しています。年号も昭和から平成と改まり，昨年には新学習指導要領も公示され，産業界特に工業界においては，技術革新がめざましく，先端技術の開発には目を見張るばかりです。当然のことながら，本会も発展成長し，その活動内容も一段と活発化されました。

各都道府県が毎年交代で運営している，総会・研究協議会には，常に 150 名を越す会員の参加者があり，会員の研究会への参加意識が高まり，組織も確立し，更に研究活動も製図・計画・構造・施工の４分科会を中心に活発に活動し，主に関係科目の学習指導についての研究を進めています。

また，夏期休業中は４分科会持ち廻りで，実験・実習を中心にした会員のための実技指導を実施し，毎年参加希望者が多く，お断わりするのが困難と言う，有難い悩みがある程です。これも一重に会員各位の熱意と，関係諸団体の暖かいご支援の賜物と感謝致しています。40年といえば，不惑の年です。惑うことなく，一段の発展を祈念致します。

最後にあたり，建築教育には，全くの素人の私が勝手な事を申し上げた事にお許しいただき，今日の発展に尽力された，先輩諸氏に深甚の意を表す次第です。

（東京都立小石川工業高等学校長）

東日本建築教育研究会40周年を祝う

文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官　岩　本　宗　治

本年，東日本建築教育研究会は，昭和26年発足して以来数えて40年目を迎えられております。会員の皆様に心から御祝いを申し上げます。

東日本建築教育研究会は，我が国の工業教育に関する教育研究会の中で最も伝統があり，「産業教育振興法」が制定された昭和26年11月に，工業高等学校における建築教育の振興を図ることを主たる目的として発足されたのであります。

爾来，先人諸賢のたゆまざる努力と熱意に支えられ，技術発展の著しい激動期を40年間にわたって，建築に関連する学科の教育課程と学習指導，施設・設備などの在り方について研究成果を挙げ，東日本地区のみならず広く我が国工業教育の発展に大きく貢献してこられたのであります。

創立40周年に当たり，関係者がこれを祝って，記念誌を発行し，式典を実施するなど先人の業績をしのんで，その功績をたたえると共に東日本建築教育研究会の今後の発展を期されることは，誠に意義深いことであり，心から御慶び申し上げる次第です。

近年，我が国は科学技術，経済，文化等各般にわたりめざましい発展を遂げ，世界に貢献する国家として，諸外国から大きく期待されているところであります。

特に我が国の工業は，工業製品の数々において世界市場の動きを左右するまでに至っており，今日，我が国の技術協力と経済援助には，諸外国から大きな期待がかかっている状況であります。

このような発展の中にあって，今後の高等学校段階における工業教育は，明治以来の蓄積された工業教育の資産を継承しつつ，21世紀に向けて新しい技術の導入を図り，世界の技術立国にふさわしい教育に改善しなければなりません。

昨年３月15日に告示致しました新しい学習指導要領は，まさに，21世紀を目指し，社会の変化や科学技術の進歩に主体的に対応できる心豊かでたくましい人間の育成を改訂のねらいとしており，工業教育についてもこの方針に沿って学科や科目の改善を図ったところであります。

現在，各都道府県においては，新しい学習指導要領に基づいた教育課程の実践研究が，鋭意実施されているところであります。

東日本建築教育研究会が，この40周年を契機として会員各位の御尽力により，なお一層，御発展されることを祈念申し上げて祝辞といたします。

創立40周年を迎えて

前全国工業高等学校長協会理事長　小　川　幸　男

東日本建築教育研究会がここに創立40周年を迎えましたことを，全国工業高等学校長協会を代表致しまして心からお祝い申し上げます。

40年と一口に申しますが，その過程はきびしさの連続であったと拝察致します。戦後の混乱，目標を失っての虚脱感が脱却し，国力回復へ向けて国民全体が動き出した時期にこの研究が創立されたわけであります。以来，所得倍増論に支えられた高度経済成長，オイルショックによる物価狂乱，そして安定経済成長へと波乱に満ちた時期をのり越え，今日を迎えたのであります。同時に，エレクトロニクスを中心とした技術革新が怒濤の如く押し寄せ，その影響が学校教育にも大きく出現し，新しい先端技術を構築した機器類が広く導入され，その結果，教育内容が変化し，私たち指導する側にも大きな変革をもたらしました。まさに変化と発展に明け暮れた40年間といえましょう。そのため，研究会の運営にも種々の課題が続出し，ご苦労の多い毎日であったと存じます。しかし，会員諸兄の常に前向きの姿勢，一致協力体制の切差琢磨があったからこそ，今日のゆるぎない組織が確立されたと，そのご努力に対して深く敬意を表するものであります。

学生時代より家屋について非常なる興味と関心を持っていた私は，通学途時，電車の窓外を流れる数々の家屋を眺めるにつけ，あの建物は一体どんな間取りになっているのであろうか大変モダンな建築物ではあるが，色彩・配置はあれで良いであろうかなど想像することを楽しみにしていました。当時，どちらかというと個性的な家屋が多かったという印象をぬぐい去ることはできません。最近は何か画一的・統一的になって素人には面白味がないという感じすら致します。確かに“アッ”と思わせる建築物があることは事実ですが，大切なことは私たちの生活の基盤といわれる“住”にこそ，豊かな心となごやかな家族関係をかもし出す場であるといってさしつかえありません。どうか，今後とも憩いの場である“住”について一層の研さんを是非ともお願い致したい所存です。

画一性から個性化を，硬直化から創造性へと強く叫ばれている学校教育であります。基礎的・基本的知識，技術を身につけた建築科の生徒の皆さんが，それを基盤にして，より望ましい環境を持つ建造物を築き上げていく創造性を発揮できる教育を展開して頂けることを切に期待致しております。

40年を１つの節目として，本研究会のますますの隆盛と一人ひとりの会員の皆さんが意気に燃え，目標にむかい，一路邁進されんことを深く祈念してお祝いの言葉とさせて頂きます。

（前東京都立工芸高等学校長）

創立40周年を祝う 「夢と誇りを」

元東日本建築教育研究会会長　加　地　正　義

東日本建築教育研究会が創立40周年を迎えられることに，まずお祝い申し上げます。本研究会は，戦後の激動とともに歩み今日の隆盛を極めるのも，先輩の方々や本研究会の発展に努力された方々の賜物であり，衷心より敬意を表するものである。

私自身を顧みれば，昭和61年本会の会長を仰せつかり，その責任の重大さを痛感した。この時，門外漢の私は匹夫の勇を振るって努力するしかないと覚悟したことを覚えている。その年福島大会に臨み，会員の先生方の熱心な取組み姿勢に接して心を打たれ，会員が一層活動し易いように無用の用を心掛けようと思った。翌62年金沢大会も盛会であり熱気に漲っていた。研修の一貫としての建築・建造物の見学には，曹洞宗永平寺を訪れ心の引き締まる思いであり，那谷寺を出てきた時は仏になれたような心地であった。

この時ばかりは，建築教育に携わる教師が羨ましく思えたものである。霞が関ビルが完成したのを見たとき以上の思いであった。

たった１ケ年のことではあったが，研究協議の折生徒の意欲と学力低下を嘆く声が少なくないと実感した。建築教育だけは，かねてから大いなる志を育成していると認識していたので，戸惑い勝ちであった。教師があきらめたら教育の進展はなく，生徒があきらめたらそれ以上の進歩はない，と私は思う。夢と誇りを持った工業高校でありたい。

過去の工業高校卒業生は立派に社会を動かしているのは，周知の事実である。このことが，昔卒業の年配者に限られていると認識しているのは間違いである。全工協会の「工業教育」３月号に「工業高校卒業生の活躍と提言」を特集した。寄せられた原稿の中で，某建築研究所主任のＴ，Ｓさん（昭和51年工高卒）は次のように提言している。

インテリジェント教育施設・就学者数の減少・専門教師の確保等を指摘していることもさることながら，現在遭遇している諸問題の解決は目先の限られた領域の中では不可能，広いグローバルな視点を自分のものとしながらも，スペシャリストとして誇りを胸に，明日に向かって確実な夢を追い続ける……そんな教育が似合う工業高校を願う。

若くして，このような卒業生が数多いことを忘れてはならないだろう。建築デザインには夢がある。建築施工には誇りがある。霞が関ビルの基礎づくりに当たった作業員の「このビルの基礎はお父さんが作ったんだ，と子供に話してやりたい」と言う言葉に感動したことがある。ぜひ自信を持って，夢と誇りを持たせる工業教育をねがっている。

そのために，東西の研究会が力をあわせ全国組織を是非実現させて頂くよう祈念し，本会の更なる発展を願い，お祝いの言葉にかえさせて頂きたい。

（前東京都立墨田工業高等学校長）

創立40周年を迎えて

元東日本建築教育研究会会長　松　村　篤　躬

東日本建築教育研究会が結成されて，本年創立40周年を迎えることになり，心からお祝い申し上げます。

過去を顧みると会の結成当時の先輩諸氏のなみなみならぬご苦労があったことと思います。また戦後の疲弊から我が国の産業界が立ち上がることができましたのは，本研究会が原動力になったと言っても過言ではないと思います。

これは各時代の役員の方々をはじめ優秀な会員各位の協力によって独創的な活躍をし続けてきたからだと私は確信しています。

私は，昭和62年からわずか２年間本会の会長をつとめさせていただきましたが，小石川工業高等学校の事務局や製図・計画・構造・施工の主査の方々に支えられ，特に山室副会長の協力を得てその任を果たすことができました。そして当時の建築業界不振を乗り切ることができましたことを大変喜んでいます。

また，当面の課題であった「工業高校建築系学科卒業見込者および卒業者に対して，二級建築士試験の受験資格を与える」という生徒に意欲をもたせるための資格取得について西日本建築教育研究会と協力して，全国工業高等学校長協会を通じ，文部省に強力に陳情してまいりました。このことは是非生徒のためにも成功させて下さい。

一方，専門部会の夏季講習会や製図コンクール，「建築ニュース」などの刊行物にも関係者の諸氏は積極的に取り組んでその効果をあげてきました。

さて，皆様もご承知のように本研究会は発足以来，高等学校建築科教員の専門技術やその資質向上のため前述した技術講習会，見学会など諸々の事業に取り組んで実施してまいりました。そしてその年その年の先進的な内容をもり込んだこれらの事業は全国工業高等学校長協会の先導的な立場にあり，高校はもちろんのこと官界，業界から高く評価されています。これも一重に会員の皆様方のご協力の賜ものと深く信じてやみません。

新学習指導要領も告示され，来るべき21世紀の経済社会をたくましく生きる人材の育成には，基礎・基本が大切ですが，「情報教育」「国際教育」「生涯教育」がこれからは重要視されなければなりません。そして問題解決能力や変化に対応できる能力をもつ若者の育成が大切であろうと思います。

最後になりましたが，本研究会がこれからも益々発展して“世界をリードしていく若者”の育成に努力を重ねていくことを祈念して，私のお祝いの言葉といたします。

（元東京都立小石川工業高等学校長）

祝　　辞

元東日本建築教育研究会理事長　中　江　　齋

東日本建築教育研究会が40周年を迎え，愈々その組織の充実と活動の成果を向上発展させて参りましたことは，まことに慶祝に堪えません。この記念の年に当たりお祝の辞を述べさせて頂きますことは，身に余る光栄に存ずる次第でございます。私は初代の伏見先生の後を受けて，昭和36年から４年間理事長をさせて頂きましたが，初代理事長の伏見三郎先生も物故され，設立当時の協力を頂いた方々，岸田林太郎先生も今は亡く，当時のことを追想して感無量なるものがあります。本会の設立は伏見先生を中心に，当時工高建築教育の発展に寄与されていた近畿建築連盟に対応して，東日本にも研究会結成の重要性を協議しあい，会合を重ねて漸く昭和26年11月に本会設立の総会を開催することが出来た次第でした。私は校長在職中，昭和28年度の総会を沼津工業高校で，昭和36年度の総会を静岡工業高校で開いて頂き，当時の思い出は特に印象に深く刻まれております。そうして昨年度の静岡県立島田工業高校で開催されました総会には，思いがけず旧会員として御招待を頂き，最も新しい年度の会の活動事業に参加することが出来，設立当初から今日までの会の組織と活動の内容，その発展の大きな違いに，感動と追憶の思いに深く打たれた次第でした。　私は公立工高定年退職後設計事務所，建設産業会社の仕事に携わりながら，大学の講師や講習会の講師などを委嘱され，現在学校法人日本建築専門学校の教師を委嘱されて，今なお建築技術教育に働かせて頂いていますが，工高での建築教育の推移と向上に伴う基礎教育のあり方，生徒や学生の学習への取り組み方，指導のあり方，教科書や参考書の適応のあり方など，昔と今との変化・違いにいろいろと思いを致すものがあります。社会へ出ていく若いもの達の為の教育は，一般普通教育と違った専門的基礎教育への一層の研究と，もう一つは人間性の陶冶について，改革工夫の必要があるのではないかと思惟するものであります。この中で注目しなければならない観点は，1982年４月号の建築雑誌で展開された「建築における技能教育」であろうと思います，技術教育における技能教育の本質と専門的基礎教育，専門的基礎教養との関係，技術教育の本質的追求には，これまでの教育の業績の上にもう一段の検討と反省を加え，工高建築教育の真の体制作りを目指して協力しあうべきではなかろうか。私は工高技術教育の中に技能的基礎教養の育成を工夫することの必要を提唱するものであります。どうかどうかこの40周年を記念に会の愈々発展下さいますことを祈念いたしまして，心からなるお祝いの辞とさせて頂きます。

（元静岡県立静岡工業高等学校長）

創立40周年記念誌のための座談会

これからの建築教育を考える

日　時　平成元年12月２日(土) 午後４時～７時

場　所　都立蔵前工業高校会議室

出席者

山口　　廣（日本大学教授）
早川　　清（東急建設㈱建築設計総括部参事）
佐久間信二（ミトモ建設㈱設計部）
加曽利政男（会長）
山室　　滋（副会長）
佐藤　賢吉（副会長）
松田　　紘（事務局長）
古谷　　勉（副会長）（司会）
土田　裕康（編集委員）
山崎　敏弘（編集委員）
大庭　孝雄（編集委員）

加曽利　皆さん今晩は，小石川工高の加曽利です。本日はご多忙中のところ本研究会の40周年記念誌の編集のためにお集まりいただきありがとうございます。本研究会は40周年という輝かしい歴史と伝統をもち，この節目に対して記念誌の発行ということでお集まりいただき重ねて御礼申し上げます。私，この４月に小石川工高へ着任いたしまして，本校が事務局を担当しているということで必然的に会長をおおせつかり，初めて焼津の今年度の総会に参加いたしまして，この研究会の研究熱心さを目のあたりに見まして，やはり歴史と伝統のたまものだと感じると同時に先生方の熱心な研究の実態を拝見いたしまして，これからどうしていこうかというのが私の本音でございます。幸い，ここにいらっしゃる先生方のご支援ご協力，又東日本のそれぞれの理事の先生方のご指導ご援助をいただきまして，お引受けをした以上は全力を尽くして努めさせていただきたいと思いますので，今後ともよろしくお願いしたいと思います。ご承知とは思いますが，工業高校はこれから非常に大きな転換期を迎えるのではないかと思います。すでに来年の中学卒業生が今年度よりも11,000人も減り，平成６年には現在の約3分の1の生徒が減ってしまうということが統計上分っています。したがいまして我々工業の校長会でも，今迄幾度かの変遷の時期があったかもしれませんけれども，又ここに新たに生徒急減という現象を迎えて，ますます研究の必要さを感じると同時に，維持，継続がむずかしい時代が来るかもしれません。それにひきかえて，ここにお集まりいただいた先生方を中心に，増々発展するように，ご尽力，ご協力いただければありがたいと思います。

古　谷　会の進め方について，資料を参考にしながら説明していきます。テーマはこれからの建築教育を考

えるという事なので，話の内容は「これからの建築教育は必要ない」という方向へ行ってしまうとずれてしまいます。文部省から出ていますように，平成６年４月から学習指導要領が変りますが，その中にも建築科はあります。したがいまして，前向きな形で今後の工業教育，特に建築教育を盛りあげていくような話し合いをしていただきたいと思います。

最初に資料を御覧いただきたいと思います。この座談会の趣旨は，建築教育を考えることです。そのための指針となるように記述してあります。したがって，この資料を参考にしながら，これからの建築教育をどうするか考えてほしいと思います。国全体を考えた建築教育の理想を高く持ち，国の施策の一助となる発言が出てくればと思っています。

２番目としては，建築教育をあまり抽象的にではなく具現化するような中味で話し合いをしていただきたいと思います。行政と学校と業界という三つの拠点があってお互いに連絡をとり合いながら，わが国の建築生産を支えています。したがって，必ずこの三つはどこかでつながりを持っていることになります。この辺についてのお話をしていただこうと思います。行政関係については私達も多少関係がありますので，学習指導要領の改訂の中味などについては私の方から説明させていただきたいと思います。それから学校の現状については山室・佐藤・松田先生に，生徒の資質や教えている先生のことを，都会と地方では地域差はあると思いますが，東日本全体，あるいは日本全体，という広い視野でお話いただければと思います。

建設業界の立場としては，早川さんと佐久間さんに企業の状況，たとえば最近入社してきた工業高校生はどうなっているのか，なにが欠けているのか，あるいは期待出来るものがあるのか，というようなお話をしていただきたいと思います。それから工業高校の経験もございます山口先生には，日本建築学会の副会長，大学教授の立場で工業高校の教育のあり方，カリキュラムの問題などについて，適宜，ご発言いただければありがたいと思います。発言の順序としては，行政，学校，業界の順に進めさせていただきます。３番目は，私達学校としては受皿があってはじめて学校が存在していると思いますので，学校と建設業界は互いに何を期待しているのか，あとでご意見をいただきます。育てた者が役立っていないとすれば，採用されず，学校は自然消滅してしまうのは，火を見るよりも明らかです。４点目は互いに期待するものがあれば，どうやって勉強して進めていったらよいのかまとめていきたいと思います。ざあっと進め方について説明してきましたが，何かご意見がありましたらお出し下さい。

古　谷　まずこれからの日本の建築教育を考える上で，一番大切なのは国の方針であろうと思います。新聞等にも出ていますのでご出席の皆さま方もよくご承知のことと思いますが，平成６年４月１日から新１年生より施行される新学習指導要領について，まずそのねらいを見ていきたいと思います。

職業教育を主とする学科においては，次のような事項を配慮するとあります，すなわち「職業教育を主とする学科における標準的なものは別表に掲げる通りである」とあります。この別表にある学科は，機械，電気，建築，設備工業などの基幹学科のことです。ところがもう一つ大事なポイントがあります。それは設置者において必要がある場合は，地域や学校の実態に応じて，たとえば産業技術などの学科を設けてもよいとされています。場合によっては，建築設備科としてもよい，つまり複数の学科をくっ

つけてもよいという方針が打ち出されたのが大きな特色です。もう一つは科目が変ったということです。いろいろありますが，新しく出てきたのが，情報技術基礎と課題研究です。この二つが今度のメインになっています。情報技術基礎の中味は資料に出ている通りです。課題研究につきましては蔵前工高においても平成元年に研究発表しましたが，資料の通りです。要するに先生指導型から生徒主体型へ，教員は後から援助するという型です。特に産業現場等における実習では，現場の方々に指導をお願いするわけですが，実際に出来るのかどうか心配です。この辺の話がでてくればありがたいと思います。以上が現在，国が進めている工業教育に対する今迄の流れと若干変ってきている点です。

それでは学校の現状はどうなのかお話を伺いたいと思います。佐藤先生お願いします。

佐　藤　学科の改編については，建築の場合は他の学科と違ってあまり変化がない。ただし，内容は別として，基本的なことをやっているし，今後も大きな変化はないと思います。ということで，科目は昔の科目を踏襲していただいたということが特徴です。どういうことかと言うと，計画の中に現行では，法規・歴史・設備などいろいろなものが入っていて，指導上の問題点や資格取得との関連から，建築法規が独立した。又構造設計の分野が建築設計というような機械設計をそのまま建築にあてはめたため，名称からしてなじまないものとなっており，業界の方々も皆まちがえているんです。調査書を持って行くと，あなたそれでは設計（図面）うまいでしょうと言われるんですが，これは構造設計のことなんですね。そういうこともありまして科目の方は，一部名称変更が行われたことなどが，今回の大きな目玉だと思います。ただ，避けることの出来ないのは，子供達の目的意識が目に見えて変ってきていることと情報技術教育が建築の中にどんどん入ってくるということで，その辺のところをこれから建築教育の中でどのようにすすめていくかが大きな課題ではないかと思います。

古　谷　どうもありがとうございました。それでは次に松田先生お願いします。

松　田　私は別の観点からなんですが，学校ではどうかというようなことからお話したいと思います。15才で入ってきて18才で卒業していくわけですが，私にも同じ位の子供がいますが，その子供に目的意識を持てと生徒には言えても，自分の子供には言えないというようにむずかしいことではないかと思います。もう一つは，社会的にみると，建設業従事者の高年齢化が進んでいって若い人がなかなか入っていけない，そこで私達の使命は，若い有能な人を建設業界に送り込むという役割があるわけですが，そこに向けていけるかと言うと，そういう観点からはなかなかむずかしい問題があると思います。特に都心に近い人は，自分の家から通えるから，建設業に入っていけますが，地方の人は，自分の家から通って仕事に就きたいと思っても，自分の家から通える所に受け入れてくれる企業がなかなかない地域もあり，そこに矛盾もあると思います。私も進路指導で，企業の方々にお話するのですが，要は建築という仕事に比べて給料が安いとか他のサービス業に比べても給料が安い，だけどもそこへ入って行くということは，好きでなければやっていけない仕事ではないかという感じがします。好きとか建築ばかというかそ

んな感じの生徒を育てていくという役割があるんじゃないかと思います。でも極端に言えば，健康で人柄が温厚でもう一つはその事が好きであれば，その位の教育が３年間で出来れば十分ではないかと思います。それについて科目をあっちこっちいじったりと，ここ10年間位でずい分変ってきましたが，そこで先程の佐藤先生のお話ですと，もとへもどってくるということでいい傾向ではないかと思います。あまりごちゃごちゃいじっているよりも，本当に興味を持たせるような教育を目指すのが大事なのではないかと思います。ですから文部省でやっていることは，時代時代でいじり過ぎていたという感じがします。もう一つは，建築科を工業科の中へ入れてよいのかという点です。この事は昔から思っているんですが，工業基礎や工業数理を入れろということが今回も出ていますが。

古　谷　　ありがとうございました。それでは山室先生どうぞ。

山　室　　定時制の立場からしますと，昔は勤労学生ということで代表されるように働きながら学ぶということで集まってきて，定員の枠をはるかに超えていました。しかし，最近は入学者が定員の枠も下まわっていることと，高学歴社会に呼応して，普通科も受けたし，全日制も受けたけど，その中に入れなかったという形で，結局職業という感覚が現在中学においての職業教育がはっきりしていないのではないか，それでも受入れ側としては，一人前の成人になって，社会人として生活できるような方策を講じてやらなければいけないという立場で建築というものを通して教えているわけです。今迄の場合には，建築をやるんだということで来ていたんですが，現在はそういうわけで，建築に就いているのは，家業が建築であるという者はやっているけれども，その他の者は大部分建築以外の仕事に就いています。中には昼間なにもしていない者も居るというそういう社会情勢でして，そのような生徒を相手に授業をしているという点では昔よりも大分やりがいがないということになります。そういう入学者は意欲がないものですから，おもしろおかしく本人の長所を見付け出すように授業をし，製図や実習をするのですが，中には先生と話が出来たという喜びで，くる者もいます。そういう生きがいを持った生徒はつながっていますが，学校へ来ること自身が苦痛な者は長く続かないで，１年経ち，２年経ち，結局卒業時には入学者の半分位になってしまいます。クラスによっては，１ケタ，最近では10何人というのが平均的な数ではないでしょうか。それでも４年間の授業で，88単位を履修し，建築を通して，物の考え方，仕事の順序，結果の見方というものについて教えているのですが，３年４年の高学年になるとなんとなく理解力が出てくる。それでも昼間の就職時期に比べてみますと，現在職を持っているという感覚があるせいか，いわゆる卒業間近（12月以降）頃にならないと将来何をやろうかなという話題がクラスに出てこない，我々が話題を提供しても乗ってこない，ですからクラスの生徒の誰かが将来の就職，建築へ行こうかななどというと，一ケ所に３人も４人も集まってくる。そういう例があります。それとて，自分で考えて行ったわけではないのですから，昨年は３人行きましたが，１人しか残っていません。そういう状態の中で，長所を見ながらかかわり合っているんですが，なかなかむずかしい時代になってきました。業界にもご迷惑をかけているわけですが，将来自分でどんな職業に就いてもいいから建築学を通じて社会生活ができるような知識というものが生活のあり方を確立して行く，そういうものを手探りできるようにというのがせめてもの我々の願いです。

そして当然のことながら，建築業界に就職して建築技術を発揮できる手腕を持ち合わせて欲しいと思います。

古　谷　ひと通り学校のお話しをいただきましたが，足りない部分はあとで補足していただくとして，ここで建設業界から出席していただいたお二人の方にお話を伺うことにします。まず先程申し上げました工業高校の卒業生として活躍しておられる東急建設の早川さんに，工業高校の卒業生の立場，工業高校への期待や建設業界の実情などはどうなのかについてお話していただきたいと思います。

早　川　最初に私，座談会のレジメを始めて見させていただいたので若干矛盾する点があるかと思いますが，40周年を迎えたこの東日本建築教育研究会というのは，昭和20年代の戦後復興の中からいろんな変遷を経て，今日に至ったんだということで，戦後間もない頃はともかくとして，最近50年代前半から現在に至る迄の環境等をおさらいしてから私のお話をしたいと思います。すでにご存知のように石油ショック後の不況が４～５年ありましたが，その頃から仕事の量も少なく設備投資等少なくなって落ち込んだ時期がありました。私共それ迄は工高卒の方も採用していたんですが，その後大学卒等も２年位ストップした時期がございます。昭和52，53年頃ですかね。そのような厳しい時期がありました後，また景気も上向きまして採用を再開したが，その時も大学卒だけの採用でした。それがかなり長い時期続きまして，つい，２～３年前から工高卒の方も採用するということになりました。会社側としては今迄採っていなくて，急に求人しても学校側には大変迷惑をかけているのではないかと思います。

建設業界の本音を言いますと，今もう労務者も技術者も足りなくて，皆オーバーロードになっているということで私共，去年と今年の採用を比較しますと，去年は140～150人位しか採っていなかったのが，今年は300人近く採っているという状況です。その中で，最近の工高卒の入社後の配置は100％現場勤務だと思います。振り返って私共昭和30年代前半の卒業ですが，かなり設計部門とか内勤部門にもまわされた者が多かったのですが，大学卒でも今は設計部門を希望しても取り入れてもらえない状況です。ですから，建築を出て建設会社へ就職を希望する方でしたら，まず健康であること，実務は必須ではありませんから基礎的なことだけあれば，社内の研修によって一定のレベルに上げられるのではないかと思います。もう一つ我々の建設業界の問題点は人手が足りないとか業界としては何をねらっているのかとか，キーワードを拾ってみますと，まず人手が足りないので建設作業の省力化をしたいのと，労務者が高齢化してますます現場作業というのは安全性を確保しなければならない。というような問題があります。それから自社での工事物件についてはなんとしても品質を向上させなければならない，それでなおかつローコストで利益を向上させなければならないという点から考えますと，大きくとらえると建設業の体質改善というズバリ命題になってくるんですが，個々の問題とすると，それぞれ関連性があるんです。作業のロボット化とかシステム化とかいうことが技術開発面での重要課題となっています。それと情報という言葉がよく聞かれますが，やはりコンピュータを利用して高度な技術開発もしていかなければいけない，というテーマがあげられます。それと私共建設分野では，13番～15番位なのですが目標としては10社の中に入ろうとやっているんですが，その場合従来のような請負型の姿勢ではとうてい目標は達成出来ないということから，増注指向といいますか，自ら仕事を創り出していこうという姿勢で，営業は最前線としてやっており，それ

以上に私共が所属している設計部門では川上の仕事としてやっております。振り返って，工高卒をした方で100％現場へ行くと申し上げましたが，学校教育の中で何か一律な教育ではなくて変った人材も育てられないものか，これは大学でもそうなのですが，どちらかと言うと，今の入学制度は試験……試験で入る時は狭き門で，卒業する時は広き門というか，出て行ってしまうのが現状です。アメリカはその逆だとよく言われていますが，入る時は自由に門戸を広げて，中での，教育を充実させて，出るのはむずかしいのだというような型に切り替えて行く必要があるのではないか。すでにずい分前から高学歴社会と言われていますので，皆大学進学を目指している中でなんとか工高が魅力のある教育の場とするにはどうしたらよいかということを考えていかなければいけないのではないかと思います。私案ですが，やはり生徒を集めることも大事ですが，ここで実情と違っていたら大変申訳ありませんが，これらの工高に赴く教職員にも魅力のある場でなければ，人材も不足してくるのではないか，何年か後には若い先生方が不足してくる事態もありうるのではないかという感じがしています。この辺の実情も後で聞かせていただけたらと思います。それと工高に入って卒業してから進学したいと言う生徒もかなり出てきているのではないかと思います。その時には今の大学入試制度の枠とは別に工業高校卒の特別な（推せん）枠をもう少し増やして，工高から大学へ進学した人間も社会ではけっこういると思うのでそれを広げる手もあるのではないかと思います。

最初に，新しい平成６年から実施される学習指導要領の内容も聞きましたが，３年間教育ということと，一部であります高専とのからみ，あるいは，各種専門学校との関係をどのようにしたらよいのか，この辺も検討する必要があるのではないかと思います。

古　谷　それでは佐久間さんにお願いします。

佐久間　今東急の早川さんからお話のあった採用人事のことは大手ゼネコンだけでなく建築業界全体に多かれ少なかれあると思います。深刻化している状況というのは，当社においては設計部門にも採用していますが，工高卒生のほとんどは現場員にまわっているということのようです。ただ，中堅規模の会社では，現場員になってくれる人達がかなり不足しているんではないかと思います。首都圏の工業高校の生徒の進路希望は，ほとんどが，大学進学と設計希望のようです。技術屋として施工技術関係へ進みたがらないという傾向があるんではないかと思います。私の希望としては，工高生の場合，古谷先生から説明のあった指導要領によれば，さまざまな分野に分化していく傾向が見受けられますが，建築自体のところも，もうかなり分化していく傾向にあるかと思います。単純に見まして設計活動においてもプランナーと実際のドラフトマンとはかなり分かれつつあるという現況があります。我々が卒業した昭和40年代の段階としては中堅の技術者として物事を進めていくために工業高校の教育がされてきたような気がします。建築家（アーキテクト）とその下のドラフトマン的技術者（中堅的存在）を，工業高校生が担うというような教育です。ところが最近，現場の方は現場監督と言えども，３Ｋと言いますか，汚いというイメージが若者の中に目立ってきています。とにかくデスクワークをやりたいという人間だけになってきています。先生方からも設計志望ならいるよという話をよく耳にします。建築の中味を知らないうちにみんな設計者になるんだと，建築にたずさわるには設計の方がいいんだよと言うような傾向があるんでは

ないかという気がしてならないのです。私も設計の分野にたずさわっているんですが，どうしても男らしさがなくなってきたという点からも，現場の中で，汗水たらして，自分で力を出して，手足を使ってというような傾向がないという状況にあると思います。設計分野においても，建築の末端企業においては，もう設計志望者すらも現れないということになったとすれば，次の段階においては，一般の素人を考えています。建築を知らなくても，キャドシステムを導入して図面関係を作成するシステムがこれから先き行われてくるのではないかと思います。むしろ能力がなくてもヤル気を持っている人でキーボードのたたける人間であれば，わずか１ケ月か２ケ月位で10年選手以上の図面が完成出来ます。ですから，キーボードを押すだけで我々のプランをそっくり図面化出来るところになりつつあります。そういう人間がどんどん出てくると，現場の施工技術者が不足してくるのではないかと思います。設計者ばかり増えて来てだれも作る人間がいなくなってしまう。その辺が問題だろうと思います。

古　谷　　ありがとうございました。山口先生，大学の立場から見た工高の感じを話していただきたいと思います。

山　口　　大学のことはしゃべりません。大学は好きなことをやっていてよいのです。かなりゆるいのです。いまお伺いした話の中に，問題が全部出てきた感じがします。私なりに整理して，私なりの問題提起をしたいと思います。最初に，山室先生のところへきて始めて出てきたんですが，工高の中の問題というのは生徒の問題と，先生の問題と，教え方（教科書・施設設備）いわゆる教育課程の問題と三つあると思うのです。中で今一番深刻なのは生徒の実態だろうと思います。前にも蔵前工高で久し振りに授業を見せてもらおうと高山先生にお話したら，高山先生から来て下さらんなと言われました。私がいた時代と，すっかり違うからだったのでしょう。生徒の質が違ったら違ったなりにカリキュラムに反映してくるはずだと思うんです。ところが教育課程を見てみますと，これはこれでずっと10年単位で変ってきている。で，落差が増々ひどくなっているんではないかという感じがしているんです。先き程佐藤先生は教育課程をそんなにいじくりまわさなくてもいいとおっしゃったが，ではなぜ文部省が一生懸命に10年経つと又先の10年見通して改訂をやるのかというと，世の中動いているからです。工業高校の学科の中で実は建築はあまり動いておりません。けれども，これは決していいことではないんです。たとえば今度新しい学科が出来るんでも，電子機械科とか情報科など前から出て来ておりますが，ソフトの部分がどんどん工業高校の中でも増えているのが現実です。たとえば情報技術基礎という形で建築にも共通で，これを組み込めと言ってきているわけでしょう。だから変っているんです。変ってゆくのだから教える側も対応していかなければいけない筈なんです。かんたんに私の理解で言いますと，土木も建築も機械も電気もすべて今迄はハード中心でした。機械では冶金だとか工作機械だとか，建築では材料だとか構造だとか，計画といっても商店，住宅の設計とか建物つまり，物の技術を中心にやってきました。それがたとえば土木では，たとえば今までは橋梁工学と言い橋を作るその時にトラス橋がいいのか吊橋がいいのかまでは教えました。ところが今は，東大の土木では橋を作ると景観が変るのでそうした景観の問題も含めて景観工学という講座を作っているんです。土木というのは一番はっきりした物つくりの学問でした。橋梁，堤防，港湾，鉄道，トンネルというふうにまったくどれも物です。ですから，橋屋さん，道路屋さん，鉄道屋さ

んと全部たて割りになっていた。それは土木学会の百年史を見るとすぐわかります。内容は専門分野別の歴史をただ集めただけなんです。それが，東大の土木ではソフト半分，ハード半分のカリキュラムを直しているのです。建築でも一番大事なのはこの辺ではないかと思います。今もちらっと出ていた設計という言葉はかつては図面書きのことを言っていたのが，構造設計という言葉が今は定着していますね，つまり設計という言葉自体が持っている意味が変ってきてしまっている。一方では文部省が一生懸命新しい up to date な教育課程を作っている。こうした変化を生徒にどうやって伝えていくか，私にはかなり大きな問題に思えます。もう一つは，先程山室先生のおっしゃっておられた教授法の問題です。これは又，普遍的に必要なこととして学校の中ではいつも考えていかなければならない。そのために研究授業をし，相互に研修していかなければならないのだと思います。さらに今度は業界との関係も重要です。私の大学で，大手五社に女子学生を受験させた。そしたら帰ってきて，先生内定しましたというのです。10年前じゃ考えられなかったことです。体が丈夫なら結構ですと，あとは入れてから仕込みますとおっしゃるのです。そうすると，工高の先生は中味のことはあまり考えないでとにかく給料がいいから行けとか，一生懸命しりをたたいて出すことだけ考える。しかし，問題は今は良くても，人数がたくさん入った時には，10年先には自分以外は全部競争相手になるわけです。不況の時に皆んなをかきわけて入った生徒は，そこでもうすでに競争で一歩リードしているわけです。くる生徒は皆んなとってくれた場合はあとで中で淘汰されます。やっぱりそこで生徒に何かを持たせてやらなければいけなくなる。その時，何を持たせてやるか，これがさっき出ていた，専門学校と高等学校との違いであり，これから先の生き延びるための一番大事なポイントだと思います。私は，例えば専門学校は２年間ですが，工業高校で３年，定時制だと４年かかった卒業生よりすぐ使えます。すぐに使えるけれども，ご存知のように，技術的知識とか技能というのは，半減期が非常に早いものです。かなり前ですけれども技術的知識の半減期は３年つまり，３年経つと知識の半分は役に立たなくなってしまうと聞きました。専門学校はとにかく入社してすぐに役立つことを教え込む。しかもそれは up to date，なことを教えこむ。ということで一般教養は全部横へ置いちゃって２年間専門教育だけをコンデンスしてやる。だから工高卒より役に立つ。それと勝負をしなければならない時に，じゃ工業高校を卒業していった生徒に何を持たせてやればよいのか，これは大きな問題です。それに率直に言うと業界の人もはっきり物を言ってもらわないとこまると思います。工業高校から採る生徒は後々までも会社の中堅になってもらいたい，そのためには何の知識，技能がほしいんだということを言って下さい。体が丈夫なら結構ですというだけでは困ります。そのかつて多様化の盛んな時にある県で，食品製造科のような学科を作って多様化し現実に合わせようとし，あとで不況になった時にえらい目にあったことがありました。工業高校というのは，そんなに現実と up to date に対応出来ないのです。科目の面でも学科の面でも，何か後々まで残るものをどう教えるか，そこが現場にとって大切な点ではないかと思います。

古　谷　　ひと通りそれぞれの立場から今日，建築教育のかかえる問題や対応策などお話をいただいたところですが，質問や補足すべき点がありましたらお出しください。

では，２番目の学校，建設業界は互いに何を期待するかというテーマに移らせていただきます。今迄出て来た話の中で，受皿はあるし，これからの見通しはあるはずだということを踏まえて，何を持たせたらよいのか，もう少し具体的に，それでは何をしたらよいのかということも考えながら話を進めさせていただきます。

山　口　　ちょっとよろしいでしようか。今，工高だけではなくて，大学でも，サバイバル作戦が大変なのですが，これはいろいろなレベルで考えられると思います。たとえば私立学校ですと，学校の名前を変えてしまうとか，女子の学校ですと，有名なデザイナーに制服を変えるとか，そういう簡単なレベルの対策もあります。今，私が申し上げたいのは，学校毎にカラーを出していくというのが一つあり，それから，工高の建築科全体，たとえば東日本として，統一的に，考えていくという方法があります。今これから話を進めるのは，どちらかということです。各学校単位ですと，校長先生はじめ，指導する先生のキャラクターがかなり強く影響してくる。今度は東日本全体でという場合は，文部省の枠の中でということが前提になると思います。

古　谷　　それでは両方の話をお出しいただきたいと思います。それでは大きなところから，細かいところへ移らせていただきます。

山　口　校長先生が横にいらっしゃるので，言いにくいのですが，昔は名物校長と言われる方が大変多かったですね。非常に個性豊かな教育者として，生徒の思い出に残っています。今，校長先生は，学校の管理・運営に大変精力をとられて，校風というか，学校の特色を出すというのがかなりむずかしい客観的な情勢になっているのではないかと思います。

加曽利　　たしかにおっしゃる通りなんですけど，先程お話しましたように生徒が減ると同時に，新しい学習指導要領が告示されまして，高等学校は実施が平成６年度からですが，東京都の教育委員会あたりでは，生徒が減るこの機会に学校の内容をもう少し充実させたらどうか，それにはまず一つ考えられることは，ここにも載っておりますが，学科改変ということですね，いわゆる建築とか建設とかいう歴史のあるものは，それでいいのかどうか分りませんけれども，やはり時代の流れにともなって，ご承知のように，機械科のような場合には，相当情報技術的な要素が必要になるために，電子機械科というような，複合的な学科が最近出来ています。それに対して，私は，建築に対してまったく素人で分らないですが，建築科の場合，将来を見渡した場合，今のままでずっと行ってよろしいのかどうか，後はその資料にも書いてありますが，新しい指導要領では情報技術基礎とか課題研究が必修の形で入ってきますと，今迄の専門教科がいくらかせばめられるというか押される気味がします。その時に，この課題研究を取り入れた他に建築科でもっと今の教科目を改善すべき点があるのかどうか，私はまったく分りませんので，その点のこともお聞かせいただければと思います。ですから，機会としては，学科改変を踏まえて，内容を充実させて，かつての名物校長的なキャラクターを押し出せるような現状ではないんですね。便乗するわけではございませんけれども，ひとつ今がチャンスではないかと感じています。

山　口　　実は，本当にそういうことを，学校レベルでなく教育委員会レベルでお考えならば，もっと自由な発想が可能だと思います。ということは具体的に申しますと，私の大学の私の所属している学部で，ついこの前，経済学部との話し合いをやりました。それは経営管理，生産管理といった能力が工学部の卒業生にも要求される。いわゆるマネジメント能力です。そのために新しい科目・講座を作って先生を呼んでくるより，専門経済学部の講義を交換で，聞いちゃったらどうかということで話し合ったのです。単位の互換というより，講義を互換する，互換なんて言わなくったって，東京工大ではすでにやってらっしゃいますけど，光ファイバーや，ビデオでそれぞれの学校にいて講義を聞くということも可能なわけです。そういうことで互いに踏み出して話し合いを始めています。ということは，若し極端な言い方をしますと，商

業学校と工業学校とがそういう面でお互いに連携して足りない所を補い合うことも可能ではないか。もし，行政サイドが思いきって実業学校の実業教育のこれからのあり方を探るならば，そういう交換があっていいのではないかと思います。

古　谷　　東京都では，高等学校教育改善推進校というものを設置して，先生がおっしゃったように単位の互換を実践検討しています。極端な例ですが工業高校の中では，例えば本校の場合のように，カリキュラムの中で芸術の科目は書道しかありませんので，やりたくなくても書道をやらなければなりません。うわさですが，音楽をやっている学校で，音楽の先生の顔を見るだけで生徒がいやだと言っている場合があります。それでも音楽をやらなければならないんです。そんな場合，隣りの普通高校へ行って，美術の授業を聞くというようなことを検討しようという話もあるんです。

山　口　　私の学部では，この次は芸術学部と話し合いをし，一般教養科目をもっと互換性を持たせようと話をしております。これは古谷先生のお話しと同じですね。

古　谷　　それでは今迄いろいろお話が出てきた中で，東日本全体として，普遍的な面で，建築科卒業生に何を持たせてやったらよいか，お話し合いをしてみたいと思います。そのあとで，学科改変の話などしてみたいと思います。

山　室　　その前に，卒業生でもある二人の先輩にいろいろお話をお聞きしたわけですが，我々が建築の教科の中でやっている内容は，基礎的・基本的内容だと考えていますが，その中で建築施工とか施工実習とかいうのがあるわけですが，お聞きするところによると，いわゆる現場技術者がほしいんだということですね。そういった点では，今迄工業高校で実習されたことを振り返って，現在どのような形で，科目の内容をしていったら，いわゆるプラスになる技術者が採用できるのかと，そんな点を聞かせていただければありがたいと思います。

早　川　　先き程，山口先生が大学では学部対学部，あるいは学校対学校の交流もやられているというお話がありましたので，私の方から先程申し上げましたけれども，学校の教育の場が魅力あるものということと，実務を重視するということからして，産学共同的な，学校と産業界（建築界）との交流の場があっていいんじゃないかと思います。一つは今日の座談会もその一つであるし，又，施工の科目などに実際，建設会社のしかるべき人を招へいして講義をさせるというのも極めて有効ではないかと思います。特にその場で単に授業に出て講義をしてもらうというだけでなくて，今日のような学校教育のあり方とか，場合によっては新しい建築技術に関する先生と企業との共同研究開発とか，今，テーマになっています人材育成なんていうことについても取り組むテーマがあるんではないかというふうに思っています。

山　室　　もうひとかたの佐久間さんお願いします。

佐久間　　今の子供達は，大学へ行くためには普通科へ行かなければならない。高校を選択したけれど，普通科が無理だったから，しょうがなくて工業高校へまわされてしまった，というような子供もいるような気がします。

自分で本当に建築をやりたくて入ってきた人達は果たして何人いるのかと思います。そうした中で，建築学，理論をたたき込んでも，皆なそっぽを向いてしまうのではないでしょうか。

工業高校の先生が，中学校の美術，職業科の先生ともっと話し合って芸術，美術の世界の中にも建築分野があることを，子供達に楽しく教えてやって欲しいと思います。

むずかしい理論や研究をやりたい人は，大学や大学院へと勧め，手短かに建築に携わりたい人は工業高校の建築科へと勧めてあげればよいと思います。受ける側は，中堅技術者教育という立場をとった方が工業高校建築科の存在がはっきりするのではないかと思います。

その教育の中で，目覚めた生徒はどんどん上級のクラスを考えればいいでしょう。情報化の中でコンピュータをやれば今の若者（中学生）は，すぐに飛びついてきます。コンピュータで遊んでいながら知らず知らずのうちに建築の図面が設計されていた，パースが描けた。あ，建築はおもしろそうだなという方向に目を向けさせて，その次の選択の中で，それではあなたは，こんなことをやりなさいとか，施工図や何かを出来る現場の方向へそれぞれの性格を見極めてあげたい。もっとユニークに遊びながらじゃおかしいかもしれませんけれども，先き程東急建設の早川さんが言われたように，現場へ遊びに来てとか，設計の所へ遊びに来いとかというような関係が出来上って始めて楽しさが分ってくるような気がします。ですからそういうもので基本科目をやりながら，２年間位やって，そして実務の方へ移っていくのがよいような気がします。本人が15から16才に向っていく時に，指導してあげるというところ迄で，工業高校卒で放っぽり出してもらえば，今度は我々が実務との取り合いを実際には教えていって，その中で給料がもらえるということになればいいのではないかと思います。

山　口　　ちょっと佐久間さんにおたずねします。あの，会社へ入って，２級取ると何か変るんですか。手当てとか。

佐久間　　手当はつきます。

山　口　　本音としては教育というのは，本当は，先程松田先生がおっしゃったように，好きにやらせておけばよいのですが，学校の中の会議では，建前として，せめて２級だけは取らせる位の基礎知識は与えなければという意見が必ず出てくるのです。大学だと１級を取らせる位のことはちゃんと教えなければいけないと。だから，デザインが好きな学生でも，構造科目を２単位までは必修で取らせるとか，出てきます。そうすると，大学の４年のうち半分位は，必修でつぶれてしまいます。その辺のところが，校長先生もいらっしゃいますが，本音のところで，好きなことを，外へつれ出して新しい建物を見せるとか，やりたいけれど，ノルマの話が出てきてしまうのです。ノルマというのは，やっぱり建築科の卒業生なんだから，出て３年経ったら２級が取れる位の知識は，きちんと教えなきゃいかんということです。

早　川　　確かに私共の会社でも，建築士をある期間にとらないと昇格に影響しますね。

山　室　　それと同時に最近施工管理技士というのがありますね。それが取れないと営業所の問題も出てきますから，現場教育ということを先程言われましたが，特に建築士ということで免除という面がありますからいいんですけど，そういう施工管理技士それもやはり相当重要視されているのが現状ですか。

早　川　　建築士が取れなかった人には施工管理技士を必ずとらせるという方向に向けています。特に現場に立っている人には必要ですね。

山　口　　工業高校ではおそらくあまりそういうことを学校案内に書かないんではないですか。専門学校の学校案内には，このコースを卒業するとこれだけのものが取れますと必ず書いてあります。

早　川　　先き程の佐久間さんの話に同感してお話したいんですが，たしかに15才から18才位の年代で，一番大事なのは建築に興味を持たせることだと思います。その話を聞いて私が思い出すのは，私が高校一年位の時だったと思いますが，山口先生もよくご存知の山崎栄さんが一時現場へ出ていたんですが，その現場

へ工高の先生が生徒を見学に連れていってくれたんですが，その時に我々は現場はこんなものかと，丁度，山留めが終って基礎工事をやっていたところですが，すごく体に熱いものを感じました。最近はどうなんでしょうか，生徒に現場を見させる機会はあるんでしょうか。

佐　藤　極力見学させるようにはしています。ただ現場の方が，受け入れがむずかしいようです。

山　室　だから先き程から施工のことは重要視されている，これは時代によらず以前から分っていたことなんですが，いわゆる工高教育では大学に準じた，教育をしている場合もあります。現場的な施工とか施工実習であるとか，どうしても手に付かないという現状にまず問題があると思うんですね。ですから，そういった点では，教員の研修（現場研修）が必要だろうと思います。ですから，県内をいくつかの単位に分けて，何人かの先生を一年以上（４階，５階の建物なら１年以内で終るでしょうから），それをきちっと研修につけさせるという方法であれば，一番安く効果的であろうと思います。先程産学共同という話がありましたが，大変結構なんですけど，いざ講師として行ったかたが，どの程度生徒と一諸に話が出来るだろうか，やはり生徒の持っている知識の程度やなじみがないと話はしにくいだろうと思います。理論的には産学共同はいいんですけど，本来はその学校の先生が現場へ行って，一つの知識でもいいから，一つの建物のまとめ方をきちっと知らなければいけないと思います。それを自分のビデオやスライドに納めて，学校の場で報告をし，なおかつ研究をすると，その後でその現場の方となおかつ協力しながら現代の施工方法はどうなっているんだろうかと，いうふうになれば万全なんですが，いずれにしても，いわゆる学校教育の組織という問題と，人間というものの絡みがありますから，これはなかなかむずかしいんですが，是非そういったことをこういった機会に各学校とも声を大にして働きかけていく必要があるんじゃないかと思います。先程から話が出ているんですが，現場の知識というのは必要なんだけれど，いざ見せて下さいと言うと，“先生は素人でしょ危いからよしなさい外で見なさい，” 外で見たんじゃ分らないんですね，だからそういう実際にやっている内容を，生徒に話せるだけの知識が先生には必要なんですよ。だからそういうところに問題があるんじゃないかと思うんです，ですから隣近所で工事している建物があれば毎回見せていただいて，自分で資料を作らないとまずいんじゃないかと思います。設計やなんかの場合ですと割りといろんな資料もあるので，授業もやりやすいと思うんですが，特に施工・施工実習になると，管理技術というものも含めてむずかしさがあるんではないかと思います。

早　川　そうするとまず産学共同と言っても，先生から現場に飛び込んでいき産学共同しなければいけないということですね。

山　室　そうですね。たくさん講師をお願いして引っ張ってきたって，お願いするには限度があるんじゃないですか。

佐久間　確かに先生の方も現場を大いに見てもらわなければいけないんですが，生徒とコミュニケーションを計るというのは，顔が分らないとか，先輩だからというようなことはあまり関係ないような気がします。講師としてむしろ生の声の方がおもしろいんですね。たしかに教育的に，カリキュラムが組まれていて，文部省の学習指導要領の中で，その通り教えなければならないのかもしれません。実際に私の卒業した，工高の場合に，ある工務店から学校の先生になられた方がたまたまおいでになった。その先生の施工の授業というのは，施工の用語は，黒板で説明しますが，先生が現場員として体験された内容を非常に多く教えてもらったんです。生コンはこうやって打つんだとか，こうやって作っていくんだとか，鉄筋はこうや

って配筋するんだとか，ではなく，たまに失敗したところとか，鉄筋をまちがえてやったためにどうしたとか，そういったような形が，肌身に伝わってくるような話がずい分ありました。また，酒を飲んだとかいう話を聞けば，現場というのは男っぽい荒いところでおもしろそうだなーという興味がわいてくるんですね。そういう事を体験しながら，我々が知っているところを，ちらっと教えてあげられればいいなあということもあるんです。現状はこうなんだよと。モーメントがこうならば，鉄筋を単純に上端筋にもってくればいいんだよというようなことを，現実問題として教えてあげられるような接しかたが出来るんじゃないかと思います。先生方が生徒と一緒に現場に来て教えていただくのは，賛成ですが，それよりも先輩方のちょっとした話が聞ければ，ずい分興味が持てるんではないかと思います。

古　谷　　それではここで整理させていただきます。

佐　藤　　一つだけ言わせて下さい。生徒に建築を楽しませる，魅力を持たせる事例になるかどうか分りませんが，たとえば，私の聞くところによれば，職業訓練大学校の生徒で設計関係に行く学生達は，必ず夏休みある一定期間それぞれの設計事務所へ実際に送り込む。そこでかなり興味を持って，そこの事務所へ就職したり，ということで効果が上がっているようなことを聞いています。

山　口　　それは私の大学でもやっています。必修科目で，生産実習という科目は現場実習を夏休みにやらせる科目です。それから，芸術学部でもやっています。ですから大学ですと，それは出来るんです。工高の場合ですといろいろ問題があるだろうと思いますけど。

佐　藤　　たまたま私の教え子がそれを受け入れていまして，先生，工高生も設計へ行きたいのがいたら，是非よこして下さいよと言われたので，一度事務所を訪問してみたところ一生懸命やっていました。

古　谷　　今のお話の産学共同というのは，実は先き程新しい科目として紹介した課題研究における現場実習ということになります。ですから私達の方から産業界の方へ是非お願いしたいという気持です。今迄いろいろお話をお伺いして，東日本全体として，建築の中でやらなければいけない基本的なことは何かということがはっきりしてきたと思います。最近不易と流行という言葉が一時よく使われましたが，やはり，変らないんだなあと，いうのが実感です。基本的なことを教えて，興味と関心を持たせて，建築が楽しくて好きだという人間を作ることが私達教育現場に携わっている人間にとって必要なんだということが分りました。そのためには，教員は勉強しなきゃいけないし，教え方が大事だし，カリキュラムも中味を考えなきゃいけない。ただ言えることは，外部から呼んで現場の人の話を聞くことは大変大事なんですが，３年間の中ではんのわずかな時間ですので，残念ながらそれで十分だとは言えません。ですから私達は常日頃研鑽に励まなければいけないんではないかと感じました。これでまとめさせていただきます。不足している面がありましたら付け加えてほしいと思います。それでは，ここで話題を変えることにします。各学校が，それぞれカラーを出すということです。例えば，東京の学校と石川県の学校と，大阪の学校とでは又違うし，又，東京の学校であれば，蔵前と田無が違うし，というようなカラーを出した方がいいんじゃないかという意見がありました。その辺についていろいろ賛否があるでしょうし，又あるんならどうしたらよいか，先程会長の方から学科改変というような話もありました。それは生徒の多様化に応じた問題じゃないか，山口先生が最初に，世の中は動いているとおっしゃいましたが，どうも学校はいつもおくれてしまうという面があります。その辺についてもう少しお話しをいただきたいと思います。

早　川　　学校のカラーを打ちだすということの一つになるかどうか分りませんが，私共感じることなんです

が，大学生にしても高校生にしても最近本を読む人が少なくなったようです，社会人もそうですが，おもむろにカバンの中から本を取り出したらマンガの本だったということをよく電車の中で見掛けますが，今度の学習指導要領の改訂でですね，情報技術基礎というのがありますが，これは情報というのは非常に範囲が広いので，どういうことを扱うのか良く分りませんが，一つ情報の利用のしかた，もっと分り易く言えば，身近かな図書館の利用のしかたというのを，高校の一年，入学して間もない頃に是非教えるべきではないかと思います。なぜ図書室が利用されないのかと言うと，図書室へ行っても，本の探し方が分らない，どこに何があるか分らないという生徒が随分多いのではないかと思います。でこれも又さっきの話と同じになるんですが，建築に興味を持たせるのと同時に，本や情報に興味を持たせるのはもっと重要ではないかと思います。かた苦しい講座なんかを開いて，系統だったことは何も教えなくていいと思うんですよ。今若い人達は皆コンピュータ（パソコン）なんかを早くから使ってますから，かんたんに情報検策出来る時代になってますから，図書室へ来て，パソコンをいくら使ってもいいよ，本の探し方はこうやってやるんだよと，簡単なソフトもありますから，そういうものを最初に教えて，もっともっと，授業以外に，内容を充実出来るような場を利用させるといいんじゃないかと思います。これ実を言いますと，今年の９月に石川県の金沢工業大学の図書館を見させてもらいまして，学生が実に伸び伸びと図書館を利用してやっているんですね。まあ建築担当の先生のお話も聞きましたが，あれは本当にすばらしい，私が経営者だったら（こんなでかいこと言っちゃいけないんですが），金沢工業大学の建築の生徒を募ったら情報の探し方はうまいんじゃないかと，それが何よりも武器になるんじゃないかと，これが一つのカラーになるんじゃないかと思っています。

山　口　ちょっと今の金沢工大のことが出ましたので，つけ加えさせてもらいます。あすこは新しい大学ですから図書館に本はそんなに多く持っていないのですが，２つのユニークなことをやっています。一つは自分のところだけでなく他のところからの情報もコンピュータの端末器で拾い出せるようにしています。これは私の学部でも今年から始めたんですが，私の学部の図書館は，文部省が設けている学術情報センターの資料を全部コンピュータを通じてピックアップ出来るようになっているんです。この９月からそうしたんです。金沢工大は，その前からそれをやっております。他の大学の図書館にある情報を引き出せるんです。もう一つは，それをどう使うかと言うと，卒業生にサービスしている。卒業生は学校を出たら，縁が切れちゃうんじゃないようにしている。うちは学長さんのお話で，優等生は作らないけれども，マラソン選手を作る学校である。卒業生をフォローアップするために，卒業しても図書館を遠慮なくお使いなさいと，自分の所に情報がなければ他の所からでも情報を探してきてサービスしてあげますよというのです。これは明らかに学校の特色作りです。金沢工大では在校生が一人でもいる県のローカル新聞を全部図書館に並べてあるんです。これもサービスです。こういうことは割合簡単に出来ることですよね。今のシステムを使えば。

古　谷　文部省の学習指導要領にしばられるということがあるんではないかという発言が，先き程佐久間さんからありましたから，そのことについて説明しておきます。大枠は決まっていますけど，特色はいくらでも出せます。

加曽利　今年の指導要領が実施されると，指導要領にのっていない科目でも，こういうものが必要だと言う場合には申請して認められる可能性が出てきているんです。

佐久間　山口先生が先き程，これからのサバイバルじゃないですけど，工業高校が生徒を集めるにはどうするのか。教員も足りないという現実もあるかもしれませんけれども，私は，中学ともう少しコンタクトをとって欲しいと思います。勉強は好きじゃないけれども，高校へ進学したい。でもあんな教養科目ばかりじゃ，おもしろくなさそうだ。しかし，おれはコンピュータやったらうまいんだぞ。そういったような子供は絶対何人かはいるはずです。亜細亜大学の学長はおれは三味線が一番うまいんだとか，これをやらせたらもう右に出る者はいないぞというやつは集れということで，亜細亜大学の入学生を採用したそうです。このような形が，工業高校の建築の中で，できないのかと思います。たとえば本立てを作らせたら，大工さんよりうまい，絵を書かせたら，建築の絵はうまいぞというような者でも，他の数学があるから，ちょっと考えてしまうという人はいると思います。そういう人達は，たとえ工業高校の40人，80人の生徒の中の一割，二割になるかもしれないけれども，そういう人達を，引っ張ってこられないんでしょう。それによって次の建築の世界へ興味を導いてあげられる。というようなユニークさがあってもいいと思うんですが。

古　谷　学校というところは，どうも成績のことが先生方の頭の中に入ってしまって，どうも思いきって，たとえば，数学・英語が出来なくても，今言われたように，本立てを作るんなら，大工さんより，うまい，という者が，本当に現実に入れることが出来るのかということになるんですが，それが入れることが出来ない現実もあるわけです。実際，入学してしまうと，英語の先生と数学の先生が毎回０点でこれは卒業出来ません，進級出来ませんと言われてしまって，なかなか思うように行かないわけです。しかし，今の示唆に富んだお話は，私達厳粛に受け止めて，子供達を育てるという意味において，普通科の先生も含めて，先生方にご理解いただいて，やらなければならないことではないかと思います。それが大事な事だと思います。ありがとうございました。その他学校の先生方から何かございますか。

松　田　これから増々定数割れになっていく，社会的には，非常に若年の建設従事者が必要なのに，増々，建設関係に向ってくるものがいなくなるというのは，学校の努力というよりも景気によってずい分生徒の受験の多い少ないの影響が出てくるんです，ですから，そこらは，お手上げのところもあるんですが，やっぱり，そういう意味では建設業界が建設従事者に対してもっと優遇しないといけないと思います。これは，給料を上げる，勤務時間を減らす，とか，様々な努力はされてるとは思いますが，まだまだ不足しているんではないかと思います。それで魅力ある職業だということになってくれば，何かつくり出していくという喜びを潜在的には子供は持っていると思いますから，それをくすぐるような社会的状況を作っていってほしいと思います。もう一つは，大手の企業に特に望みたいことがあるんですが，先き程東急の早川さんがおっしゃっていたように，かつては，工業高校生を採用していたが，オイルショックのあと工業高校生は採用していなかった。ところがここえきて，人不足になったので又採用することになったという大手の企業が多いんですね。いろいろお話を聞きますと，年代のジェネレーションギャップが出来てしまったので，若い人をそこへいれなければならないとか，様々なことをおっしゃられるんですが，それは我々から見れば企業の勝手ではないか，という感じを受けるわけです。それ迄にも非常に優れた生徒が卒業して行ったけれども，景気が悪いとか調子が悪いとかで，希望していた生徒が行けなくて，そうでない中小企業の方へまわしていた。ところが景気が良くなってくると，今度はそういう時に採用してくれた企業が来てくれても，今度は生徒がそちらに目を向けないという，我々から見ると，長い教育の目から見ると，すごく自分自身に矛盾を感じる，そういうつらい思いをしながら進路指導をやっている面があるわけです。

今さらなんだいという気持も私自身は感じたことが何度かあったんですが，そういうように，学校教育というのは，かなりの部分で，社会の景気とか，企業の動向に影響を受けてしまうという点をもうちょっと，学問とか教育というのは，そういうものから遊離したというか，超越したというか，おおらかさが必要だと思うんですが。

古　谷　最後まとめたいと思いますが，ご意見があればお願いします。

加曽利　まったくの門外漢がこんな事言って笑われるかもしれませんが，建築科に女子学生が増えてくるのはどうなんですか，まずいというか，新聞を見まして最近女子大生の中で土木科に希望するのが多いという記事が出ていましたね，土木と建築を比べた時，私は良く分りませんけれども，図面を書いたり，構造の計算などは，女性でも出来るんじゃないかという気がするし，ご承知と思いますが，日本女子大の家政学部の中の２部（夜間ではありません）に建築をやっている科があるんですよね，それであそこの卒業生がどんどん1級建築士を取って，何かのコンテストにも入選しているという話を聞くと，何かこの，学校に特色を持たせるためには，小石川工業高校女子建築科みたいなのを作ってどうなんのかなと，これは笑われて結構なんですが，あえて，その無理に作るわけではありませんが，何で又こんなことを言うかと言うと，今，松田先生が言われたように，一時は業界は，工業高校の生徒は勉強不足で，大学生を採っていて，工業高校の卒業生は何科を問わず，いわゆる大企業にはなかなか採用されない時代が来ましたね，ところがこの間東京都の工業高校の生徒作品展というのを都庁で開いたんです。そこにキャドの作品を展示しましたら，都庁の関係であそこに，いろいろな出入りの業者がいるんですね，それを見ましてね，あれ，工業高校生がこれ程立派にキャドを使えるんなら，何もうちの会社では大学生はいらないやと言っていました。我々校長会としてああいうものをやったのは，今迄いかにも工業高校のＰＲが不足だったから，こういう時期にやろうという目的でやったのです。その思わぬ効果が出てきたのですね，その一つが，今言った，特にあそこに出入りする建築業者が多いらしいんですが，びっくりして工業高校の認識を改めてくれたというと，こっちの思いがけないところから出てきたということなんです。ですから建築の業界の様子は分りませんけども，確かにスタッフ的な人は有能な人が何人かいればいいんで，その下にいろいろキャドなんかを使う人がたくさん必要な時代がくれば，当然そこに女子学生の進出する場所も出てくるんじゃないかなと，素人考えですけど，今考えついたので発言したんですが。

山　口　私立の大学では女子コースを作っているところがありますね。関東学院は女子の土木コースがあります。

加曽利　ですからうちの建設科の先生にもこんな記事がのっていたよと，見せるんですが，女性がヘルメットかぶって，それこそ飯場生活するんじゃないかと思いますけどね。

佐　藤　それに関連して，実は建設業協会の方で，今，たまたま，女子学生が４人いるので，業界の方が，女子の生徒がゼネコンに定着するかどうかというのを研究されているんです。それでついこの間，生の声を聞きたいということできたんですが，私と女子生徒と業界の方２人で会ったんですが，その中で子供達は，推せんで入ってきた子もいますから，佐久間さんのおっしゃったように，目的意識を持っていまして，現場で働きたいと言うのがたくさんいまして，そういう話すらこれは使えるというような感触を得たようなんですが，それはそれとして事例の中に安全教育をやりますよね，大抵はそこの所長さんクラスが担当したんですが，皆寝ててよく聞かなかったそうです。ところが女子社員をつれてって話させたら，なんと

皆わかったということになったんです。そこで，女子もこういう所で，建築の知識を持って話せばよく聞いてくれるんだなあという，まあこのような事例もあって，女性が建設現場にどのように配属させたら効果があるのかなあというので，ゼネコンが，人手不足もありますが，女生徒をとにかく採用したい方向に動いているようです。

古　谷　　今一つの具体的な各学校でカラーを出す例を副会長さんの方から出してもらいましたから，田無工高のように２クラスある所では，女子建築科を作ってもよいのかもしれませんね，時間がきましたので，まとめさせていただきます。互いに期待するものを踏えて，三者が連けいし工業高校の建築教育を具体的にどうすすめていくかは，今迄の話の中に出てまいりましたし，最後に松田先生のご発言にもありましたように，私達学校側からの要望も出てまいりました。さらに，私達がやらなければならないもの，先き程不易と流行という言葉を申しましたけれども，変らぬものもあるわけですが，時代の進展にこたえられる魅力ある学校にするために，私達はそれぞれの職場で，前向きに研究しながら，これからの建築教育の場をつくるように努力してまいりたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。それでは皆様本日は長時間にわたりましてありがとうございました。

（出席された編集委員の先生方）

土田先生

山崎先生

大庭先生

総会の思い出

第31回（昭和56年度）長野大会・総会の思い出

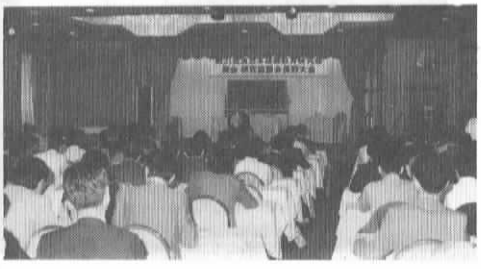
長野県立長野工業高等学校　大　脇　洋　三

昭和52～３年頃からであったろうか，東日本建築教育研究会総会に参加された本県の先生方が「近い時期に長野県が当番県になりそうな…」という感触を持たれていた。御苦労仕事を他県にお願いしっぱなしとはいかぬし，さりとていささか面倒だなとは正直な感想であった。それが同54年度には具体的に打診があり引き受けざるを得なかろうとの腹ができてきた。同55年の北海道大会における理事会，総会で「56年度総会は長野県でお願いしたい」との表示がありここに正式にお引き受けする事になったと記憶する。

周知の通り長野県は南北に広く建築科を設置する高校が県土の各拠点的都市に点在をしている。その設置４校のどこが中心校となりどの市を開催地とするかの調整が行なわれた。200 名程と予想される参加者を収容できる旅館，交通の便，更には総会後の見学場所等を検討して行くと限られてくる。結果，理事校であり又過去に開催経験のある長野工業高校が中心校に，長野市が開催地にという事になった。私事ではあるが筆者は転勤して２年目，しかも36才の若輩者が科主任となり建築科職員も30代が大半を占めており大いに狼狽したものである。本会との連絡，会場の確保，大会運営の原案作成等は中心校としてやらねばならぬが参加者各位に少しでも満足いただく為には少なからず資金が必要である。その賛助金は各校応分に協力いただく事にして第１回の準備会を終了した。

経験ありと言えども時移り人は変わっており正に手さぐりの状況からのスタートである。従って青森県，栃木県，北海道と近年実施をされた各県に依頼をし，準備段階からの資料をお送りいただき，大変貴重な参考資料とさせていただいた。賛助金の集金にも苦労をした。当時の思い出話には決って出る。長野工業高校には60有途の歴史があり多くの先輩が会社の中枢となって活躍されているが全ての高校がそうではない。御苦労された事であろう。苦労のうちに賛助金も予定を上まわる額となり会場は市内では老舗の「犀北館」を確保し見学地は国宝善光寺をと順調に事が進んでいった。55年末には本部事務局より森安，五十嵐両先生が来校され熱心な御指導をいただいた。あけて56年度に入り日程，式次第の細部に検討を加えつつ６月12日，13日の総会を迎えた次第である。

当時，教育実習生として研さんした大学生がいた。彼いわく。「あの当時は先生方皆忙しそうに飛びまわり，ちっともかまってもらえませんでしたよ。お陰で伸び伸びと過ごせました」。そういう彼も今は中堅の建築科教師



となって思い出話の輪に加わっている昨今である。力不足であり行き届かぬ面も多々あったと思われるが，時は「工業基礎・工業数理」の胎動期にあたり，充分な審議が行なわれた事は喜しい限りであった。

ここに改めて御協力いただいた関係各位に感謝申しあげる次第である。

第35回（昭和60年度）岐阜大会・総会の思い出

岐阜県立岐阜西工業高等学校　滝　本　秀　澄

東日本建築教育研究会は，今年をもって創立40周年を迎え，建築教育への重要な要として，ますます発展していることを御同慶に存じ上げます。

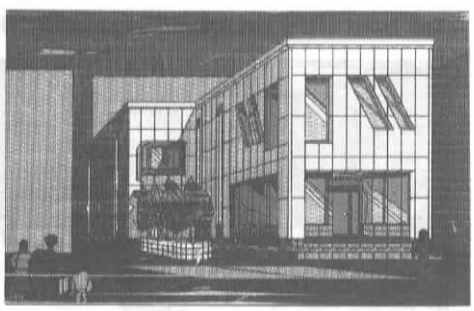
顧みれば，東日本建築教育研究会を昭和60年度に引き受け無事に第35回岐阜大会を終了することができました。このことは，一重に当研究会事務局，会員校各位の御協力のお陰とまずもって，感謝すると共に，御礼を申し上げます。

さて，当研究会を本県において，お引き受けすることは，初めての試みで可能かどうか小委員会で数回となく検討して，不安ながら引き受けることとなり，先進各県の実施状況を調査し，各種の資料を戴いて，本格的に準備にかかりました。まず会場として相応しい飛弾の高山を検討しました。古い町並みの上一之町，上二之町，また日下部邸，吉島邸，陣屋，屋台会館など建築教育の一助ともなる見学内容として，しかも小京都らしい料理で持て成すことができる場所としては，この地をおいて他にないと賛成多数で決まりました。

事務局（大垣工高）と会場（高山工高）が遠距離のため，打合せ，調整など非常に困難で，宿泊名簿が大会要項に入らなかったことなど意志の疎通が不十分なことがしばしばありました。いよいよ準備万全，手落のないよう配慮のもと前日より高山入りをしました。早速県内各校の役員で会場の準備，細部の打合せを行いました。当日朝から展示物の準備を進めていると折角苦労して作った積算ソフトを忘れていたり，受付簿を紛失したり，右往左往しながら大会を行いました。

第35回岐阜大会開会式

大垣工高パソコンCAD



研修場所高山市民文化会館，宿泊場所高山グリーンホテルにおいて来賓，文部省教科調査官，全工高長協会理事長，高山市教育長，県教委指導主事を迎え，会員校多数の参加で盛大に終りました。当大会は時代に即応した諸問題（各科目の分科会・研究発表）が提起されて，大変貴重な教材を得ることができました。なかでもパソコン活用には目を見張るものがありました。各県参加者は，今後の教育活動に大きな刺激（情報等）を得ることができ，しかも視察研修により，古い町並の建築文化を満悦されたと思われます。今後はエレクトロニクスの進展に対応した建築教育のあり方を一層研究して，進むべき方

向を見い出さなければならない。いよいよ新教育課程も平成６年度より年次移行されることとなり，当研究大会を通して，ますます研鑽し「より豊かな人間生活を支える建築教育」をめざし当会の発展を願う次第です。

第37回（昭和62年度）石川大会・研究発表「透視図の学習指導」の思い出

石川県立小松工業高等学校　土　屋　　栄

具体的な発表内容は，コンピュータによる３次元処理及びそれに対する着彩指導でした。本校における両者のその後は，前者は市販ＣＡＤに置き変わりつつあり，後者はさらに充実した指導内容に成長したように思われます。先日も石川県デザイン展において本校３年生が，並み居るデザイン科の学校を差し置いて最高賞を授賞しました。前者はＣＡＤに置きかわりつつあるものの，３次元処理指導のノウハウは，機種の選定・利用法の展開に大いに役立っており，結果的に，当時発表した内容は本校において，形こそ変え基本的な面は変わりなく生き続けているように思います。さて，当時の発表を振り返ってみると，他校で実践例の少ないパースの着彩指導と言う事で，題目的には興味と関心を持たせるものであったと思いますが，実際の発表内容はコンピュータによる３次元処理を中心とした指導計画とその概要に終始し，着彩に関しては，生徒作品の発表とかなりの抽象的な指導の要点を述べるにとどまったような気がします。今から思えば，発表時間・資料作成費用等に問題があったように思います。今後このような機会がありましたら，ぜひ着彩についての具体的な指導法について発表したいと思います。なお，当時の思い出として今でも忘れられないものの一つは，資料作成に当って，発表１カ月前より建築部生徒と夜９時・10時まで毎日学校で作業した事です。楽しみの一つは，みんなで作る食事とそれを食べる事でした。彼らは非常に良く頑張ってくれました。私自信の思い出でもありますが，彼らにとっても忘れられない思い出の一つとなった事でしょう。

第38回（昭和63年度）埼玉大会・総会の思い出

埼玉県立大宮工業高等学校　松　本　重　昭

埼玉大会は当初，昭和64年度（第39回）の予定だったが，急遽変更になった。そこで下見として３名が石川大会（第37回）に前泊から参加し，帰ってから早速埼玉大会の準備委員会を発足させた。

準備委員会で苦慮したことは，会場の選定である。ご存じのように埼玉県には温泉地が無く，大規模の宿泊施設が皆無に近い。そこで候補地として，交通の便は悪いが200名以上が宿泊できる秩父地方が挙げられた。

しかし途中から，大会の期日を例年より２週間繰り下げれば，埼玉博覧会が見学できるということで関係方面と連絡をとり，博覧会場である熊谷に候補地が決定した。

ところが間際になり県教育委員会より，その時期には全国高等学校長会議があり出席できないとの連絡があり，熊谷はご破算になってしまった。そこでまた秩父地方と理事校である川越方面で検討が繰り返えされた。秩父は距離の点で，川越は宿泊の関係でなかなか結論がでなかった。そうこうするうちに現在大宮に建設中のソニックシティ（来年４月オープン予定）ではどうだろうかということになり，資料を取り寄せ検討をした。その結果ソニックシティで行うことで最終的に合意ができた。

ソニックシティで行う場合の問題は費用の面である。宿泊費や懇談会費だけでも会費等で充分できないので，賛助金に頼らざるを得ない状況である。

そこでソニックシティのホテル側と交渉を繰り返し，宿泊費や懇談会用の費用を安くしてもらった。例えば懇談会用のウィスキーに関してはボトルの持込み（持込み代無料）を認めてもらい，大会当日には20本のボトルを持ち込んだ。予算案も賛助金の集り具合に応じて，２段，３段の計画書を用意し，対処できるようにした。

結果は，埼玉県各学校の努力と各企業の協力のお陰で，予想以上の賛助金が集まり，無事大会を終了することができ感謝している。なお賛助金の依頼方法は，各学校の卒業生が行っている企業等のリストを持ち寄り，お互いの学校同志でダブらないように調整した。

教育懇談会

大会当日に困ったことは，ソニックシティの入口が９時にならないと開かないので，準備が忙しかったことと，式次第や案内表示等を書いた紙の束が，手違いから搬入が極端に遅れ，受付の時間ぎりぎりとなり，どうにか間に合ったことである。

それ以外に関しては特に問題はなく，無難に進行し終了することができた。

第39回（平成元年度）静岡大会・総会の思い出

静岡県立島田工業高等学校　平　野　和　成

静岡県焼津市での第39回総会・研究協議会には，北海道をはじめ各地より多数の先生方にご参加いただき，誠にありがとうございました。当日は，会場の窓からの伊豆半島・駿河湾・富士山のすばらしいパノラマと海の幸でお迎えしようと思っておりましたが，２日間とも荒れた天候になってしまい，残念でなりません。

静岡県では過去において，昭和27年と昭和36年の２回，東日本建築教育研究会の創立間もない時期に行われておりますが，その当時の先生も全て退職されて，手さぐりのスタートでした。実行委員のメンバーも，毎年各地で行われている総会・研究会に参加をしていて，その当番県のご苦労は感じてはおりましたが，実際に当番県となってみまして，何から手を付けて良いのかわかりませんでした。幸にして，第38回の埼玉大会の詳しい資料をいただき，非常に参考となりました。

どの当番県でも同じだろうと思いますが，一番心配するのは，資金面だと思います。県内建築科職員全員が分担し，建築関係の各協会をはじめ卒業生の就職先へと出向き，協賛のお願にあがりました。その他２日間の細かな運営方法の検討，参加者の確認及びそれらの印刷といろいろと大変でした。また，多くの来賓の方々への参加のお願いも一つ一つ勉強しながら進めました。

大会を終了した数日後，私自身の多くの不手際を感じながらも，ホッとした気持でおりました時，会長をはじめ多くの方々から丁重なお手紙等をいただき，本当にうれしく思いました。今後，実行委員・事務局に当たられる先生方，大いに頑張っていただきたいと思っております。

最後に，この研究会のますますの発展をお祈りし，併せて静岡大会にご協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

会員の声

昭和62年度　夏期構造実習研究協議会に参加して
「見えてきた　これからの教育」

群馬県立前橋工業高等学校　安　斎　信　嘉

私は今，江東区の親水公園に来ている。７月31日，８月１日の二日間にわたって行われた，恒例の，東日本建築教育研究会・構造分科会の夏期研究協議会を終った足で，「手づくりの郷土」を見学する為である。つい今し方，同僚（ここでは，あえてそう申させて戴きたい）達は，二日間の研修日程を消化して，思い思いの研修成果を御土産に任地に向け帰路の旅人となって散って行った。

私が，この研修会にお世話になって，15年の歳月が過ぎた。この間，中央本部の諸先生方には一方ならぬお世話を頂いている。

研修会なるものは種々あるが，この夏の研修会は格別の趣を持っている。教える立場から反転して，自ら学ぶ立場になって体験できることに加えて，懐しい学生時代を過ごした，もう一つの郷里，東京に戻って，昼夜を知らぬ都会の人ごみとビルの狭間の中に小さな自分を再発見するのは私だけだろうか……。

研修は，自ら目標と課題を持って参加し，自問自答の研修態度を集団との関りの中に置き，研修を通して，新たな課題を持ち帰えれる者こそ，真に実りある研修を終了したことになろう。

紙面の都合で語り切れないが，安田学園，建築科での構造実験では，型枠製作・鉄筋加工から始め，コンクリート調合，圧縮試験，引張試験，載荷試験の順に適時パソコンによるデータ処理を行なった。予め準備された工具や材料を用いて，班毎に製作し，実験し，結果の処理をした訳である。時節とはいえ，大きな雷鳴に戦きながら一日目の研修は終った。

大相撲発祥の地，両国に在って，新国技館を目の前に，伊藤忠太設計による東京都慰霊堂と隣接し，水と緑の安田庭園は学園のオアシスには贅沢に思えた。64年の古き伝統に支えられ，記念事業で新装された重層体育館始め校舎内外の環境整備には，公立学校では到底手の届かぬ事業におもえ，伝統と学園精神を持った学舎で生活する生徒達は幸せである。

夕方，催された，懇親会のビールで渇いた喉を潤したが，都会の異様な水の味とは違って，飲むビールだけが田舎者の私には格好の活力剤となった。

二日目は朝早く学園に集合し，記念写真（良く写ったかは定かではない……）の後，都バスを利用しての大移動である。写真撮影と言い都バスの大移動と言い思わぬ体験をさせてもらった。

清水建設，技術研究所は江東区越中島に在った。研究所では太田所長の時代の先端を凝視した，説得力ある話しは，情報化・多様化の時代に工業教育を司る我々に一つの光を与えてくれた。この時こそと多くの質問が出され，適切な答弁に気を強くしたのは私一人ではない。速度化された現代社会にあって「結果のみ教える教育」に警鐘し，多くの事象の奥底にある理論を多面的かつグローバルな視点から考える洞察力を持つことが何

よりも大切であることを教えてもらった。それらは速効性のある価値論を超越した清水建設技術研究所創設の精神でもあろう。

多くの方々に背をたたかれながら育んでもらい，教育者の仲間に入れていただいている本部関係の諸先生方に，また，安田学園側の物心両面にわたる御配慮と，担当校はじめ，準備をされた多くの諸氏の御苦労に対し感謝すると共に，加えて，清水建設技術研究所の所長はじめ百数十名に及ぶ全所員の方々が我々の研修会に全面的に協力して下さり，改めて企業の結束と温かい思いやりに感謝を申し上げたい。

二日間の短い研修会ではあったが，多くの人と関りを持ちながら，お陰で多くの事を学ぶことができた…。

本当の意味でのレポートは，今後多くの実践をしながら，今回の企画の意図とした関係各位の恩に報いたい。

人間教育の実践を通して，我々が，人間社会に対して，何を提供し得るか……。私が今回の研修会で，技術研究所から持ち帰った課題である。

8月1日，江東区『そば処にて』

昭和63年度　夏期施工実習研究協議会に参加して

栃木県立宇都宮工業高等学校　大　島　一　夫

8月4日(木)～6日(土)までの3日間，景勝地新潟県赤倉で行われた夏期施工実習研究協議会に参加する機会を得ました。この研究協議会は東日本建築教育研究会が主催する一連の研究会のうち，施工分科会が行ったもので，これまでの各学校会場から今年は特に分科会の配慮から東京工業高等学校赤倉山荘研修所で行ったと，お聞きしました。

研究協議会は三つの部門ー木造実習・鉄筋コンクリート実習・鋼構造実習ーを実習によって体験学習するものでした。協議内容の充実と共に恵まれた環境のもと，大いに成果が上り，参加した私にとっても意義深いものでした。

8月4日午後より東日本各地より馳せ参じた60余名の参加のもと，開会式・概要説明（日程・班分け・ビデオ予習）を行い，運営委員紹介を経て3部門の実習をＡＢＣ班のサイクルで学習しました。6日最終日は全体会と閉会式によって幕を閉じました。

学習のスケジュールは中々きつく，朝8時半より夕方5時半まで，先生方は夫々作業服に身を包み一生徒となって学習しました。避暑地とは言えかなり暑く，休憩時間が待ち遠しい程でした。夕食後にはスライドによる研究会が行われるほど，他の研究会と比べても一流と思いました。他方，会を主催し，指導に当られた委員の方々には大変なご苦労があったとお聞きしました。事務処理・準備後片付けと大変な仕事の量と思われます。

日頃生徒の実習指導のうち特に施工実習には何かと問題点を痛感しております。かつては建築教科担当の相当数が現場経験を持っておりましたが，昨今では一握りになっております。施工技術の多様性は見受けられるものの，生徒に対しての指導は合理的で間違いのないことが肝要と思います。座学嫌いの最近の生徒でも体を使って物を造ることには大変興味を示すことがあります。この時，指導者がスムースにテキパキと目の前でやってのけられれば，生徒の理解や興味も増し素晴らしい授業になると思います。このような私自身の悩みや問

題点も今回のような実のある研究会に参加することによって解消できると思いますし，また，新卒の若い先生方には不可欠な研究会であると思われます。

建築の生産過程もコンピュータによってコントロールされるようになり，それによって授業でのコンピュータ教育のウェイトも日に日に増しています。しかし，生産過程の末端－現場における技術者の工程管理はコンピュータの理解＋α－に携わる生徒達を社会に送るとき五感を使って修得させた施工実習が役立ってくれると思われます。

夕食後の談話にはかつてお見受けした先輩方や新しい顔の方々それぞれと意見を交換し楽しい集いとなりました。参加された先生方は異口同音に「来てよかった」と言っており，閉会式で委員の方が話された「生徒の授業に役立たせて下さい」という意向も必ずや適えられると思われます。研修中お世話になった委員の方々，また，先生方にお礼を申し上げると共に会の益々の発展を祈念して手記といたします。

平成元年度　夏期製図実習研究協議会に参加して

山形県立鶴岡工業高等学校　後　藤　　武

今年も夏休みの始まりと同時に熱苦しく，恒例の東日本建築教育研究会の真夏の研修が，大宮工業高校において，７月25日～26日の２日間にわたって行われ，今年は（パソコン）CAD システム操作の講習並びに討論会があり，実年に鞭打っての参加となりました。

第１日目の研究協議は「CADの概要」，機器の扱い方より始まり，平面図入力（壁，建具，器具）更に（床仕上，名称，寸法線）等一つ一つ丁寧に御指導下され，且つ立体（立面）図入力（基準値，外建具，屋根）等一通り入力し，16時30分で第１日目終了し，渇いた喉をぐっと堪えて玄関前での記念写真（良く写ったかどうかはカメラ任せ）。

後の懇談会は，大宮駅前「そごうスカイビル」にて，渇き堪えた喉を潤したビールは，又格別のうまさであり，明日への活力として生き生きと蘇りました。

中には，かつてお見受けした先輩の方や，新しく覚えた顔，顔，それぞれ有意義に語らい，なかなか盛大裡のもとに１日目は終了しました。

２日目は，立体図のアングル決定へと進み，注文に応じたいろいろな角度から眺めたパースを自在に形造れ，更に着色もできた。まさに現代パソコン時代を思わせ，実に素晴らしいことと思いました。ただ，遺憾に思われることは，CADの機種によってコマンドや操作の違いで，自校に帰って復習しようにも，生徒に役立たせるにも役立たないことです。自分としては，各種機能を学べることで，幅広く勉強できることは有難いと思いました。

今一つ欲を言えば，各校の機種を調査の上，該当機種を揃えて頂ければ，もっと深く研修することができるし，さらに自校での対応もスムーズにできるのではなかろうかと思いました。今後の研修には，今少しの気くばりをお願いしたいと思います。

最後の討論会では「パソコンを教育にどのように生かせるか」とのテーマで進められましたが，コンピュー

タの知識はあまりいらない，図面を読めればよい，また，コンピュータには人間にできないことをやる能力がある，その能力を引き出すように使いこなせるように，その道具だと思わせるような教育，道具として溶け込んでいけるように，と言っておられましたが，実際面ではそこ迄がむずかしいと思います。

２日間の短期研修ではありましたが，多くの人々との係わりを持ちながら，自分なりに多くを学びとることができ，以後何等かの形で生徒に還元しなければと思いました。

会場校の諸先生方，御指導に当られた武藤工業，石崎・友重様，並びに清水建設の今川様の実践教育等，我々の教育研修に，全面的に御協力・御指導下され，感謝を申し上げるとともに改めて（コンピュータ，パソコン）の必要性を感じとった次第です。

工業教育の益々の発展と，各先生方並びに関係各位の御健勝を祈念し，拙ない文面ながら手記といたします。

建築教育のうつりかわり

富山県立高岡工芸高等学校　宮　浦　弘　義

東日本建築教育研究会の40周年おめでとうございます。

この40年間に建築教育は大きく変貌してしまった。この研究会が発足した当時は，戦後ようやく世の中が落着きを取りもどし，少しずつ建設の槌音が聞こえるようになった頃である。全国の新制高校に数多くの建築科が設置され，中堅技術者の育成をめざし，充実した建築教育がなされた。創立95周年の伝統と歴史のある本校でも，昭和26年４月に建築科が新設されやはり40周年を迎えます。私は本校の第一回生でもあります。建築科の設置校は富山工業高校１校のみであったが，２校になり現在も２校であります。本校も1,500名近くの卒業生を輩出し，県内の建設業界を中心に幅広く活躍しています。30年代後半より年毎に高校への進学率が高まり，又高学歴志向により普通科への進学者が増大した。職業教育を重視していた７：３体制もくずれはじめ，普通科への枠の拡大と共に，生徒の多様化や資質の変化がみられるようになった。私は，大卒後県庁に入り３年間の設計監理と，２年間の行政（確認業務）をやり，ちょっとしたきっかけで昭和38年４月より教員になった。そのころちょうどベビーブームの時期であり，100名定員の入学生であったが，まだ職業意識もしっかりしており90%以上のものが建築関連業務に携っている。50年代に入り変化が著しくなった。それに対応するため，いろいろなことがらが導入された。実習を中核とした建築教育，教育内容の精選，専門時数の減少，工業基礎，工業数理，情報処理教育の導入などにより，かつての専門性がうすれ，本来の建築科の教育目標が失なわれつつある。私は20年あまり２級建築士の試験委員や審査会の委員をやっているが，年毎に高卒の建築士資格取得者が減少しているのは心さみしい限りである。

我々教師が，建築科の生徒に対し，どのように目標を持たせ，どのように建築教育をなすべきかをこの研究会を通じて根本的に考え直す時期ではなかろうか。

本会の益々の発展をお祈りします。

東日本建築教育研究会との出会い

岩手県立一関工業高等学校教頭　千　葉　盛　樹
（前県立盛岡工業高等学校）

私が，初めて本研究会に参加させていただいて以来，すでに20数年が過ぎた。

その中で，特に私にとって印象が深く強く思い出されるのは，最初の研究会の出席と今から15年前（昭和49年），盛岡工高で開催された第２回施工実習研究協議会（３日間）ならびに，ちょうど５年前（昭和59年）に盛岡で行われた第34回本会の総会・研究協議会である。

さて，私が参加した最初の研究会は昭和39年，東京オリンピック開催終了後まもなく行われた秋季研究大会「建築計画実験に関する研修会」であった。

東京オリンピックが終了したといえども，そのムードに日本中が浸っている最中であった。私の担当教科の関係上，上司に進められ事前の十分な研修せずままに出席した記憶が強く残っている。それは当時，本校には計画実験に関する実験器具が皆無であり，日頃それらは教科書や参考書の説明や写真のみで勉強し，実際手に取って操作したわけでないので思うような研修ができなかった時代であったからである。

研修会には，当時早大教授の井上宇市先生が講師を担当され，建築に関する実験・器具器材の説明・操作方法など詳しく説明がなされ，十分に理解でき自信をもってその後の授業に活用できた参加の意義が強く感じられた。

翌日の建築物の見学会は，代々木の屋内水泳プールと屋内体育館の見学であった。素晴らしい世界記録を樹立したプールの踏み込み台に立ち，テレビで観戦したオリンピックの感激を思いだしたのも昨日のように思われてならない。いずれも関係者の案内で裏方の，とても平常時では見学ができない設備関係を見学できた事は，とても有意義であった。

その後，各種の見学会（特にＮＨＫ会館・東芝技術館等）に参加させていただいたが，本会を運営されている方々のおかげだと感謝申し上げたい。

次に昭和49年，盛岡工高で実施された施工実習講習会である。第２回目（第１回は横須賀工高で実施）の実施にあたり，会場校引き受けのアンケートに承諾したのは，本校１校のみとのことで引き受けざるを得ない結果となったことである。

実際，実施が決定されると事の重大さにその責任が感じられた。というのは，まず前回の研修会に本県から参加した先生が１名だけであり，その講習内容が知らないということ等検討すればするほど問題が山積してきたからである。

そこで，本校のみでは手におえるものではないので，本県の工業部会研究会・建築専門部会が協力一致しその任に当たることとした。具体的には，講習内容を構造別に分け担当する学校を割り当てた。

しかし各学校は，県北・県南に位置し距離も遠くその段取等を打合わせにも困難を来したことが心労であった。夏期休業に入り各校から担当の先生が，不足している機械工具など搬入しその準備にとりかかったのは多分，開催１週間まえだと記憶している。

当日は，近年まれにみる暑い日で会場となった視聴覚教室は，暑さと出席された先生方の熱気で活気づけら

れていた。定刻関係者から日程・実習内容がスライドによって説明され，午後から実習が開始された。

各先生方は，実習服に着替えられW造・ＣＢ造・Ｓ造・ＲＣ造の各パートに分かれ体験学習が始まった。工具を持ち材料とにらめっこしている先生・不馴れな手つきで差し金を操作している先生方等どの先生方も真剣そのものであった。

その姿が，準備のため悪戦苦闘した関係者一同唯一のほっとした気持と感動を与えてくれた。

最終日は，校内の食堂で会食その後各先生方と三三五五に分かれることになったが，僅か３日間といえど惜別の念でいっぱいであった。これを契機に県内の各学校の建築実習の取組と成果は一段と躍進した事は当然のことであった。

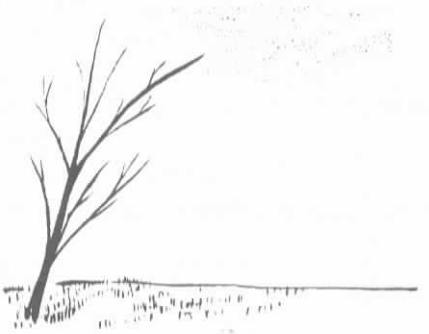
最後に記さなければならないことは，昭和59年に盛岡市で実施された総会・研究協議会である。当時私は，他校に在職していた関係上，直接の運営には関知できずもっぱら研究発表会に意を払うことであった。特に「工業基礎」・「工業数理」に関する具体的な発表の責任者とし，関係者の協力のおかげで成功裡に終えることができた。

ちょうど当日は，６月15日。夏を告げる盛岡祭「チャグチャグ馬っこ」の日。

素晴らしい好天に恵まれ私も初めて見物。本会の成功と祭の気分が快く，私の気持を和ましてくれた。

今，20数年間の建築教育とお世話になった本研究会とも遠のき，一途に工業教育全般の指導に携わり一抹の寂しさを感ずるのはぜいたくというものか。

ともあれ，今後建築教育の指針となるべく本研究会の使命は，これまで以上にはたすべき課題が山積し，その責務に期待していただきたいと祈念し，今後のより一層の活動を切望したい。



東日本建築教育研究会
静岡大会に参加しての思い出

北海道旭川工業高等学校　田　中　直　道

本年度，本校が北海道建築教育研究会の理事校となり，東日本の静岡大会に始めて参加する機会に恵まれ大変光栄に思っています。

総会も６月９・10日の２日間でしたが今となってみれば，私にとっては非常に感動的な日々であったと記憶しています。まず開会式における各来賓祝辞の中での本大会の歴史的経緯や，新課程の「心の教育」の重要性，工業教育の基礎・基本の充実，また生徒在学中の公的資格の問題等常日頃私が疑問に感じていた事が分かりやすく解説され心の晴れる思いでありました。引続き分科会が行われ，私は施工分科会に出席しましたが，実習時のレポートについては今後の教育にとって大変参考になる所が多くありました。

教育懇談会では，青森県の各先生方と隣り合わせとなり，同じ雪国の建築教育について熱の入った話し合いとなり夜が更けるのも忘れるほどであった。２日目には研究発表があり特に研発1)については近い将来実施される「課題研究」には大変向いている内容ではなかろうかと感じながら聞いっていた。

今後はこの２日間で学んだことを本道の建築教育の中にどのようにして生かそうかと考えながら帰道しました。尚この大会を企画・運営されました当番校のご苦労に対し，厚くお礼申し上げるとともに，大変雑文となりましたが２日間の思い出とさせていただきます。

分科会報告

製図分科会報告

東京都立田無工業高等学校　赤　地　龍　馬

昭和56年＜1981年＞から，10年間＜1990年まで＞の分科会報告をいたします。印象に残ることは，製図コンクールの運営費などの十分な見通しもなく，昭和57年からの実施に，無理にお願いしたこと。昭和60年の夏期研究協議会の会場である，日本工業大学の三浦学長・市川教務課長，関係教授・職員の皆様に大変お世話になったこと。そして，日本工業大学とのパイプ役として，東京工高の先生方にご協力をいただいたこと。

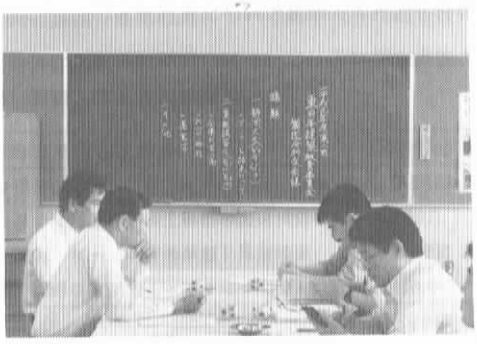
また，平成元年の夏期研究協議会では，埼玉県大宮工高の逸見校長・教職員の皆様にも大変お世話になりました。いずれも，製図分科会の無理なお願いに対して，ご理解とご協力をいただいたことに感謝し，厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

10年間の研究活動の概要（昭和56年＜1981＞～平成２年＜1990＞）

年度・総会	研究活動などの内容（●印は総会の分科会研究協議題）
昭和56年 (1981) 長野大会 (第31回)	●建築製図の学習内容調査結果の分析を報告　赤地龍馬（墨田工高） ●設計製図の指導上の問題点アンケート（長野大会，参加者全員に実施） 集計結果「建築教育ニュース　1981. 11」に掲載 ○「製図コンクール」実施案の検討　実施案は理事会（57. 2. 12）で承認される
昭和57年 (1982) 群馬大会 (第32回)	●製図コンクール実施要項・課題案について検討 ●教科書＜実教＞の木造２階建専用住宅製図例＜改定案＞の検討 ○第１回「製図コンクール」運営に全面的に協力，以後現在も続行
昭和58年 (1983) 富山大会 (第33回)	●第１回「製図コンクール」入賞校の実践報告　佐藤勝弘（藤沢工高）　角田勝男（向の岡工高＜定＞） 大仁田拓三（市川工高）「建築ニュース　1983. 11」掲載 ●製図コンクール各課題の金賞作品の写図を総会で配布　以後毎年配布続行 ●第１回製図コンクール入賞作品　総会々場に展示　以後毎年展示続行
昭和59年 (1984) 岩手大会 (第34回)	●実践報告「生徒の多様化に対応した指導」　塩沢　泰（関東一高）「生徒の個性を引き出す指導」 川端健三（盛岡工高）「建築ニュース　1984. 11」掲載 ○第３回製図コンクールに会員校以外より18校・51点応募　全国規模となる ○第２回製図コンクール審査結果を「建築士と実務」（オーム社刊）昭和59年７月号に掲載，以後第５回（昭和62年３月号）まで連続掲載
昭和60年 (1985) 岐阜大会 (第35回)	●第４回「製図コンクール」実施要項・課題の検討 ●校長協会による「建築製図検定試験」実施要項の検討 ○夏期研究協議会８月１・２・３日「パソコン（PC-9801）の実技演習」（於：日本工業大学）　講師　片山滋友・丹波次郎（日本工業大学　教授）参加者 42名　上記３項目「建築教育ニュース　1985. 11」に掲載
昭和61年 (1986) 福島大会 (第36回)	●実践報告「透視図の指導法と今後の課題」　諏佐真一（田無工高）「建築ニュース　1986. 11」に掲載

昭和62年 (1987) 石川大会 (第37回)	●調査研究報告「製図総則（JIS Z 8310- 1984）の改正と建築製図」　土田裕康（蔵前工高） 「建築ニュース　1987. 10」に掲載 ○第６回製図コンクール審査結果「住宅建築」（建築資料研究社刊）昭和63年２月号に掲載　以後毎年２月号に連続掲載
昭和63年 (1988) 埼玉大会 (第38回)	●「製図教育とCAD」のアンケート結果を報告　塩沢　泰（関東一高） ●「鉄骨構造製図例」（実教）についてのアンケート（製図分科会参加者に実施） ●教科書「建築設計製図」（実教）の内容検討 上記，２項目のアンケート結果は，「建築教育ニュース　1988. 11」に掲載
平成元年 (1989) 静岡大会 (第39回)	●設計製図「設計課題」のアンケート結果を報告　酒井健一（神奈川工高） ○夏期研究協議会７月25・26日「CADの実技演習（初心者対象）と建設会社での利用状況」（於：埼玉県大宮工高）　講師　今川結城（清水建設）　石崎真平（武藤工業・株）　参加者45名「建築ニュース　1989. 11」に掲載
平成２年 (1990) 神奈川大会 (第40回)	○夏期研究協議会８月７・８日「透視図の着彩と添景の実技演習」（於：東京工高）　講師　中村勝彦（プロトデザイン一級建築士事務所・所長）

平成元年夏期研究協議会
「CADの実技演習と建設会社での利用状況」
平成元年７月25・26日（埼玉県立大宮工高にて）



分科会風景

計画分科会報告

神奈川県立小田原城北工業高等学校　大　庭　孝　雄

計画分科会のこの10年の活動をかえりみる時，教育課程とのかかわりの深さを，あらためて感じさせられる。様々な学習指導要領の動きの中で，現実的なテーマをとりあげ，活動のよりどころとしてきたように思われる。

さらに言及すれば，教育課程とそれに伴う教科書の動向が，分科会活動の指針ともなっていたようにも思われてならない。

本来の研究会の活動のあり方を考える時，建築の学問体系に位置づけられた「建築計画」をテーマにしぼり込んで，実際的な教育課程や教科書の枠にとらわれることなく，言わば，純粋な「建築計画」を正面からとら

えて，実践的な教育活動に一助となりうる研究成果を目ざしたい所である。

この10数年来の学習指導要領の改訂は，従前からの教育課程の流れを，大きくかえてきた。

建築計画の中に，建築史や建築設備が組み込まれ，さらには，法規が組み込まれるといった，いわゆる，科目の整理統合が進められた。

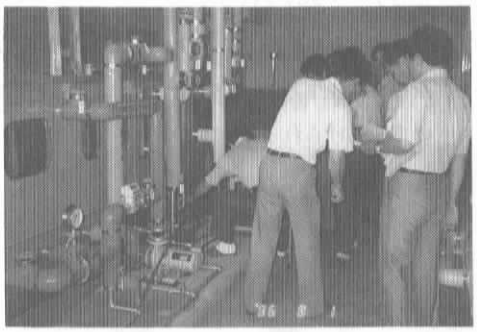
一方，このような中で，工業基礎，工業数理といった新しい科目の設置やコンピュータの導入などから，科目の統合とあいまって，授業時数を圧迫，指導内容の精選を余儀なくされてきた。

これらの一連の動きが，分科会の活動テーマと深くかかわる結果となった。言わば，世の動きに，ほんろうされてきた感をもつ。

具体的に言及すれば，昭和50年代では，新教科書を中心とした学習指導について，実態調査，分析，さらに指導法についての模索がなされ，あわせて，科目の統合にかかる諸問題について検討を進めた。後半に入ると，科目の統合によって組み込まれた「法規」の取扱い，指導法などについて検討，さらには，基本的な演習課題を作成するなど，様々なこころみを進めてきた。昭和60年度には，教科書の具体的な内容検討に着手，３年をかけて，まとめることができた。

しかし，今ここにいたり，再び，数年後の指導要領の改訂に直面し，新科目「法規」に対して，どのように対応すべきか，「法規の手引書」の企画をよりどころに，これから数年間，分科会活動のよりどころとすべく，取り組みはじめた所である。

より学究的な活動を願う反面，現実的な動きに，追従せざろうえないことに，はなはだ不本意な感をもちつつ，誰かが，どこかで，とりあげて検討しなければならないのではなかろうかとの，心意気で活動を続けている昨今である。(写真は，昭和61年８月１日～２日，都立蔵前工高での夏期研究協議会の実技研修のもようです。)



構造分科会報告

千葉県立市川工業高等学校　佐　藤　　哲

本分科会は建築構造，建築設計および構造・材料に関する実験・実習等に役立つ，学習指導法の研究や見学などを実施した。特に教育現場にコンピュータの導入が急速にすすみ，コンピュータの活用を高めるための研究を重視しすることとなった。下記に構造分科会の夏季研究協議会のようすを紹介する。

1) 昭和58年度　夏季講習会

●富士通のパソコンによる講習会

〔於：東工大附工高〕

Bコースは初級程度とし既製プログラムの活用方法と機械操作演習を実施した。既製プログラムは，パ

ソコンによる透視図の作成に必要なものを活用した。

データ入力練習を兼ねた住宅パースの作成演習を行い，図形処理について研修した。

またパソコンによる自動製図（平面図）についての講義があり終了した。

参加者　48名・先生方暑い中大変ご苦労さまでした。

2）昭和62年度　夏季研究協議会

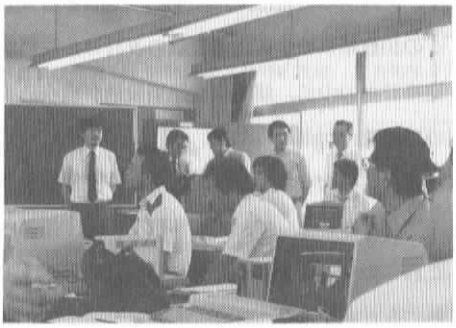
●鉄筋コンクリートばりの製作実習

●鉄筋コンクリートばりの構造実習

〔於：安田学園高校〕

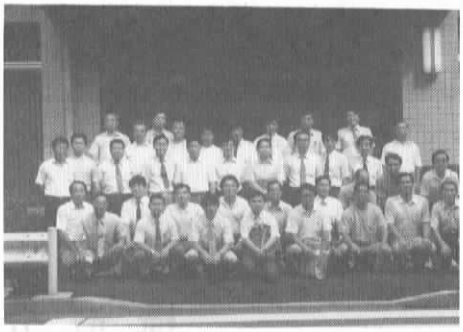
鉄筋コンクリートばりの製作実習では各先生方に鉄筋の加工，組立製作，型枠製作をしてもらい，あらかじめ作っていた鉄筋コンクリートばりの曲げ試験，コンクリートの圧縮試験等を行い，パソコンによるデータ処理を行った。

汗にまみれ鉄筋コンクリートばりの製作に真剣に取り組む先生方，パソコンから出てくる結果に感激の声をあげられる先生方この姿を生徒達が見るとさぞかし感激することでしょう。



熱心に説明を聞かれる先生方

パソコンと対話



実習が終了してさわやかに記念写真（安田学園高前）

施工分科会報告

神奈川県立向の岡工業高等学校　山　崎　敏　弘

創立40周年記念に際し，施工分科会のこの10年間の活動内容を寄稿します。

1.　分科会の構成と報告資料

分科会の研究活動は本来広く建築に携わる会員の英知を結集して検討するべきであるが，地域的な面を考え，

東京・埼玉・山梨・神奈川など近県のご参集願える範囲の先生方を委員として会を運営している。その成果は総会・研究協議会（分科会）の討議資料や建築ニュースに掲載すると共に，夏期施工実習研究協議会などで報告している。

2. 活動内容

○新学習指導要領により，「工業基礎」の履習を行うことになった。そのため，全会員校から実施の有無，内容と単位数，従来の施工実習授業に与える影響などを調査し研究協議会で検討した。それによると，「工業基礎」の内容は本来中学校の技術家庭で修得すべきものであり，工高の建築実習としてはもの足りないものとなっている。しかし，実施により単位減になった建築実習授業を充実させるためにはどうしたらよいだろうか，また，調査の結果建設現場経験のない先生方が多く，実習教授法に苦慮している実態が解り，教授法等を検討することになった。

○夏期施工実習研究協議会は，工高卒業生が施工会社の現場管理部門に就職する率が高く，建築生産の目的を修得させるために，教師自ら「手を汚して体得する」を目標に実施した。その成果は体験された先生方から各学校に合った内容を実践していると言う報告を受けている。

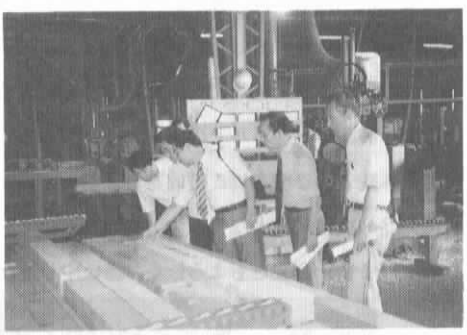
○「教科書の指導内容・方法について」，教科書「建築施工」の教授法について検討した。施工の工程順に合せ理解しやすいように項目を入れ替える，項目の重要度，内容の訂正など，少ない単位で有効な授業ができるよう資料を作成した。

○「施工実習の項目と実習報告書」，先生方から，「施工実習の授業のあと，生徒に報告書（レポート課題）を提出させたいが，適当な参考例がなくその作成に苦慮している」との要望から，準教科書「建築実習２・三訂版」を基に，内容を検討した。

3. 今後の展望

この10年間は，新指導要領，改訂指導要領，そして，教科書の改訂版等，問題点が多々あった。そのような中で建設業界は内需拡大の影響を受け益々工高卒の現場管理者を求めて来ている。

委員会としても，そのような実態を踏まえ，鋭意研究を重ね努力する所存でいます。会員の方々の御指導と御鞭撻を御願い申し上げます。



施工分科会・委員による，プレカット工場の見学会

製図コンクール報告

審査委員長　赤　地　龍　馬

はじめに

全国の工業高校生を対象とした「全国工高製図コンテスト」（主催　株・トンボ鉛筆）が昭和45年（1970）から実施され，建築設計製図の技術向上のため，多大の成果をあげてきました。ところが，主催者の都合により，昭和56年（1981），第12回で中止することになりました。

そこで，せっかく実ってきた生徒の設計製図に対する愛着と意欲をとざすことなく，継続することを「製図分科会」が中心となり，上記の「全国工高製図コンテスト」の応募要項・設計課題をベースに改良を加え，協議した「実施案」が理事会（昭和57年＜1982＞２月12日）で承認され，昭和57年（1982）よりの研究会事業として継続することが決定し，本年（平成２年＜1990＞）で「製図コンクール」も第９回目を迎えました。

実施に当たって

第１回（昭和57年＜1982＞）実施については，運営費について「見切り発車」的な面があり，第32回（1982）総会群馬大会の製図分科会の協議会では「コンクール参加費を徴収したら……」の意見もありました。

しかし，國兼光由会長（蔵前工高校長）のお骨折りにより，全国工業高校長協会の，また，白石四郎常任理事（市川工高）のお骨折りにより，株・建築資料研究社からのご援助によりスタートしました。

そして，入賞者には「賞状」と，副賞として「学用品」が，入賞者以外の者にも「賞状」と「学用品」が参加賞として授与されました。また，入賞校には，月刊誌「住宅建築」が発送されました。これら「賞状」以外のものは，総て株・建築資料研究社の好意により寄贈され，第２回以降も引き続き継続されております。

この「製図コンクール」の実施に「はずみ」をつけてくださった，全国工業高校長協会，および，第２回以降も引き続き，ご協力にご賛同をいただいている，株・建築資料研究社に対し厚くお礼申し上げます。また，応募作品の提出に絶大なるご協力をいただいている全国（会員校および会員校以外）の諸先生方にも厚くお礼申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

審　査　風　景

発足時の製図コンクール運営委員会の委員

國　兼　光　由（会長　蔵前工高校長）	大仁田　拓　三（市川工高）
森　安　四　郎（副会長　田無工高）	土　田　裕　康（田無工高）
五十嵐　永　吉（副会長　東工大附工高）	遠　藤　　勇（東京工高）
高　山　英　一（事務局長　蔵前工高）	角　田　勝　男（向の岡工高・定）
白　石　四　郎（市川工高）	土信田　達　雄（川越工高）
加　藤　　尚（川崎市立工高）	諏　佐　真　一（蔵前工高）
落　合　　弘（藤沢工高）	赤　地　龍　馬（墨田工高）

第１回～第８回の総括

応募学校数　＜（　）内の数字は，西日本地区からの内数を示す＞

	第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回	第８回
	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年
学　校　数	72	63	78(18)	84(15)	89(20)	77(10)	66(4)	77(17)

応募作品数　＜（　）内の数字は，西日本地区からの内数を示す＞

		第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回	第８回
		昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年
設計課題	課題１	107	117	134(24)	142(21)	141(32)	134(16)	124(8)	138(28)
	課題２	75	82	99(17)	112(21)	108(17)	91(9)	82(6)	97(16)
	課題３	62	53	68(10)	79(12)	92(18)	77(8)	61(5)	63(7)
合　　計		244	252	301(51)	333(54)	341(67)	302(33)	267(19)	298(51)

課題別応募学校数　＜（　）内の数字は，西日本地区からの内数を示す＞

		第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回	第８回
		昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年
設計課題	課題１	56	58	69(12)	75(12)	75(16)	70(8)	66(4)	74(16)
	課題２	41	44	53(9)	62(12)	63(10)	51(5)	46(3)	52(8)
	課題３	34	27	38(5)	45(7)	51(10)	43(4)	34(3)	37(4)

実施要項（第８回　平成元年度）（第１回～第８回ほぼ同じ）

1　課　　題　　別紙の通り

2　応募方法

1）作　品　数　　課題ごとに校内（全・定課程別）で審査した作品中，優秀作品　２点以内とする。
（厳守して下さい）

2）提出図面　　課題ごとに指定された用紙に作図し，下記宛に送付する。

3）送付方法　　原図を痛めないように筒状にし，書留で送付する。

注１　各学校とも全・定課程別にまとめ，所定事項を記入した作品送り状を添付する。

注２　作品送り状の最下欄の学校住所・学校名も必ず記入すること。

注３　表書きに赤字で「製図コンクール作品」と添え書きすること。

注４　応募作品は原則として返却しないが，返却を希望する場合は，次の事項を厳守すること。

a　応募用紙の備考欄にその旨記載する。

b　返送用郵券（¥360-）を指定欄に添付する。

4）送　付　先　　東京都立　蔵前工業高等学校　建築科　土田　裕康 宛

〒111 東京都台東区蔵前１－３－57　　TEL　03－862－4488

5）受付・締切　　平成元年11月１日（水）～11月６日（月）　消印有効。

3　審査方法　　製図コンクール運営委員会において審査し，下記賞状並びに副賞を授与する。

1）金　　賞　　応募作品中，課題ごとに各１名
2）銀　　賞　　応募作品中，課題ごとに各２名　　応募数により増減を考慮する
3）銅　　賞　　応募作品中，課題ごとに各３名

注　審査決定後，該当校宛に送りますので，生徒にお渡し下さい。

4）参加優秀賞　　金・銀・銅賞の入賞作品を除くすべての応募作品に授与。

注　各学校宛に送りますので，各学校で所定事項をご記入のうえ，応募生徒にお渡し下さい。

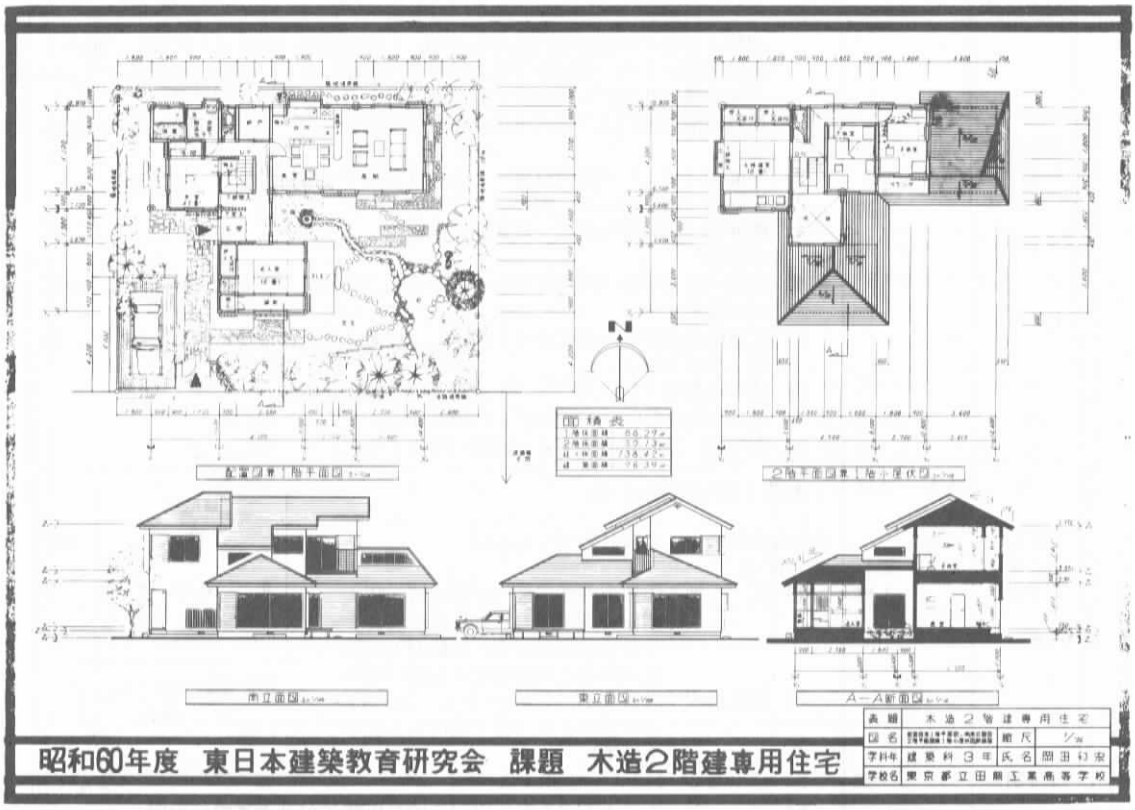
4　そ の 他

1）トレース紙は特に指定しませんが，作品は委員会で複写したうえで審査しますので，その点を考慮して指導するようお願い致します。

2）応募作品の著作権工業所有権などは応募者の所有です。ただし，作品の公開（展示・出版）については，当研究会が自由に行うことが出来るものとします。

3）審査結果は「住宅建築」（建築資料研究社刊）
平成２年２月号に掲載予定です。

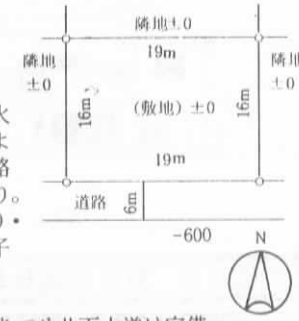
課題３　金賞作品　第４回（昭和60年＜1985＞）



（都立　田無工業高校３年　岡田和宏）

課題一覧表＜第８回＞（第１回～第８回ほぼ同じである）

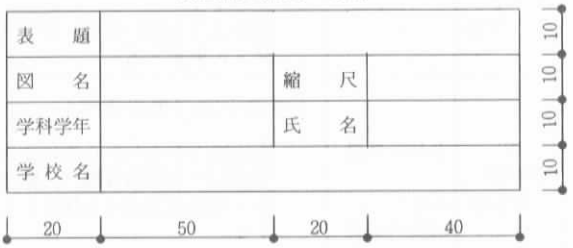
課題番号 応募学年	用　紙	課　題　内　容	参照図面
1 全日制 1学年 定時制 1・2 学年	トレース紙 A３ (297×420) 1枚	「部分詳細図」 1　要求図面 参照図面の軒先マワリ詳細図を縮尺１：５で製図（摸写）しなさい。 2　注意事項 線の太さの使い分け，文字・数字の大きさ，図形の正確さに留意する。	「建築設計製図」 （実教出版社　刊） 製図例　１－２
2 全日制 2学年	トレース紙 A２ (420×594) 1枚	「木造平家建専用住宅」 参照図面のうちから次に要求する図面を製図しなさい。平面図・立面図は摸写，断面図の表示内容はA－A，B－B断面図と同じ程度とし，配置図は各自の計画とする。 1　要求図面 1）配置図・屋根伏せ図　縮尺　１：200	「建築設計製図」 （実教出版社　刊） 製図例 ２－１・２－２・２－４ 本文 P・121　図４－16

課題番号 応募学年	用　紙	課　　題　　内　　容	参照図面
定時制 2学年 3学年		敷地と道路との関係は自由であるが，1面は道路（幅6m）に接し，他の3面は隣地とする。敷地は平坦で地盤面と道路面および隣地との高低差はない。敷地面積は450m²～500m²として地形は各自が自由に設定する。なお，これには造園計画および普通乗用車1台分の駐車スペース（3m×6m）を図示する。 2）平面図（テラス・池の位置・大きさは自由とする）　縮尺　1：100 3）立面図（南側1面）　縮尺　1：100 4）断面図（平面図中のC－C断面）　縮尺　1：100 2　注意事項 1）図面の配列順序は自由であるが，平面図と立面図，立面図と断面図などの配図に注意する。 2）配置図には物置・浄化そうも図示し，位置・大きさは特に制限しないが，適切な計画をする。 3）建物の配置・駐車スペース・造園計画に留意する。 4）敷地面積（450m²～500m²）に留意する。 5）配置図，平面図のテラス・池は自由とする。	
3 全日制 2学年 3学年 定時制 3学年 4学年	トレース紙 A2 (420×594) 1枚	「木造2階建専用住宅」 次の与条件によって設計製図しなさい。 1　与条件 1）敷　　地：中都市の住宅地（住居地域・防火関係の指定なし）にある右図のような平坦地である。地盤面・道路面・隣地との高低差は右図の通り。 2）家族構成：老人（1～2名）・主人（会社員）・妻・子供2人（男子高校生・女子中学生）。 3）延べ面積：110m²～150m²。 4）設　　備：電気・水道・ガスの引き込み可能で公共下水道は完備。 5）そ の 他：普通乗用車1台の駐車スペース（3m×6m）を確保する。 2　要求図面 1）配置図兼1階平面図（造園計画・駐車スペースを図示） 2）2階平面図（1階部分には1階屋根伏せ図もかく） 3）立面図（南面を含む2面）　4）断面図（1面） （いずれも縮尺　1：100） 5）面積表（建築面積・各階床面積・延べ面積だけでよい） 6）設計趣旨（200字以内とし，図面の余白に記入） 3　注意事項 1）図面の配列順序は自由であるが，効果的な配図に留意する。 2）平面図には室名をその室内に記入し，畳・家具その他必要と思われるものを明示する。壁の部分は塗りつぶさず，柱を図示する。断面図の切断位置を平面に図示する。 3）敷地と道路との高低差に留意する。	

共通注意事項

1. 完成図面であること。
2. 図面は参照図面および設計製図課題の内容をよく理解してかく。
3. 線の種類・太さなどの使い方が明りょうで力強くかき，それぞれの線にむらなく，字の形状・大きさなどがふぞろいにならないこと。
4. 提出図面は複写して審査するので，特に注意する。
5. 図面の種類および縮尺は規定に従い，正確にかき，要求図面以外は不要である。
6. 表題欄は各図面とも右下すみに右図のようにとり，記入すること。
7. 鉛筆仕上げとすること（色鉛筆も可）。
8. 文字・数字の型板の使用は不可。

表題欄の形式・寸法



製図コンクール入賞者一覧表（第１回～第８回）

第１回（昭和57年）

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
金　賞	大船渡工業高校	金野　仁	岐　南工業高校	上田　誠	前　橋工業高校	吉田　稔
	高　崎工業高校	小野里匡章	藤　沢工業高校	馬場　雅樹		
銀　賞	豊　橋工業高校	田嶋広治郎	宇都宮工業高校	須藤　隆司	八戸工大第一高	月館　義人
	大船渡工業高校	高橋　賢弥	弘　前工業高校	須々田充夫	前　橋工業高校(定)	船津　卓也
	浜　松工業高校	小島　敦子	珠　洲工業高校	寺上　英樹		
	鶴　見工業高校	小島　明	新　潟工業高校	伊藤　頼子		
銅　賞	高　崎工業高校	堀内　昌好	前　橋工業高校	佐々木高志	市　川工業高校	福原　義勝
	可　児工業高校	山田　純	藤　沢工業高校	真鍋　泰明	前　橋工業高校(定)	太田　明広
	前　橋工業高校	山本　和清	川　越工業高校	安田　謙二	静　岡工業高校	深沢　絹香
	墨　田工業高校	小沼　優	鶴　見工業高校	菊地　文一		
	釧　路工業高校	石沢　伸一	宇都宮工業高校	荒川　佳也		
	中津川工業高校	原　克利	川　越工業高校	宮澤奈津生		
			佐　織工業高校	浮具　昌伸		
奨励賞	長　野工業高校(定)	城之内　一登	向の岡工業高校(定)	渡辺　昭浩		

第２回（昭和58年）

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
金　賞	岐　南工業高校	辻　一夫	岐　南工業高校	樋口　明紀	盛　岡工業高校	戸舘　優
銀　賞	札　幌工業高校	中川　淳	釧　路工業高校	石沢　伸一	宇都宮工業高校	須藤　隆司
	半　田工業高校	天木　光英	高　崎工業高校	小野里匡章	盛　岡工業高校	小山　隆春
銅　賞	佐　織工業高校	遠藤　勉	岐　南工業高校	榎並　靖	愛　知工業高校(２年)	水野　豊
	藤　岡工業高校	中川　英一	久　慈工業高校	坂下　正彦	蔵　前工業高校	三輪　昌義
	千　葉経済高校	日暮　善夫	高　崎工業高校	堀内　昌好	前　橋工業高校(定)	鳥井　充幸
	藤　岡工業高校	山崎　正博				

第３回（昭和59年）

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
金　賞	東　京工業高校	増山　徳郎	高　山工業高校	谷口　栄治	高　崎工業高校	小野里匡章
銀　賞	藤　沢工業高校	新井　俊	田　無工業高校	岡田　和宏	釧　路工業高校	石沢　伸一
	豊　橋工業高校	鈴木　雅也	半　田工業高校	西尾　英哲	高　山工業高校	谷　博樹
	市立広島工業高校	小久保弘樹				
銅　賞	松山聖陵　高校	宮下　健二	佐　織工業高校	伊藤　彰洋	市　川工業高校	城竹　秋一
	長野原　高校	下田　宏行	大　宮工業高校(埼玉)	伊藤　勝夫	高　山工業高校	門谷　康雄
	東　京工業高校	淡中　建人	高　山工業高校	栗本　智秀	名古屋市立工芸高校	川口　和男
	大船渡工業高校	上部　亮二	佐　織工業高校	佐藤　雄二	前　橋工業高校	伊佐　俊昭
	田　無工業高校	中西　剛	長野原　高校	野口　幸敏		
	中津川工業高校	市岡　博久				
	峡　南　高校	内藤　高広				
奨励賞	静　岡工業高校	大原　吉治	東　予工業高校	高瀬　晶浩	松山聖陵　高校(２年)	上松　淳
					向の岡工業高校	渡辺　昭浩

第 4 回（昭和60年）

賞＼課題	課題 1		課題 2		課題 3	
金賞	前橋工業高校	岡庭 敏浩	豊橋工業高校	西崎 宏帆	田無工業高校	岡田 和宏
銀賞	半田工業高校	鈴木 雅彦	東京工業高校	淡中 建人	田無工業高校	嶋村 伸志
	高山工業高校	中井 尚	豊橋工業高校	拓植三子男	盛岡工業高校	大森 克
	豊橋工業高校	小原 秀仁	可児工業高校	細田 和夫		
銅賞	田無工業高校	小林 龍一	鶴見工業高校	片山 晴夫	関東第一高校	山形 康史
	半田工業高校	本梅 誠	中津川工業高校	市岡 博久	高山工業高校	谷口 栄治
	豊橋工業高校	鈴木 高広	松山聖陵高校	宮下 健二	関東第一高校	飯田 有登
	岐南工業高校	江川 真琴	盛岡工業高校	大下 由美		
	北富士工業高校	荒井 稔				
	県立広島工業高校	白石 克巳				
奨励賞	神奈川工業高校	今田 隆広	静岡工業高校	大原 吉治	水島工業高校	楠戸 忠彦
	静岡工業高校	土田 一			津工業高校	落合 知道

第 5 回（昭和61年）

賞＼課題	課題 1		課題 2		課題 3	
金賞	関東第一高校	福島 正和	豊橋工業高校	伴 眞一	豊橋工業高校	鈴木 雅也
銀賞	釧路工業高校	山崎 勇一	鶴見工業高校	星川 弘晃	蔵前工業高校	高橋 繁男
	飯田長姫高校	倉田 武志	高山工業高校	牛丸 憲一	佐織工業高校	大野 弘貴
	可児工業高校	岩井 達也	高山工業高校	森腰 康祐		
銅賞	田無工業高校	真保 実	豊橋工業高校	勘解由敦子	津工業高校	伊藤 達也
	関東第一高校	福田 健一	大垣工業高校	川瀬 朝則	鶴見工業高校	片山 晴夫
	高山工業高校	杉山 健司	宇都宮工業高校	宇賀神 哲	蔵前工業高校	丸山 肇
	半田工業高校	竹内 尊司	久慈工業高校	東山日登美	天竜林業高校	古山 泰司
	今宮工業高校	枡田 政幸	県立広島工業高校	吉元 幸治		
	松山工業高校	久保 孝				
	蔵前工業高校	松浦 尊明				
奨励賞	静岡工業高校	栗山 潤二	向の岡工業高校(定)	藤崎 茂雄	静岡工業高校	松本 正
	神奈川工業高校	谷口 文子	金沢市立工業高校	酒井佳津代	水島工業高校	片山 真

第 6 回（昭和62年）

賞＼課題	課題 1		課題 2		課題 3	
金賞	関東第一高校	山崎 大助	関東第一高校	福島 正和	鶴見工業高校	星川 弘晃
銀賞	千葉経済高校	田中 啓之	豊橋工業高校	名倉 哲也	一宮工業高校	藤井 良宏
	大宮工業高校(埼玉)	遠藤 剛	高崎工業高校	大澤 敦	東京工業高校	平子 誠久
	郡山北工業高校	大竹 浩公	愛知工業高校	小柳 勝幸	市川工業高校	渡辺 綾乃
銅賞	田無工業高校	甘利 勇	豊橋工業高校	鈴木 智也	津工業高校	田口 幸広
	安田学園高校	湯澤 隆至	高崎工業高校	金田 珠子	鶴見工業高校	田口 直樹
	千葉経済高校	高品 浩美	田無工業高校	真保 実	前橋工業高校	浅野 宇征
	田無工業高校	篠原 昇	一宮工業高校	園部 達也	北富士工業高校	勝俣 護
	飯田長姫高校	仲田 光利	久慈工業高校	林檎 昭則	高山工業高校	中井 尚
	可児工業高校	大坪 直之	碧南工業高校	粂 網紀	大宮工業高校(埼玉)	田中 謙也
	大船渡工業高校	板坂 茂	田無工業高校	斉藤 直子		
	高山工業高校	遠藤 誠寛				

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
奨励賞	尼　崎工業高校	太田　明博	飯　田長姫高校	倉田　武志	前　橋工業高校	馬場　大
	前　橋工業高校	笠原　敏昭	龍　野実業高校	尾形　和稔	静　岡工業高校	福与　喜幸

第７回（昭和63年）

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
金　賞	大船渡工業高校	菊地　忠行	大船渡工業高校	板坂　茂	一　宮工業高校	園部　達也
銀　賞	豊　橋工業高校	村上　年生	豊　橋工業高校	小林　正寛	豊　橋工業高校	鈴木　智也
	半　田工業高校	新美　公克	名古屋市立工芸高校	田中　信一	豊　橋工業高校	名倉　哲也
	関　東第一高校	塩田　誠	半　田工業高校	中濱　裕貴		
銅　賞	修善寺工業高校	渡邊　龍二	高　崎工業高校	田村　信司	田　無工業高校	真保　実
	東　京工業高校	牧田　士郎	豊　橋工業高校	太田　徳政	一　宮工業高校	杉本　直樹
	郡山北工業高校	菅野　晃史	田　無工業高校	藤原　孝幸	甲　府工業高校	新田　佳子
	関　東第一高校	菅　英行	市　川工業高校	松本　宗隆	愛　知工業高校	大野　公人
	高　崎工業高校	金井　俊江	今　市工業高校	植田　孝	高　山工業高校	花岡　公作
	豊　橋工業高校	小泉　雅人	津　　工業高校	木村　行博	米　沢工業高校	泉野目和明
	千　葉経済高校	山本　和由	関　東第一高校	山崎　大助	市　川工業高校	鈴木　賢三
	天　竜林業高校	大石　貴史				
奨励賞	島　田工業高校	小原　健	前　橋工業高校	南沢　未来夫	徳　島工業高校	佐川　正師
	神奈川工業高校	加藤　一策	今　宮工業高校	松岡　豊明	前　橋工業高校	高山　亨

第８回（平成元年）

賞＼課題	課　題　1		課　題　2		課　題　3	
金　賞	一　宮工業高校	成田　聖栄	龍　野実業高校	岡島　綾一	市　川工業高校	松本　宗隆
銀　賞	半　田工業高校	大曽根正幸	鶴　見工業高校	国分　直樹	市　川工業高校	前堀　勝紀
	高　崎工業高校	茂木　秀幸	田　無工業高校	金子　浩之	大船渡工業高校	板坂　茂
	東　京工業高校	上林　久夫	川　越工業高校	利根川正春	岐　南工業高校	藤田　享弘
銅　賞	高　崎工業高校	鈴木　広志	一　宮工業高校	行岡　伸治	半　田工業高校	中濱　裕貴
	千　葉経済高校	山本　由恵	宇都宮工業高校	校桧山剣一	水　島工業高校	文屋　和弘
	豊　橋工業高校	北川　章夫	一　宮工業高校	鹿取　竜也	関　東第一高校	石野　仁
	豊　橋工業高校	岡野　光浩	高　崎工業高校	飯島　美穂	豊　橋工業高校	佐久間隆宏
	羽　咋工業高校	上牧　久展	高　山工業高校	笠木　治	峡　南　高校	宮下智恵美
	久　慈工業高校	野田　信吾	鶴　見工業高校	本多ひろみ	高　山工業高校	中川　暢
	高　山工業高校	堀　規靖	田　無工業高校	林　浩太郎	峡　南　高校	岩崎　位仁
	大　宮工業高校(埼玉)	三尾　慶美	高　山工業高校	谷口　善次		
			津　　工業高校	園部　敏弘		
奨励賞	宮　島工業高校	宮下　賢治	前　橋工業高校	笠原　敏昭	愛　知工業高校(２年)	岡部　貴明
	前　橋工業高校	関口ゆみ子	甲　府工業高校	伊藤　公江		
	小石川工業高校	榊原　敏幸				
	西野田工業高校	土井　秀宰				

課題別講評（第8回　平成元年度）

1　規定違反

課題1　軒先マワリ詳細図	●文字をワープロ，型板を基にしてなぞって書いてある作品が多い。 ●あきらかにトレースと判明する作品がある。 ●小屋バリを塗りつぶしている作品がある。
課題2　木造平家建専用住宅	●屋根伏せ図でない表現。 ●切断位置の間違い。 ●型板の使用。 ●敷地の広さの間違い。
課題3　木造2階建専用住宅	●過去の図面を参考にするのは良いが，図面の一部をトレースしている作品がある。

2　記入もれ

課題1　軒先マワリ詳細図	●広コマイの出の寸法（24） ●枠の線（テープ，ミシン掛けの用紙を用いた場合も記入する。） ●羽子板ボルト穴の欠き込みの線。
課題2　木造平家建専用住宅	●切断位置。 ●家事室のタタミの線。 ●縁側の天井高。 ●配置図壁芯。 ●寸法線の点，矢印。 ●室名。
課題3　木造2階建専用住宅	●切断位置。 ●柱。 ●組立基準線。 ●室名。 ●寸法線。 ●通り芯。

3　未　　熟

課題1　詳細図　軒先マワリ	●部材が寸法どおりでない。 ●全体的に線と文字がぼけている。 ●線の太さ。（断面線と仕上線の区別・軒ドイの線が太すぎる・断面線が極端に太い。） ●寸法が不正確。（広コマイの出・野縁・鼻隠し。） ●引き出し線の黒丸の位置の間違い。角度が45°でない。 ●羽子板ボルトのボルト位置に○印をつけている。（昨年は○印をつけている作品が金賞であったが，教科書を基に書くこと。）
課題2　専用住宅　木造平家建	●線・文字の太さ・大きさ。 ●カワラ棒の間隔・太さ。 ●壁の厚さ。 ●縁側と寝室の床の段差。 ●断面図と立面図の棟の高さが不一致。 ●寸法線の黒丸が大きすぎる。抜けている。 ●組立基準線の角度が45°でない。 ●建物の配置の位置。 ●造園計画の不足。
課題3　専用住宅　木造2階建	●全体的な図面表現。（線の使い方・文字・庭の表現。） ●寸法のおさえ。 ●動線計画のまずさ。 ●駐車スペースの位置。 ●空間的なおもしろさ。 ●屋根・軒の出の立面図不一致。 ●設計趣旨とプランニング不一致。

4　総　　評

課題1　詳細図　軒先マワリ	●昨年より応募数が増え，レベルアップした作品が多かった。 ●反面，全体的に力強さが感じられないものもあった。 ●入選した作品は，甲乙つけがたく，1つのミスが上下を決定するので注意してもらいたい。 ●また，今年度はワープロ・型板を基になぞったり，あきらかにコピーであと判明する作品が目につくのは残念である。
課題2　専用住宅　木造平家建	●線，文字をしっかりと書いてある作品がなく，造園計画・表現が良くなかった。 ●どの図面にも必ず欠点があり，入賞作品にも細部の記入もれや間違いがあった。 ●縮尺，組み立て基準線，切断線の書き方が教科書と一致していないのが多く，もう一度注意して確認してもらいたい。
課題3　専用住宅　木造2階建	●計画は良いが，構造的に建築不可能（1階の上に2階がのらない様な柱，壁がある）なもの，階段廻り（高さ・段数）がおかしい作品が目だった。 ●老人室の扱い方，他の部屋との関連性が問題となる作品が多い。 ●決定的な作品がなく，欠点が少ない図面，意匠的に良い，図面表現が良いことを基準として選考された。

審査報告および審査講評

下記のものは，第８回（平成元年度）のものであります。提出作品の用紙は，トレペであるため,模写（コピー）でなく，複写（トレース）と思われる作品がごく少数ではありますが，あるように思います。また，ワープロによる文字をトレースしたと思われるものも，ごく少数ありました。これらは，原図（トレペ）を重ねると，作図線の省略位置や，引き出し線・書き入れ文字や数字の位置が全く同一のものあります。

以上は毎年同一の課題による，マイナス点かも知れません。しかし，同一の課題であるため，回数を追うに従って，密度の高い良い作品が多数あります。ご指導くださる先生方に頭がさがる思いです。

第８回製図コンクールには東日本建築教育研究会に加盟校および加盟校以外の先生方から校務ご多忙のところ絶大なるご協力を頂き，別紙のような多数の作品を提出して頂きました事を厚くお礼申し上げます。

審査は課題ごとにチェックポイントを定め，減点方式により複写図の表題欄をカットして，厳正かつ公平に実施しました。

課題１は，参考図を製図の基本（線の太さの区別・文字の大きさなど）に従って，忠実に摸写するものであり，ワープロによる文字や型板による数字を複写した作品があり入賞作品から除外しました。

課題２は，参考図を摸写する部分（平面・立面図）と，設計要素と表現力を必要とする部分（配置図・屋根伏せ図・断面図）の内容であり，断面図の表示内容と造園計画（表現力）が，入賞のポイントになりました。

課題３は，設計製図であり，配置・平面・意匠・構造計画および，製図力・表現力など，トータルなもので審査され，入賞作品は図面表現が良いものが優先されました。

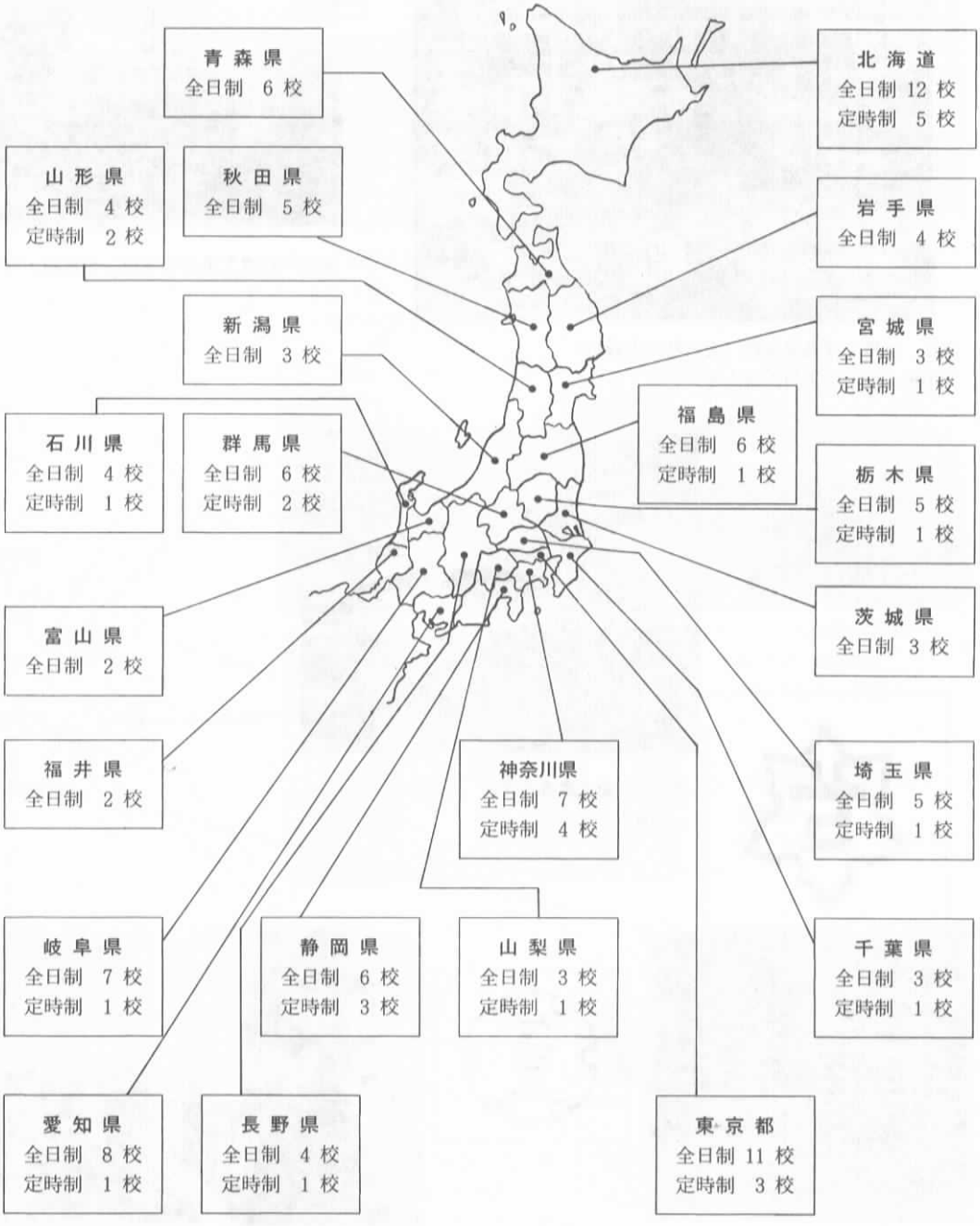
各課題ごとの詳細な講評は，別紙の通りです。入賞作品のなかにも減点方式であるため，多少の記入もれや未熟なミスのあるものもあり，今後とも生徒への適切なご指導をお願い申し上げます。

あ と が き

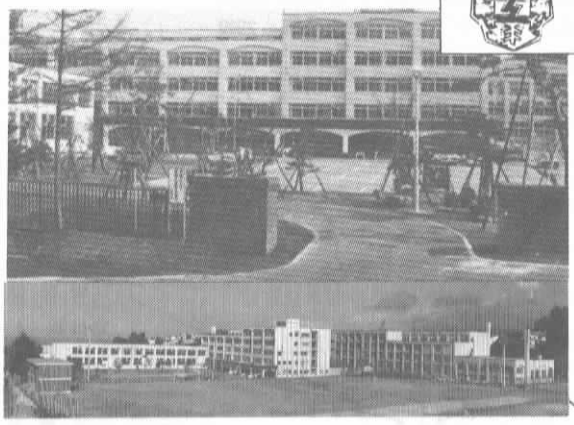
「製図コンクール」は，建築科に入学した全生徒に「設計製図」を通じて「建築」への意欲を高めようとするものであるが，「入賞者」に対して，生徒の卒業後の進路（大学進学，あるいは就職）に，または，資格取得の際に何か有利な恩典が認められる道がひらけないものでしょうか。

会員校紹介

都道県別・会員校数　　全日制 119校
定時制　29校

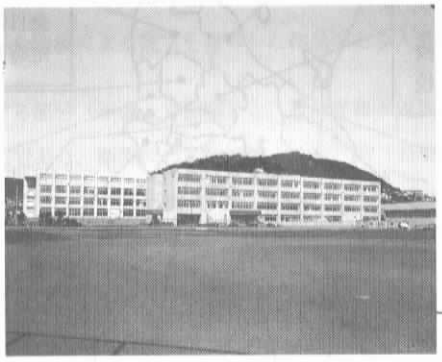


北　海　道



道立　小樽工業高等学校（全日制・定時制）
小樽市最上１丁目29番１号

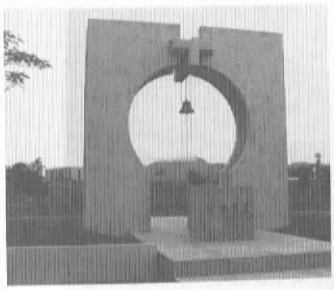
道立　札幌工業高等学校（全日制・定時制）



道立　室蘭工業高等学校（全日制）
室蘭市宮の森町３-１-１

道立　函館工業高等学校
（全日制・定時制）
函館市川原町５-13

道立　苫小牧工業高等学校（全日制・定時制）
苫小牧市字高丘６番22号



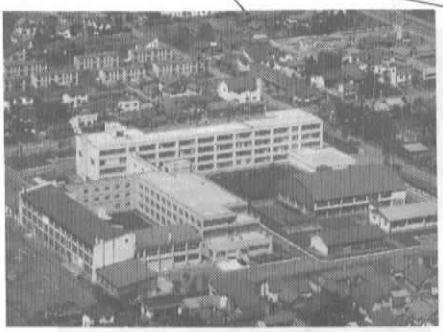
札幌市北区北20条西13丁目

道立　名寄工業高等学校
（全日制）
名寄市西５条北５丁目

道立　留萌工業高等学校
（全日制）
留萌市千鳥町４丁目

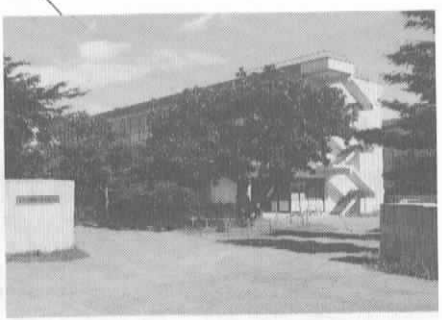
道立　旭川工業高等学校
（全日制・定時制）
旭川市西神楽３線５号

立正学園旭川実業高等学校
（全日制）
旭川市末広８条１



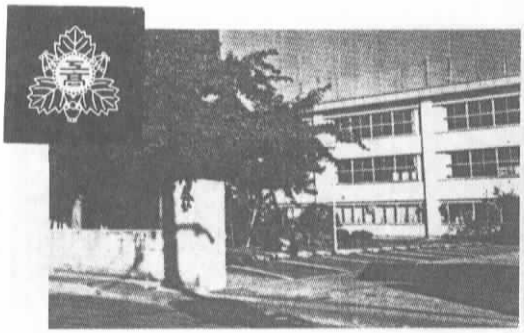
道立　美唄工業高等学校（全日制）
美唄市西２条北４丁目

道立　帯広工業高等
学校（全日制）
帯広市南町南８線
西24－１



道立　釧路工業高等学校（全日制）
釧路市鶴ケ岱３－５－１

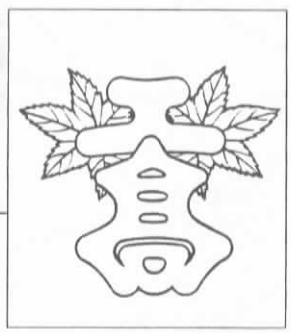
青　森　県



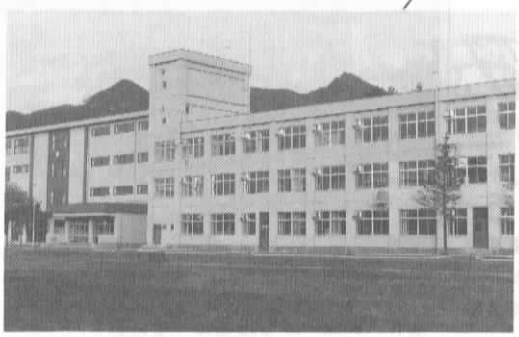
県立　青森工業高等学校（全日制）
青森市篠田３-16-1

光星学園野辺地工業高等学校（全日制）
上北郡野辺地町字枇杷野３-22-７

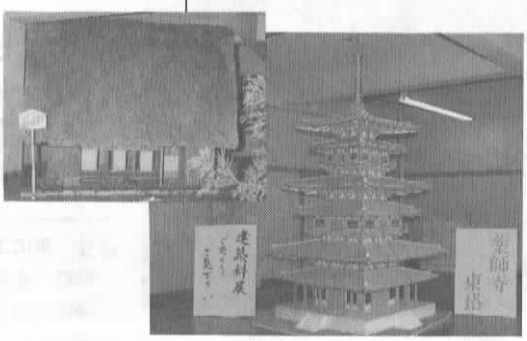
県立弘前工業高等学校
（全日制）
弘前市馬屋町６-２



県立　十和田工業高等学校
（全日制）
十和田市大字三本木字下
平215-１



県立　南部工業高等学校（全日制）
三戸郡南部町大字大向字佐野平25



八戸工業大学第一高等学校（全日制）
八戸市白銀町字右岩淵通７-10

岩　手　県

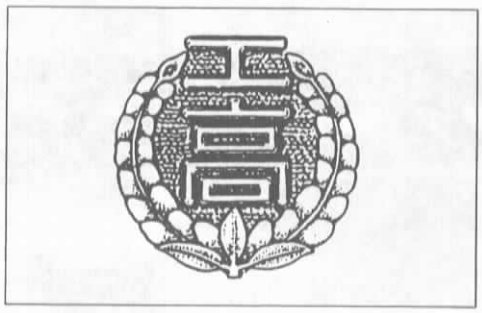
県立　盛岡工業高等学校（全日制）
紫波郡都南村大字羽場第18地割松崎

県立　久慈工業高等学校
（全日制）
九戸郡野田村大字野田
26-62-17

専修大学北上高等学校（全日制）
北上市新穀町 2-4-64

県立　大船渡工業高等学校（全日制）
大船渡市立根町冷清水 1-1

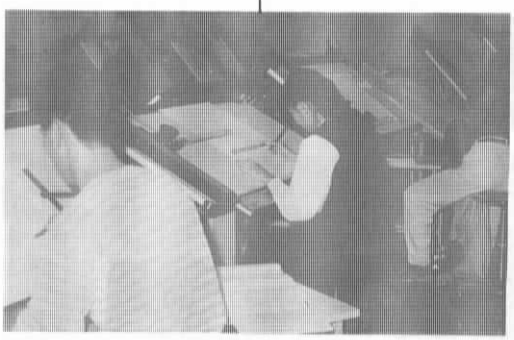
宮　城　県



県立　白石工業高等学校（全日制）
白石市郡山字鹿野43

県立　古川工業高等学校（全日制）
古川市北町４-７-１

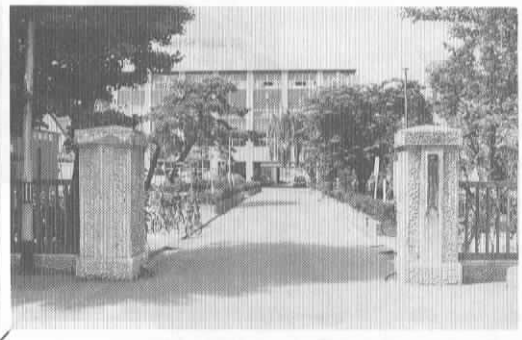
市立　仙台工業高等学校（全日制）
仙台市東宮城野３-１



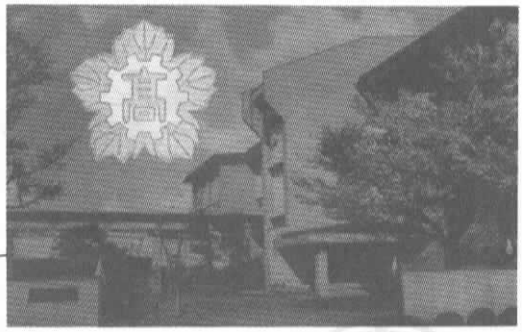
市立　仙台第二工業高等学校（定時制）
仙台市東宮城野３-１

秋　田　県

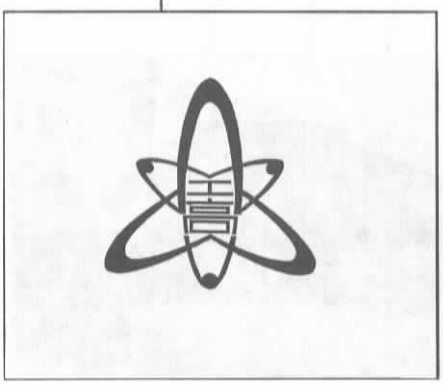
県立　能代工業高等学校（全日制）
能代市磐若町３番１号



県立　秋田工業高等学校（全日制）
秋田市保戸野金砂町３番１号



県立　大曲工業高等学校（全日制）
大曲市若葉町３番17号



県立　由利工業高等学校（全日制）
本荘市石脇字田尻30番地

県立　横手工業高等学校（全日制）
横手市前郷二番地10番１号

山　形　県

県立　鶴岡工業高等学校（全日制・定時制）
鶴岡市家中新町８番１号

山形電波工業高等学校（全日制）
天童市清池藤ケ丘556

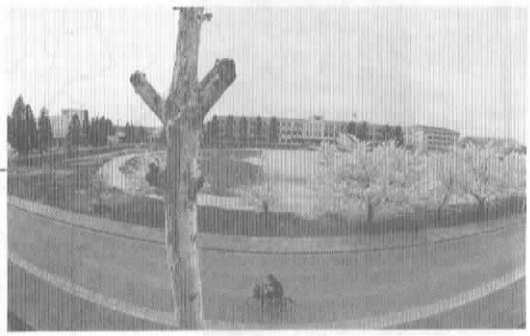
県立　米沢工業高等学校（全日制・定時制）
米沢市丸の内１-２-68

県立　山形工業高等学校（全日制）
山形市緑町１-５-12

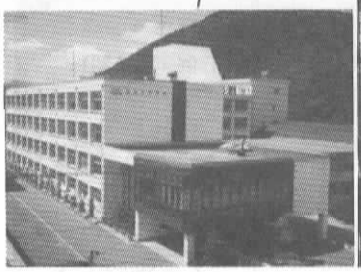
福　島　県

県立　会津工業高等学校（全日制）
会津若松市徒ノ町１番37号

県立　福島工業高等学校（全日制・定時制）
福島市森合字小松原１



日本大学東北高等学校（全日制）
郡山市村町徳定字中河原１

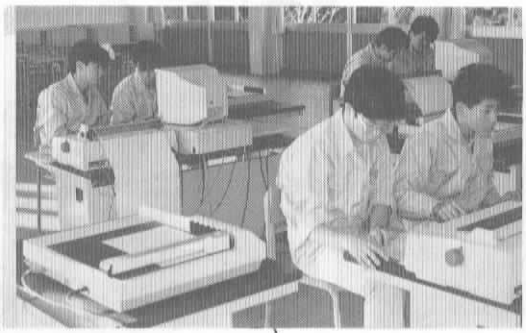


福島高等学校（全日制）
福島市御山町９-13

県立　郡山北工業高等学校
（全日制）
郡山市富久山町八山田字大林１

県立　勿来工業高等学校
（全日制）
いわき市植田町堂の作10

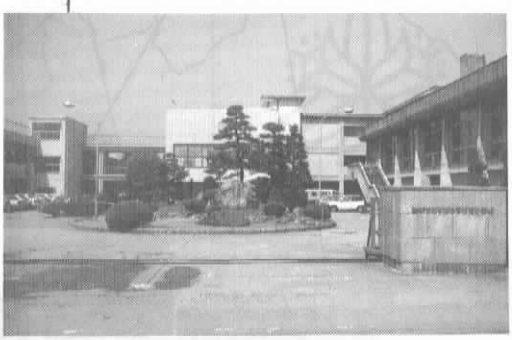
栃　木　県



県立　今市工業高等学校（全日制）
今市市荊沢615

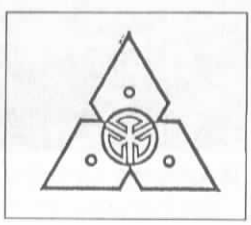
足利工業大学附属高等学校
（全日制）
足利市福富町2142

県立　真岡工業高等学校
（全日制）
真岡市熊倉町4562

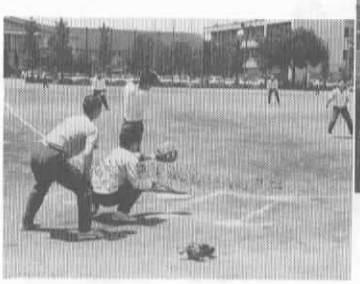


県立　宇都宮工業高等学校（全日制・定時制）
宇都宮市京町 9-25

足利学園高等学校（全日制）
足利市伊勢崎南町 3-2



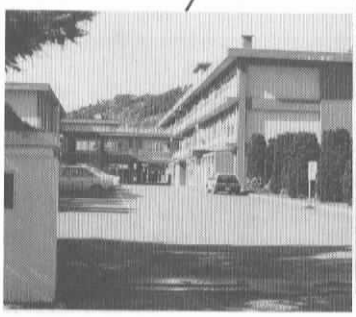
群　馬　県



県立　藤岡工業高等学校
（全日制）
藤岡市下戸塚47-2

県立　高崎工業高等学校
（全日制・定時制）
高崎市江木町700

県立　前橋工業高等学校
（全日制・定時制）
前橋市岩神町2-23-22

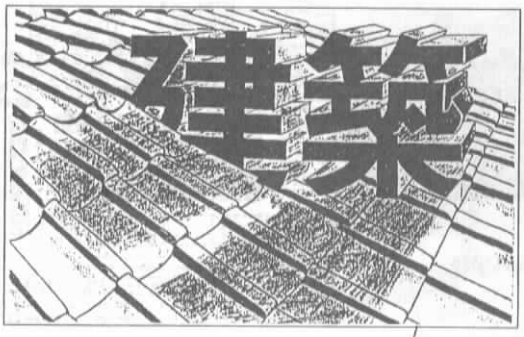


県立　長野原高等学校
（全日制）
吾妻郡長野原町与喜屋21-1

県立　桐生工業高等学校
（全日制）
桐生市西久方町1-1-41

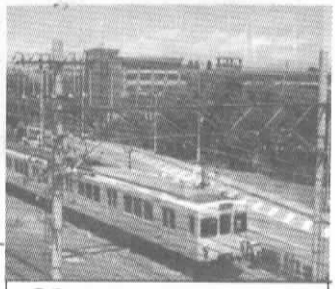
県立　館林商工高等学校
（全日制）
邑楽郡明和村大字南大島660

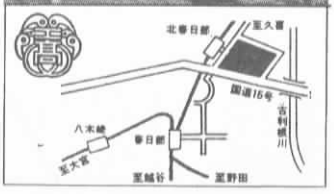
埼　玉　県



県立　熊谷工業高等学校（全日制）
熊谷市小島820

県立　川越工業高等学校（全日制）
川越市小仙波町2-28-1





県立　春日部工業高等学校
（全日制）
春日部市梅田500

越生高等学校（全日制）
入間郡越生町上野167

県立　大宮工業高等学校（全日制・定時制）
大宮市本郷町1970

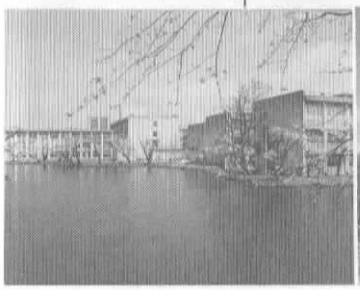
茨　城　県

県立　土浦工業高等学校
（全日制）
土浦市真鍋 6-11-20

県立　水戸工業高等学校
（全日制）
水戸市元吉田町1101

県立　大宮工業高等学校
（金日制）
那珂郡大宮町大字下田村

新　潟　県



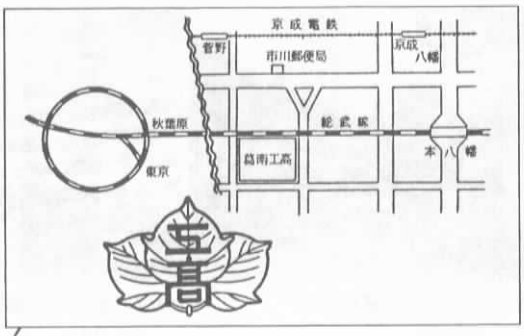
県立　高田工業高等学校
（全日制）
上越市本城町 3-1

県立　新潟工業高等学校
（全日制）
新潟市小新字白鳥1080-1

県立　新発田南高等学校
（全日制）
新発田市大栄町3-6-6

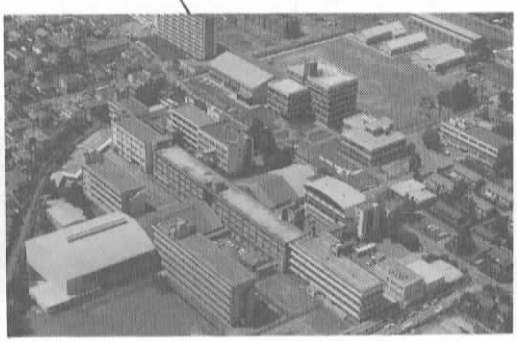
千　葉　県

県立　市川工業高等学校（全日制）
市川市平田３-10-10



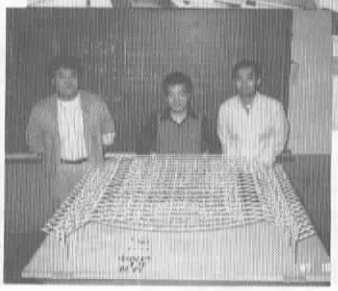
県立　葛南工業高等学校（定時制）
市川市平田３-10-10

千葉工商高等学校（全日制）
千葉市穴川１-５-21

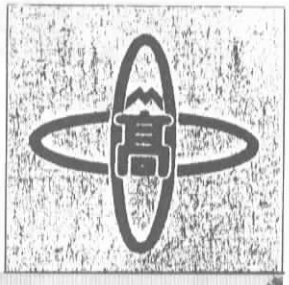


千葉経済高等学校（全日制）
千葉市轟町４-３-30

山　梨　県



県立　甲府工業高等学校（全日制・定時制）
甲府市塩部１-２-１



県立　峡南高等学校（全日制）
西八代郡下部町三沢2417

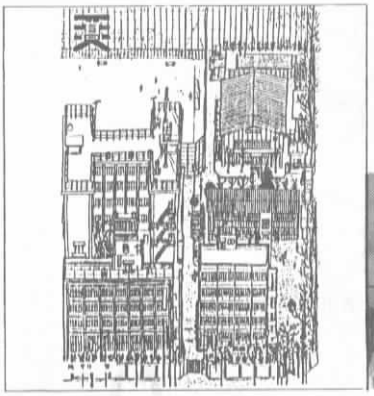
県立　北富士工業高等学校（全日制）
富士吉田市新西原1-23-1

東　京　都

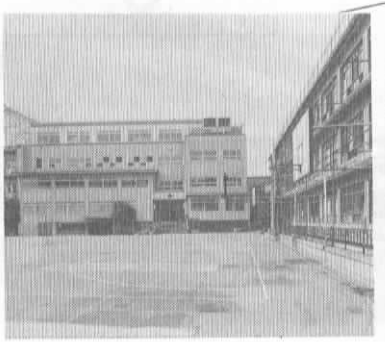
工学院大学高等学校（全日制）
八王子市中野町2647-2

昭和第一学園高等学校（全日制）
立川市栄町 2-45-8

都立　田無工業高等学校（全日制）
田無市向台町 1-9-1

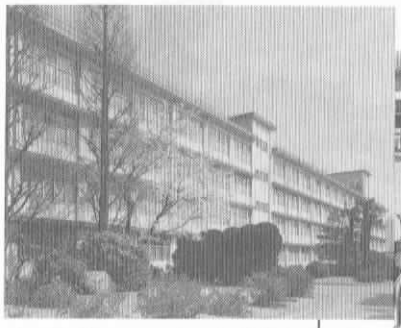


国立　東工大附属工業高等学校（全日制）
港区芝浦 3-3-6



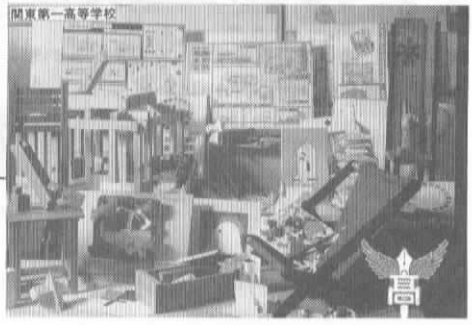
日本工業大学附属
東京工業高等学校（全日制）
目黒区駒場 1-35-32

都立　蔵前工業高等学校（全日制・定時制）
台東区蔵前 1-3-57



都立　小石川工業高等学校
（全日制・定時制）
新宿区富久町22-1

安田学園高等学校（全日制）
墨田区横網 2-2-25



関東第一高等学校（全日制）
江戸川区松島 2-10-11

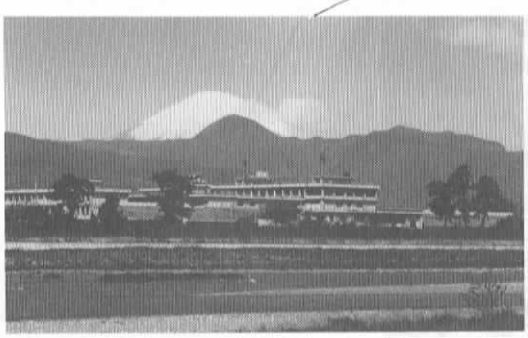
都立　墨田工業高等学校（全日制・定時制）
江東区森下 5 - 1 - 7

都立　葛西工業高等学校（全日制）
江戸川区春江町 4-9

神奈川県

横浜市立　鶴見工業高等学校（全日制・定時制）
横浜市鶴見区下野谷町 4-146

県立　向の岡工業高等学校（全日制・定時制）



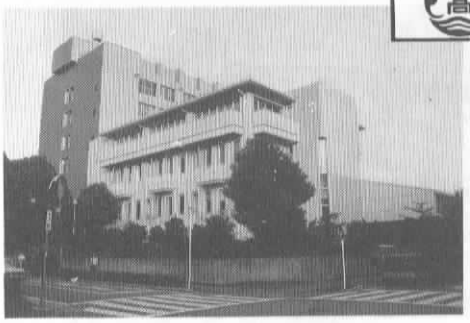
県立　小田原城北工業高等学校（全日制）
小田原市柏山200

県立　藤沢工業高等学校（全日制）
藤沢市今田744

川崎市多摩区堰1-28-1

川崎市立　工業高等学校（全日制）
川崎市幸区小向仲野町5-1

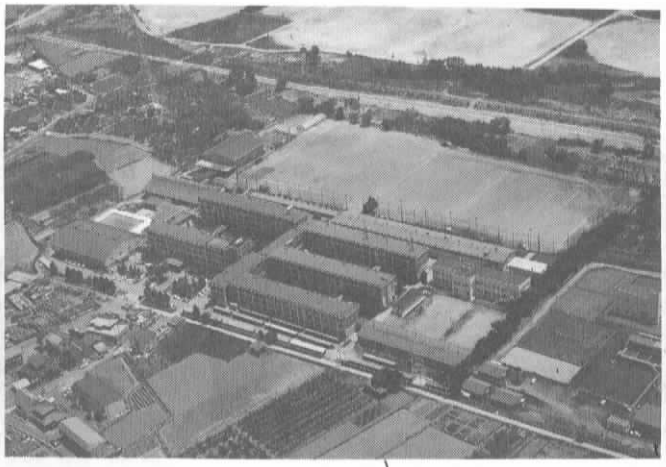
県立　神奈川工業高等学校
（全日制・定時制）
横浜市神奈川区平川町19



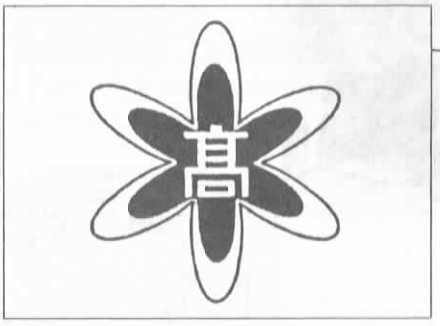
横浜市立　横浜工業高等学校（定時制）
横浜市中区翁町2-9-10

横須賀市立　工業高等学校（全日制）
横須賀市久里浜6-8-1

長　野　県

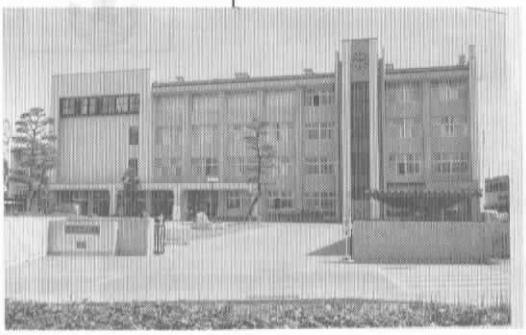


県立　長野工業高等学校
（全日制・定時制）
長野市大字安茂里字狐島7473



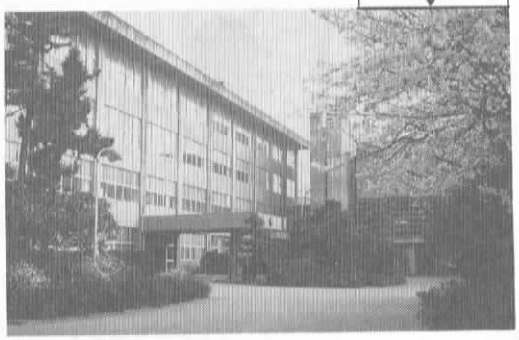
県立　池田工業高等学校（全日制）
北安曇郡池田町大字池田2524

県立　上田千曲高等学校（全日制）
上田市大字中之条626



県立　飯田長姫高等学校（全日制）
飯田市鼎名古熊2535-2

富　山　県



県立　高岡工芸高等学校（全日制）
高岡市中川1-1-20

県立　富山工業高等学校（全日制）
富山市五福2238

福　井　県

県立　武生工業高等学校（全日制）
武生市文京1-14-16

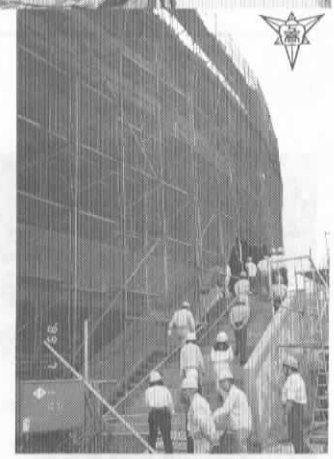
福井工大附属福井高等学校（全日制）
福井市学園3-6-1

石　川　県

県立　羽咋工業高等学校（全日制）
羽咋市西釜通屋町7-21

県立　珠洲実業高等学校（全日制）
珠洲市宝広町鵜飼6-20

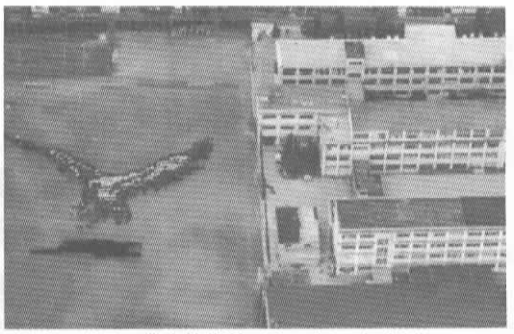
県立　小松工業高等学校（全日制）
小松市打越町丙67



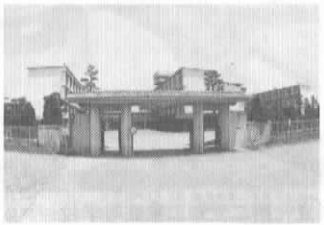
金沢市立　工業高等学校
（全日制・定時制）
金沢市畝田東1-1-1

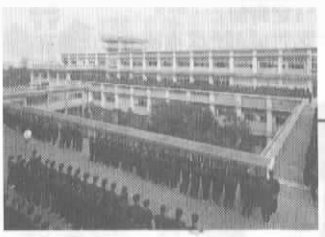
静　岡　県

県立　天竜林業高等学校（全日制）
天竜市二俣町二俣601



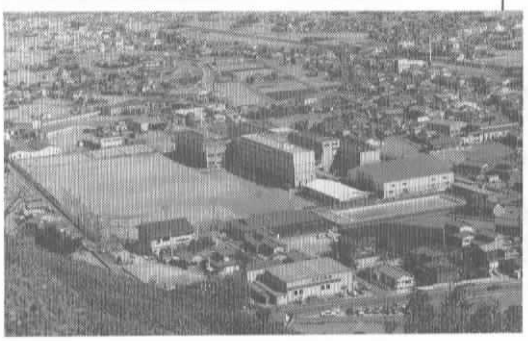
県立　静岡工業高等学校（全日制・定時制）
静岡市太田町24





県立　浜松工業高等学校
（全日制・定時制）
浜松市初生町1150

県立　沼津工業高等学校
（全日制・定時制）
沼津市下香貫八重129-1



県立　島田工業高等学校（全日制）
島田市阿知ケ谷201

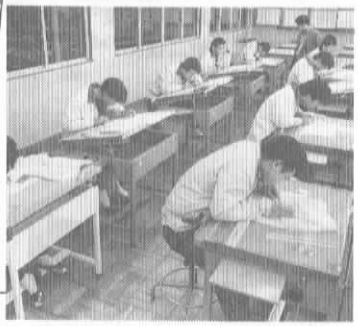
県立　修善寺工業高等学校（全日制）
田方郡修善寺町牧之郷892

愛　知　県

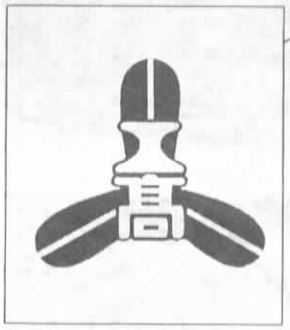
県立　佐織工業高等学校
（全日制）
海部郡佐織町大字渕高新田
字陰島１

名古屋市立　工芸高等学校
（全日制）
名古屋市東区芳野２-７-51

県立　愛知工業高等学校（全日制）
名古屋市北区福徳町字広瀬島
350-4

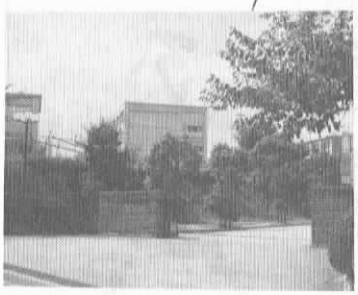


県立　第二愛知工業高等学校
（定時制）
名古屋市北区福徳町字広瀬島
350-4

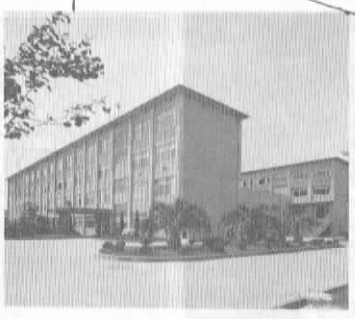


県立　一の宮工業高等学校
（全日制）
一宮市千秋町佐野字辻田
2112

名古屋工業高等学校
（全日制）
名古屋市昭和区
円上町22-38



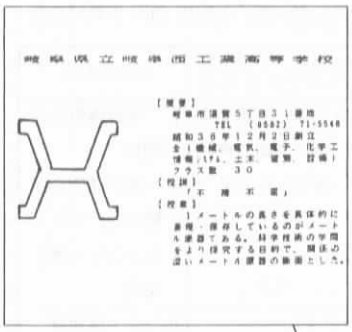
県立　半田工業高等学校
（全日制）
半田市柊町３-１



県立　碧南工業高等学校
（全日制）
碧南市丸山町３-10

県立　豊橋工業高等学校
（全日制）
豊橋市草間町

岐　阜　県



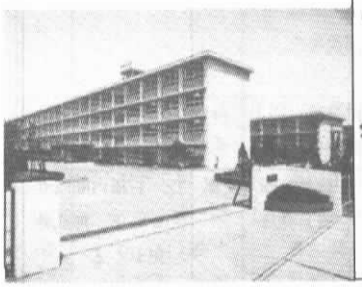
県立　岐阜西工業高等学校
（全日制）
岐阜市須賀5-31

県立　高山工業高等学校
（全日制）
高山市千島町291

県立　可児工業高等学校
（全日制）
可児市中恵土2358

県立　大垣工業高等学校
（全日制）
大垣市南若森町301-1

県立　中津川工業高等学校
（全日制）
中津川市千旦林1521



県立　岐南工業高等学校（全日制・定時制）
岐阜市本荘3456-19

関市立　関商工高等学校
（全日制）
関市倉知4909-45

東日本建築教育研究会のあゆみ

＊ (理)：理事長名，(会)：会長名，(事)：事務局長名

年	会長および事務局＊	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和26年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	11. 6−7 本会設立総会（東京・若葉荘にて）「関東地区建築教育研究会」と称す。 ○「建築計画」（文部省）の教科書委員の決定。主として浅野・岸田・山田先生が執筆。	○文部省「建築計画・設備」教科書発行を計画	7. 朝鮮休戦会談開始 9. 太平洋安全保障条約，サンフランシスコ講和条約
昭和27年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 教科書対策委員会（市立川崎工高にて） 5. 16−17 総会・研究協議会（県立沼津工高にて）「教科書，視覚教育の問題について」 ○産振設備基準についての意見聴取（参加 約30名，宿泊 熱海荘）		10. 23 十勝地震（M8. 3）
昭和28年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 産振設備基準修正調査 2. 14−15 関東・関西・東海地区建築課程研究協議会（県立沼津工高にて，参加 約50名）「産振設備基準」 5. 教科書対策委員会（都立蔵前工高にて） 6. 25−26 総会研究協議会（県立高崎工高にて）「視覚教育・教科書編集の問題について」（参加 約40名）（宿泊，水上奥利根温泉） 7. 教科書対策委員会（実教にて）会誌発行 9. 13−14 研究会・都内見学会（若葉荘，参加者 約60名）「東日本建築教育研究会」に改称 6. 26 近畿連盟と合同の教科書委員会 7. 27 開催（執筆分担決定，実教出版にて）		8. 18 「高等学校の定時制教育および通信制教育振興法」公布 10. 31 「学校教育施行令」公布
昭和29年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 6 見学会：東京都体育館（斎藤謙次先生説明），講演会：「リミットデザインについて」小野薫先生（若葉荘にて） 6. 11−12 総会・研究協議会（県立長野工高にて，宿泊，わたり温泉） 6. 会誌発行 10. 15 見学会：鉄道会館（八重洲口駅舎）東京都庁舎，講演会：「桂離宮について」(藤岡通夫先生)，「構造」後藤一雄先生（東工大付工高にて）	構造力学(実教)発行	12. 鳩山内閣成立朝鮮復興特需で不況克服
昭和30年	(理)(蔵前工高校長) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 森安 四郎	5. 19−20 総会・研究協議会・見学会：（県立宇都宮工高にて）（宿泊，鬼怒川温泉） 10. 会誌発行 10. 1 伏見理事長，墨田工高校長となる。事務局，都立墨田工高，宇都宮先生	建築計画（文部省）発行	12. 石橋内閣成立この年，神武景気おこる

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和30年	(事) 墨田工高 宇都宮 新	10.18 見学会：NHKテレビホール見学，講演会（蔵前工高にて）：「海外の建築」狩野春一先生 11. 演習書編集委員会 構造力学演習書（昭晃堂）発行		
昭和31年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6.7–8 総会・研究協議会「実習に関する研究発表」（県立高田工高にて）（参加 約60名）（宿泊，妙高ホテル） 7. 第1回標準テスト（建築材料，構造力学）実施 7.8.9 演習書編集委員会 11.17 見学会：羽田空港ビル 会誌発行 建築法規学習書（昭晃堂）発行	11.10 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築課程編発行	この年高天原景気
昭和32年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6.9–10 総会（東京・若葉荘にて） 見学会：リーダース・ダイジェスト社，法政大学，東京駅 9. 研究発表会「計画実験」（県立弘前工高にて）文部省研究指定校としての研究発表を兼ねて行なわれた。この会にて「学習指導の手引き」建築科編発表 第2回標準テスト 構造計算（実教）発行	11.11 中央教育審議会「科学技術教育の振興方策について」答申	10. ソ連人工衛星打上げ成功 株式暴落，鍋底景気に落ち込む
昭和33年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 総会（県立甲府工高にて） 11. 研究授業「構造力学」 宇都宮先生（墨田工高にて）	7.28 中央教育審議会「教員養成制度の改善方策について」答申 11.15 第2回標準テスト	9.26 狩野川台風 12. 東京タワー完成
昭和34年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 総会（県立川越工高，宿泊，飯能） 11. 研究授業「造形」中村先生，「構造」山田先生（東工大付工高にて） 講演会：「海外の建築について」（加藤六美先生）	12. 産振設備基準改訂協議会（近畿と合同）	1. メートル法実施 この年岩戸景気
昭和35年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6.5–6 総会（県立神奈川工高にて，宿泊，湯本） 9. 研究会（都立小石川工高にて，都研究指定校，視聴覚教育研究発表を兼ねて）， 講演会：「ライトの研究」山本学治先生 建築工事積算演習書・建築法規演習書（昭晃堂），建築製図上・下（実教）発行	3.31 教育課程審議会「高等学校教育課程の改善について」答申 10.15 「高等学校学習指導要領」を告示	1. 日米新安保条約調印
昭和36年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 静岡工高 関 淳一郎 小石川工高 岡登 五郎	3.31 伏見理事長教職勇退 6.5–6 総会（県立静岡工高にて，宿泊，三保），理事長中江先生（参加40校，70名） 12.1–2 講習会「計画実験」（東工大にて勝田研究室，参加44校，70名） 見学：日比谷三井ビルの設備，日本生命ビルの特殊潜函工法とハイテンションボルト工法	8.30 「高等専門学校設置基準」の制定	4. ソ連人間衛星に成功

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和37年	(理) 静岡工高校長 中江　斉 (事) 静岡工高 関　淳一郎 小石川工高 岡登　五郎	6. 1-2　総会（県立郡山工高にて，宿泊，岩代熱海） 11. 講習会「構造実験」建設省建築研究所にて，出席約70名 建築構造1. 2（実教）発行	3. 31「技能教育施設の指定等に関する規則」制定	9.　若戸大橋開通
昭和38年	(理) 静岡工高校長 中江　斉 (事) 静岡工高 関　淳一郎 小石川工高 岡登　五郎	5. 30　総合・研究協議会・研究発表 6. 1（県立水戸工高にて，宿泊，大洗） 参加59校，81名 見学：東海村原子力研究所 8. 17　近畿工高連盟と連絡会開催（県立静岡工高にて） 11. 講習会「音響実験」東大生産技術研究所 ＮＨＫ技術研究所（東大石井先生），参加 約70名	10. 19 中央産業教育審議会「高等学校における産業教育実験・実習施設，設備の基準の改善について」答申	1.　北陸地方豪雪
昭和39年	(理) 静岡工高校長 中江　斉 (事) 静岡工高 関　淳一郎 小石川工高 岡登　五郎	5. 23-24　総会　研究協議会（県立市川工高にて，宿泊木更津）参加64校，102人 10. 20-21　講習会：「設備実験」（虎の門共済会館にて，早大，井上先生） 参加58校，67人 見学：代々木オリンピック競技場，虎ノ門病院	「学習指導要領の手引」(建築科編)発行	6. 16　新潟地震（M7. 5）
昭和40年	(理) 静岡工高校長 中江　斉 (事) 小石川工高 岡登　五郎	6. 5-6　総会　研究協議会（県立新潟工高にて，宿泊，とやの観光ホテル，参加70校，109人） 11. 30 講習会：「防水工事」「TILT-UP工法」 12. 1　千葉大，波多野先生，日本住宅公団関係技師 見学：田島応用化工，作草部団地（西千葉） 参加36校，62名	4. 30「産業教育振興法施行規則」の一部改正，施設　設備基準の改訂 11. 10 産業教育80年記念式典挙行	3.　三井霞が関ビル起工式
昭和41年	(理) 向の岡工高校長 富塚　信司 (事) 小石川工高 岡登　五郎	6. 11-12　総会・研究協議会　研究発表（県立古川工高にて，宿泊，鳴子温泉，参加60校，95人） 11. 25-26　講習会：「超高層建築」（鹿島建設技術研究所にて）三井不動産，山下寿郎事務所，鹿島建設技術研究所（出席80名） 見学：鹿島建設技術研究所内，三井霞が関ビル，参加59校，95人	10. 31 中央教育審議会「後期中等教育の拡充整備について」最終答申	8.　中国文化大革命 9. 24-25 台風，24，25号
昭和42年	(理) 向の岡工高校長 富塚　信司 (事) 田無工高 森安　四郎	6. 2-3　総会　研究協議会（県立前橋工高にて，宿泊，伊香保温泉，参加者117名） 「建築教育の問題と改善の方向について」 11. 24-25　講習会：「基礎構造・土質実験について」（建設省建築研究所にて），岸田英明先生外，第3，第4研究部員，見学：建築研究所，パレスサイドビル，「総合事務所建築の計画，施工について」日建，林昌二先生外，設計部員 建築設備，建築史，建築計画（実教） 建築設備演習，建築構造演習（昭晃堂）発行 2. 25　高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科編発行	8. 1 理科教育産業教育審議会「高等学校における職業教育の多様化について」答申	

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和43年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	6.7–8 総会・研究協議会（県立宇都宮工高にて，宿泊那須温泉） 「建築科の多様化について」中江先生 11.21–22 講習会：「万博の施設について」(蔵前工業会館にて)，万博協会建設部次長林光夫先生 見学：国際貿易センター，日本鋼管，国立博物館（東洋館），参加100名 新構造力学演習（昭晃堂）発行 3.1 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編上発行	4.12 文部大臣から教育課程審議会あて「高等学校教育課程の改善について」諮問 7.13 工業教育会館地鎮祭	4.3 三井霞が関ビル竣工 5.16 十勝沖地震（M7.9） 8. ソ連・東欧軍チエコ侵入
昭和44年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	6.6–7 総会・研究協議会（埼玉県秩父，秩父鉄道有隣クラブにて），参加150名 「学習指導要領の改訂」総則編について，各分科会（製図・実習・計画・構造） 11.21–22 講習会：（工業教育会館にて） 「改正建築基準法について」水越義幸先生(建設省) 「学習指導要領総則編の改訂について」関口先生（文部省） 見学：東芝科学館，京王プラザ，旭ガラス，日本鋼管	建築測量(実教)発行 6.10 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編中・下（文部省）発行 3. 新工業教育会館完成	1.23 能研テスト廃止
昭和45年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	6.5–6 総会・研究協議会（県立山形工高にて），（宿泊，よねや旅館） 「学習指導要領の改訂」建築科編について，各分科会（製図・実習・計画・構造） 11.27–28 講習会：（工業教育会館にて） 「電子計算機の利用について」小倉正士先生 見学：東海ビル，京浜急行ホテル（建設現場） 東芝科学館，電子計算機の実演（日立，芝電商事）	造形(実教)発行 建築会社就職全科(昭晃堂)発行 5.6 「高等学校学習指導要領案」発表 10.15 告示（48年度実施） 10.24 中学卒業生の高校への進学率発表，全国平均82.1％（44年度79.4％） 11.5 中教審「初等・中等教育の改革に関する基本構想」答申	
昭和46年	(会) 鶴見工高長 長谷川光次 (事) 田無工高 森安 四郎	7.28 東日本建築教育研究会創立20周年記念式典（社会文化会館にて） 7.29–30 総会・研究協議会 理事長制を廃止，会長制度をとる会則変更	3.13 文部省，特殊小中学部の新学習指導要領を告示 5.28「国立及び公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」公布	5.6 京王プラザ営業開始

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和47年	(会) 鶴見工高校長 長谷川光次 (事) 田無工高 森安 四郎	6.2–3 総会・研究協議会（秋田県） 新学習指導要領による教育課程の編成 8.2–4 施工部会主催「施工実習の指導法」（横須賀市立工） 11.17–18 講習会：最近の鋼構造について(工業教育会館) 見学：成田空港（東京国際空港），検見川団地 建築実習（1，2）（実教出版）発行	7.3 教員養成審議会「教員養成の改善策について」建議 10.5 学制100年記念式典	
昭和48年	(会) 埼玉県立玉川工高校長 池田 寿男 (事) 田無工高 森安 四郎	6.1–2 総会・研究協議会（茨城県土浦市)「教育課程の編成と実施上の問題点」 見学：鹿島臨海工業団地 11.16–17 講習会：「製図指導上の問題点」 竹中工務店，仁木設計事務所 見学会：新宿副都市，その他 建築構造（実教出版）発行 建築計画（実教出版）発行	9.25「筑波大学法成立」 11.21 小・中・高一貫教育を図るための新教育課程審議会発足	石油ショック
昭和49年	(会) 埼玉県立玉川工高校長 池田 寿男 (事) 葛西工高 松本 延夫	6.7–8 総会・研究協議会（愛知県名古屋市） 「職業教育の改善に関する委員会審議の経過をめぐって」 見学：犬山城，明治村 8.7–9 施工部会主催「施工実習の指導法，実技教育」（於盛岡工高）	2.25「学校教育の水準の維時向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法」公布 5.27「教頭職法制化法」成立 12.9 三木内閣，永井道雄民間文相誕生	
昭和50年	(会) 埼玉県立玉川工高校長 池田 寿男 (事) 葛西工高 松本 延夫	6.6–7 総会・研究協議会（千葉県成田市） 「工業教育の改善，専門科目の最少限教育内容について」 見学：成田空港 8.21–22 計画部会主催（於小石川工高） 「計画実験・実習の指導法（日照，換気，音響，空調)」，ミサワホーム総合研究所見学 建築設計製図，建築施工，建築構造設計（実教）発行 プレハブ住宅（コンクリート編）16mm映画	4.28「短期大学設置基準」公布 7.15 文部省，小・中・高校の主任制の法制化発表	
昭和51年	(会) 葛西工高校長 遊佐 五郎 (事) 葛西工高 松本 延夫	5.28–29 総会・研究協議会（山梨県富士吉田市） 「基礎実習の実践と問題点」 8.23–24 構造部会主催（於田無工高） 「材料，構造実験・実習」「コンピューター講習会」 建築史（実教出版）発行	1.10「専修学校設置基準」公布 3.1 主任制度化施行 12.18 教育課程審議会「教育課程の基準の改善について」答申	

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和52年	(会) 葛西工高校長 高橋 豊次 (事) 葛西工高 松本 延夫	6.10–11 総会・研究協議会（東京九段会館） 「教育課程の改善について」 「産振法，設備基準の改訂による運用上の問題点」 6.20–21 製図部会（於東工大付工高） 「透視図のかき方，着色実技」 建築の基礎問題（市ケ谷出版）教材委員会発行， 建築資料集（実教出版）発行， 建築実習（1，2）改訂版（実教出版）発行	5.2 大学入試センターの発足 7.23 文部省，小・中学校新学習指導要領告示 9.22 文部省，全面改定の教科書検定規則，検定基準を公布	
昭和53年	(会) 葛西工高校長 堀 重雄 (事) 葛西工高 松本 延夫	6.10–11 総会・研究協議会（青森県青森市） 「学習指導要領の改訂について，建築科科目の統合」 8.18–19「教材の作成と視聴覚教材の指導法」（於東京工大）	6.17 中央教育審議会「教員の資質向上について」答申 10.1 教育大学（上越，兵庫）開学	
昭和54年	(会) 葛西工高校長 堀 重雄 (事) 葛西工高 松本 延夫	6.8–9 総会・研究協議会（栃木県鬼怒川） 「改訂学習指導要領の問題点」 8.20–21 施工部会主催（於横須賀市，三浦ドック社員寮）「安全教育について」	1.13 第1回共通第1次学力試験実施 4.1 養護学校の義務制実施	
昭和55年	(会) 足立工高校長 堀 重雄 (事) 東工大付工高 五十嵐永吉	7.29–30 総会・研究協議会（札幌市内ホテル東急イン） 「新教育課程と工業基礎・工業数理について」 記念講演会「北海道の建築」（北海道大学助教授 越野武先生） 研究視察：札幌市内外の建築物の見学 30周年記念誌発行	4.25 40人学級法案可決 11.25 文部省，校内暴力等の防止対策を通知	
昭和56年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	6.12–13 総会・研究協議会（長野市内長野ホテル） 「新教育課程と学習指導について（工業基礎・工業数理）」 8.20–21 講習会「照明の基礎・光源と照明設計」（於中央工学校田端校舎） 見学会：ＮＨＫホール，東京電力ＫＫ，大塚支社	6.11「放送大学学園法」公布，中央教育審議会「生涯教育について」答申	
昭和57年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	6.11–12 総会・研究協議会（群馬県草津町） 全建プラザ 「新教育課程について」 8.6 講習会（於日本光学横浜工場） 「建築測量に関する実技演習並びに工場見学」 第1回製図コンクールの実施	5.6 文部省「新高校教育課程編成状況調査」結果発表	
昭和58年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	5.20–21 総会・研究協議会（富山県東砺波郡庄川町 「越中庄川荘」 「工業基礎・工業数理の実践報告」 講演会「建設業の今後の展望と建築教育」 8.9–12 建築科目に関するパソコンの実技指導と実技演習（参加者81名）	11.22 教員養成審議会「教員の養成及び免許制度の改善について」答申	

年	会長および事務局＊	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和59年	(会) 墨田工高校長 楠見 善男 (事) 墨田工高 井上 満	6.15−16 総会・研究協議会（岩手県盛岡市ホテル東日本） 「工業基礎をどのような計画のもとにどのような内容で指導したか」 「工業数理における一考察について」 「パソコンについての実践報告」 映画発表「躍進田無工高・卒業生はいま」 8.1−3 講習会「建築施工実習研究協議会」（於向の岡工高） 第3回製図コンクール	8.8 「臨時教育審議会設置法」公布	
昭和60年	(会) 墨田工高校長 楠見 善男 (事) 墨田工高 井上 満	6.7−8 総会・研究協議会（高山市民文化会館） 「工業基礎の授業について」・「建築技術者に必要な実習内容に関する調査のまとめと分析」・「パソコンを利用した教育内容と，その指導について」 8.1−3「パソコンの実技演習」（於日本工業大学） （参加者42名） 第4回製図コンクール	6.26 臨時教育審議会「教育改革に関する第1次答申」提出	
昭和61年	(会) 墨田工高校長 加地 正義 (事) 墨田工高 佐藤 賢吉	6.6−7 総会・研究協議会（福島市飯坂温泉ホテル聚楽） 「建築科における情報技術教育はどのように計画・実施したらよいか」 「建築製図の指導法について」 8.1−2「建築計画・設備の実験実習」（於蔵前工高） 東京芸大「奏楽室」移築工事現場見学 第5回製図コンクール	6.4 文部省，中等教育改革の推進に関する調査研究協力者会議を設置	
昭和62年	(会) 小石川工高校長 松村 篤躬 (事) 小石川工高 松田 紘	6.12−13 総会・研究協議会（石川県片山津温泉「ホテルながやま」） 「透視図の学習指導について」 「コンピュータによる室内環境測定」 研究視察：「那谷寺」「九谷焼資料館」「成巽閣」 7.31−8.1 実習・実験「鉄筋コンクリートばりの構造実験」（安田学園高等学校） 見学：清水建設ＫＫ技術研究所 第6回製図コンクール	8.20 臨教審解散	
昭和63年	(会) 小石川工高校長 松村 篤躬 (事) 小石川工高 松田 紘	6.10−11 総会・研究協議会（埼玉県産業文化センター）（大宮ソニックシティ） 「ＣＡＩによる建築設計の実践と効果」 「木造実習」二階建住宅の実践 8.4−6「建築施工実習の実践指導について」 （東京工業高校，赤倉研修所） 第7回製図コンクール	4.1 文部省，単位制高校を制度化	
平成元年	(会) 小石川工高校長 加曽利政男 (事) 小石川工高 松田 紘	6.9−10 総会・研究協議会（静岡県焼津観光ホテル「松風閣」） 「赤外線映像装置による温度測定と外壁診断」 「関市立体地図の製作ならびに提示用ＣＡＩの開発」 研究視察「登呂遺跡・同博物館及び芹沢銈介美術館」 7.25−26「設計製図の指導について（ＣＡＤの実技演習と建設会社での利用状況」（埼玉県立大宮工業高校） 参加45名 第8回製図コンクール		

年	会長および事務局＊	研究会の活動	文部省，全国工業高等学校長協会	社会の動き
平成2年	(会) 田無工高校長 清水　守男 (事) 田無工高 赤地　龍馬	7.25-26　総会・研究協議会（神奈川県，湯本ホテルおかだ） 「川崎市におけるインテリジェントスクールの試み」 「コンピュータを授業にどう取り入れたらよいか～ＣＡＤの実践を通しての試案」 創立40周年記念式典 記念講演会「わが国の耐震建築理論」 （東京大学名誉教授　工学博士　梅村　魁先生） 40周年記念誌発行 8.7-8　夏期研究協議会 「透視図の着彩と添景の実技演習」（於：東京工高）		

編　集　後　記

昭和63年11月29日，第１回編集委員会を都立蔵前工高で開催。その後９回の会合を重ね，平成２年３月26日，都立多摩工高での編集委員会を最後に編集完了。この日は春季休業日第１日。正門の桜の花が，東日本建築教育研究会40周年記念誌の編集の終了を共に喜ぶかのように例年より早くほころび始めていた。

この記念誌の編集の基本方針は，１）40周年を礎に，近未来に向けて発展を続けようとする姿を表現する。２）すべての会員校が参加できる内容とする。３）写真・図・表を多くし，文章はできるだけ少なくする。４）内容の構成は31～40周年の10年間を中心にまとめる。必要に応じて，31周年以前のものも加える等とした。

編集委員は，それぞれの職場での校務，さらに各分科会のまとめ役としての仕事を抱えながら，研究会の業績を将来に残すべく，使命感と奉仕の精神を持って作業に当った。途中，編集委員会主査である私が，多忙な職務につき，土田・山崎・大庭の３委員の負担は多大であった。３委員の誠意ある力添えがあればこそ，この記念誌が予定どおり箱根の大会々場にお届けできたことをここに記す。

なお，ご協力いただきました歴代会長をはじめ多くの先輩，加盟校の先生方に衷心より感謝の意を表します。末筆になりましたが，編集，印刷に当たり，実教出版株式会社のご支援を賜りましたことをご報告し，あとがきとします。有難うございました。

（1990年６月　古谷記）

<編集委員>

古　谷　　勉　（都立多摩工高）
土　田　裕　康　（都立蔵前工高）
山　崎　敏　弘　（県立向の岡工高）
大　庭　孝　雄　（県立小田原城北工高）

東日本建築教育研究会40周年記念誌

平成２年７月11日印刷
平成２年７月25日発行
編集　東日本建築教育研究会40周年記念誌編集委員会
編集・制作　スプリング出版企画
発行　東日本建築教育研究会（代表者　清水守男）
印刷　株式会社　胡弦